

茨城県 友部町

北山不動遺跡

第一次 水道タンク建設

第二次 町道2級4号線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

千種重樹編

友部町北山不動遺跡発掘調査会

平成4年4月

序 文



加賀田の連峯を背にして潤沼川が茨城町の方へ流れています。その川の北東一帯にひろがる私たちの町、友部町には遠く縄文時代からすでに人々の居住していたことを示す遺跡が各所に存在しています。

これまで私たちは、この貴重な文化遺産を現状のまま保存し、後世に伝えるためいろいろと努力してまいりました。しかし、ご他聞にもれず私たちの町も都市化や工業化がすすみ、町内のあらゆる所に開発がすすめられてまいりました。更にここ2~3年毎年500人余の人口増もあって、これら貴重な遺跡地にも住宅や公共施設を建てることが多くなってまいりました。このような場合の遺跡については、現状保存ができないので、発掘調査をし、記録を保存することになっています。

最近では、平成4年4月竣工予定の茨城県立総合教育研修センターの石山神遺跡、東原地内の製鉄所あと地、宍戸国際カントリー南側の善九郎遺跡、完全寺うら遺跡、そして今回の北山不動遺跡と数多くの発掘調査を実施してまいりました。

この中で発掘された貴重な出土遺物は、昭和56年度旧宍戸町役場の建物を歴史民俗資料館とし、その中に一部展示保存、そして公開しておりますが、大部分は陽のめをみず仮収蔵庫に眠ったままの状態であります。この膨大な出土遺物の将来については、先人の尊い遺産として歴史民俗資料館を含めて、その保存展示、公開についても考慮しているところであります。

これらの発掘調査をまのあたりにみると、発掘作業にあたられる方々のご努力に感謝するとともに、数千年の昔から不自由に耐えながらも、大自然と共に存し、家庭をつくり子孫をふやして私たちの町の基礎を築いてくれた先人たちの営みに対して、崇高な念を禁じ得ないのであります。

今回の発掘は、平成3年度に完成をみた飯田多目的ダムの水を、潤沼川を通して訪源山浄水場に、更に北山水道タンクにあげて町民に給水するという遠大な計画であり、緊急なものでありましたが、ここに記録としてまとめることができ大変うれしく思っています。

最後にこの調査発掘に真剣にとりくまれた茨城県埋蔵文化財指導員千種先生はじめ作業にあたられた方々、そしてこの方々へ温かいご支援とご激励を賜わりました友部町長、教育委員、文化財保護審議委員のみなさんにも深甚なる感謝を申し上げるとともに、これから発掘調査や文化財の保護についても、より一層のご理解とご協力をお願いたしてあいさついたします。

友部町教育委員会教育長 宮 山 茂 夫

例　　言

- 1 本書は、茨城県西茨城郡友部町大字南友部金平1436～9および友部町大字半町字北山1416～1に所在する北山不動遺跡の第一次・第二次埋蔵文化財確認発掘調査報告書である。
- 2 第一次調査は、水道タンク建設に伴うもので、これをA地区と呼称する。
- 3 第二次調査は、町道2級4号線道路改良工事に伴うもので、これをB地区と呼称する。
- 4 第一次調査は、平成2年6月20日から同年8月18日まで、第二次調査は平成3年8月26日から同年9月30日まで行った。
- 5 調査は、千種重樹（茨城県埋蔵文化財指導員）を担当者とし、第一次調査は町水道課職員と地元作業員、第二次調査は水谷正、飯島栄子を調査補佐員に加え、地元作業員の協力を受けて実施した。
- 6 A地区の調査対象面積は約3000m²、B地区は約5800m²である。
- 7 発掘調査は、可能な限り原位置法を採用した。
- 8 本書に収録した遺構、遺物の写真は、千種重樹が撮影したものを使用した。
- 9 遺物の整理および報告書の作成作業は、調査終了後より平成4年3月30日まで行った。
- 10 整理作業は、主として下記の分担で行った。
千種重樹（遺構図整理、土器・石器実測図、拓影図、トレース、写真図版、本文執筆、レイアウト）
飯島栄子（遺物水洗い、注記、接合資料の抽出、土器接合）
- 11 出土遺物は、友部町教育委員会に一括保管されている。

実測図凡例

- 1 出土遺物の種類は次の記号で区別した。
● 上器 ▲ 自然石 △ 石器
- 2 接合資料は、出土地点番号（遺物番号と同一）、表裏関係（表△・裏▽・立ち▷）、床上レベル（計測単位cm）の順で記載した。

本文目次

A 地区

序文	
例言	
挿図目次	
図版目次	
第一章 緒言	1
第二章 遺跡の位置と自然環境	2
第三章 周辺の縄文遺跡概観	4
第四章 確認発掘調査の概要	7
第五章 土壌群の調査	11
1 第一号土壤	11
2 第二号土壤	12
3 第三号土壤	13
4 第四号土壤	13
5 第五号土壤	15
6 第六号土壤	15
7 第七号土壤	15
8 第八号土壤	17
9 第九号土壤	18
10 第一〇号土壤	19
11 第一一号土壤	19
12 第一二号土壤	21
13 第一二号土壤	22
14 第三四号土壤	23
15 第一五号土壤	23
16 第一六号土壤	24
17 第一七号土壤	27
18 第一八号土壤	28
19 第一九号土壤	28
20 第二〇号土壤	30

21	第二一号土壤	30
22	第二二号土壤	31
23	第二三号土壤	32
24	第二四号土壤	32
25	第二五号土壤	34
26	第二六号土壤	35
27	第二七号土壤	36
28	第二八号土壤	37
29	第二九号土壤	38
30	第三〇号土壤	39
31	第三一号土壤	40
第六章 繩文時代住居址の調査		42
1	第一号住居址	42
第七章 屋外埋甕炉址・石組炉址の調査		46
1	第一号埋甕炉址	46
2	第二号埋甕炉址	46
3	第三号埋甕炉址	47
4	第四号埋甕炉址	49
5	第五号埋甕炉址	50
6	第六号埋甕炉址	50
1	第一号石組炉址	51
第八章 出土遺物の概要		52

B 地 区

第九章 B地区の調査概要		88
第一〇章 土壤群の調査		92
1	第一号土壤	92
2	第二号土壤	92
3	第三号土壤	96
4	第四号土壤	98
5	第五号土壤	100
6	第六号土壤	100
7	第七号土壤	105

8 第八号土壤	106
第一・章 有床平地式住居址の調査	109
第一・二章 近世境界塚の調査	113
第一・三章 まとめ	116
友部町北山不動遺跡発掘調査会役員 A地区	118
発掘作業従事者・整理報告書作成従事者 A地区	118
友部町北山不動遺跡発掘調査会役員 B地区	119
発掘作業従事者・整理報告書作成従事者 B地区	119

挿 図 目 次

A 地 区

第一図	遺跡付近地形図・調査区設定図	3
第二図	遺跡位置図・周辺の縄文時代主要遺跡	6
第三図	トレンチ配置図・遺構分布図	9・10
第四図	第一号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	11
第五図	第二号土壤実測図	12
第六図	第三号土壤実測図・遺物出土状態図	13
第七図	第四号土壤実測図・遺物出土状態図	14
第八図	第五号土壤実測図・遺物出土状態図	16
第九図	第六号 左 , 第七号 右 土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	17
第一〇図	第八号 左 , 第九号 右 土壤実測図・遺物出土状態図	18
第一一図	第一一〇号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	20
第一一二図	第一一二号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	21
第一三四図	第一二三号土壤実測図・遺物出土状態図	21
第一四五図	第一一三号土壤実測図・遺物出土状態図	22
第一五六図	第一四四号土壤実測図・遺物出土状態図	24
第一六六図	第一五五号土壤実測図・遺物出土状態図	25
第一七七図	第一六六号土壤実測図・遺物出土状態図	26
第一八八図	第一七七号土壤実測図・遺物出土状態図	27
第一九九図	第一八八号土壤実測図・遺物出土状態図	28
第二〇〇図	第一九九号土壤実測図・遺物出土状態図	29
第二一一図	第二一〇号 左 , 第二一号 右 土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	31
第二一二図	第二二二号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	32
第二二三四図	第二二三号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図	33
第二二四五図	第二二四号土壤実測図・遺物出土状態図	34
第二二五六図	第二二五号土壤実測図・遺物出土状態図	35
第二二六六図	第二二六号土壤実測図・遺物出土状態図	36
第二二七七図	第二二七号土壤実測図・遺物出土状態図	37
第二二八八図	第二二八号土壤実測図・遺物出土状態図	38
第二二九九図	第二二九号土壤実測図・遺物出土状態図	39

第三〇図	第三〇号土壤実測図・遺物出土状態図	40
第三一図	第二一号土壤実測図・遺物出土状態図	41
第三二図	第一号住居址実測図・遺物出土状態図・接合関係図	45
第三三図	第一号埋甕炉址実測図	47
第三四図	第二号埋甕炉址実測図	48
第三五図	第三号埋甕炉址実測図	48
第三六図	第四号埋甕炉址実測図	49
第三七図	第五号埋甕炉址実測図	50
第三八図	第一号石組炉址実測図	51
第三九図	第一号土壤出土繩文土器実測図・拓影図	56
第四〇図	第四号土壤 上、第八号土壤 下 出土繩文土器拓影図	57
第四一図	第五号土壤出土繩文土器拓影図 一	58
第四二図	第五号土壤出土繩文土器実測図・拓影図 二	59
第四三図	第五号土壤 上、第六号土壤 下 出土繩文土器拓影図	60
第四四図	第七号土壤出土繩文土器実測図・拓影図	61
第四五図	第一〇号土壤出土繩文土器実測図・拓影図 一	62
第四六図	第一〇号土壤出土繩文土器拓影図 二	63
第四七図	第一一号土壤 上、第一二号土壤 下 出土繩文土器拓影図	64
第四八図	第一三号土壤 上、第一八号土壤 下 出土繩文土器拓影図	65
第四九図	第一四号土壤、第一五号土壤 右下 出土繩文土器拓影図	66
第五〇図	第一六号土壤出土繩文土器実測図・拓影図	67~68
第五一図	第一七号土壤出土繩文土器拓影図	69
第五二図	第一九号土壤 上、第二二号土壤 下 出土繩文土器拓影図	70
第五三図	第二〇号土壤出土繩文土器実測図・拓影図	71
第五四図	第二一号土壤出土繩文土器拓影図	72
第五五図	第二三号土壤出土繩文土器実測図・拓影図 一	73
第五六図	第二三号土壤出土繩文土器拓影図 二	74
第五七図	第二四号土壤出土繩文土器拓影図	75
第五八図	第二五号土壤 上、第二七号土壤 下 出土繩文土器実測図・拓影図	76
第五九図	第二六号土壤出土繩文土器拓影図	77
第六〇図	第二九号土壤出土繩文土器実測図・拓影図	78
第六一図	第一号住居址出土繩文土器実測図・拓影図	79~80

第六二図	埋甕炉址出土縄文土器実測図・拓影図	81~82
第六三図	トレンチ出土縄文土器実測図・拓影図	83
第六四図	調査区出土石器実測図	84
第六五図	調査区出土石器実測図 二	85

付 表 目 次

第一表	ピット一覧表	43
第二表	出土遺物数一覧表	52
第三表	縄文中期土器区分表	53

B 地 区

第六六図	B地区調査区位置図	89
第六七図	B地区グリット設定図・境界塚位置図	90
第六八図	グリット土層断面図	91
第六九図	第一号土壤実測図・遺物出土状態図	93
第七〇図	第二号土壤実測図・遺物出土状態図	94
第七一図	第一号 上段 , 第二号 下段 土壤出土土器実測図・拓影図	95
第七二図	第三号土壤実測図・遺物出土状態図	97
第七三図	第四号土壤実測図・遺物出土状態図	98
第七四図	第三号 上段 , 第四号 下段 土壤出土土器拓影図	99
第七五図	第五号土壤実測図・遺物出土状態図	101
第七六図	第五号土壤出土土器拓影図	102
第七七図	第五号土壤出土石器実測図	103~104
第七八図	第六号土壤実測図・遺物出土状態図	105
第七九図	第七号土壤実測図・遺物出土状態図	106
第八〇図	第八号土壤実測図・遺物出土状態図	107
第八一図	第六号 上段 , 第七号 中段 , 第八号 下段 土壤出土土器拓影図	108
第八二図	有床平地式住居址実測図	110
第八三図	第八号土壤 上段 , 有床平地式住居址 下段 , 出土土器実測図・拓影図	111
第八四図	第11グリット出土石器実測図	112
第八五図	境界塚測量図	114
第八六図	境界塚A-Bセクション 南北 盛土土層断面図	115

図版目次

A 地区

- 図版第一 遺跡の遠景 北西側より ・ 遺跡より眺めた東方の景観
- 図版第二 遺跡の現状 南側より ・ 発掘調査後の遺跡の全景 東側より
- 図版第三 現地説明会風景 外国人も参加 第四号埋甕炉址付近 ・ 発掘調査風景 第二、二三、二七号土壤付近
- 図版第四 発掘調査風景 第四号土壤付近 ・ 第1号トレンチ試掘風景 西側より
- 図版第五 第1号トレンチ試掘後の状況 西側より ・ 第2号トレンチ試掘風景 西側より
- 図版第六 第2号トレンチ試掘後の状況 西側より ・ 第3号トレンチ試掘風景 西側より
- 図版第七 第3号トレンチ試掘後の状況 西側より ・ 第一号土壤遺物出土状態 南側より
- 図版第八 第一号土壤全景 南側より ・ 第二号土壤全景 南側より
- 図版第九 第三号土壤全景 南側より ・ 第四号土壤遺物出土状態 東側より
- 図版第一〇 第五号土壤遺物出土状態 南側より ・ 第六号 上、第七号 下 土壤遺物出土状態 東側より
- 図版第一一 第七号土壤遺物出土状態 西側より ・ 第八号 下、第九号 上 土壤遺物出土状態 西側より
- 図版第一二 第一〇号土壤遺物出土状態 東側より ・ 第一〇号土壤遺物出土状態 東側より
- 図版第一三 第一〇号土壤閃石出土状態 西側より ・ 第一一号土壤遺物出土状態 南側より
- 図版第一四 第一二号土壤遺物出土状態 東側より ・ 第一二号 下、第一三号 上 土壤全景 東側より
- 図版第一五 第一四号土壤全景 南側より ・ 第一五号土壤全景 南側より
- 図版第一六 第一六号土壤遺物出土状態 南側より ・ 第一六号土壤全景 南側より
- 図版第一七 第一七号土壤全景 南側より ・ 第一八号土壤全景 南側より
- 図版第一八 第一九号土壤遺物出土状態 南西側より ・ 第二〇号 下、第二一号 上 土壤全景 南側より
- 図版第一九 第二二号 上、第二三号 下 土壤全景 西側より ・ 第二四号土壤遺物出土状態 南側より
- 図版第二〇 第二四号土壤全景 南側より ・ 第二五号土壤遺物出土状態 南側より
- 図版第二一 第二六号土壤全景 南側より ・ 第二七号土壤遺物出土状態 南側より
- 図版第二二 第二八号土壤遺物出土状態 東側より ・ 第二九号土壤遺物出土状態 東側より
- 図版第二三 第二九号土壤遺物出土状態 西側より ・ 第三〇号土壤遺物出土状態 西側より

- 図版第二四 第三一号土壤遺物出土状態 南側より・第一号住居址全景 南側より
- 図版第二五 第一号埋甕炉址土器埋設状態 南側より・第二号埋甕炉址土器埋設状態 南側より
- 図版第二六 第二号埋甕炉址上器埋設状態 西側より・第四号埋甕炉址土器埋設状態 西側より
- 図版第二七 第六号埋甕炉址土器埋設状態 南側より・第一号石組炉址全景 南側より
- 図版第二八 第一号上塙出土土器
- 図版第二九 第四号 上・第五号 下 土壤出土土器・石器
- 図版第三〇 第五号 上・第六号 下 土壤出土土器
- 図版第三一 第七号土壤出土土器
- 図版第三二 第八号 上・第一〇号 下 土壤出土土器
- 図版第三三 第一〇号土壤出土土器
- 図版第三四 第一〇号 上・第一一号 下 土壤出土石器
- 図版第三五 第一一号 上・第二二号 中 第一三号 下 土壤出土土器
- 図版第三六 第一六号上塙出土土器
- 図版第三七 第一七号 上・第一八号 下 土壤出土土器
- 図版第三八 第一九号 上・第二〇号 下 土壤出土土器
- 図版第三九 第二二号 上・第二三号 下 土壤出土土器
- 図版第四〇 第二三号 上・第二四号 下 土壤出土土器
- 図版第四一 第二五号 上・第二六号 下 土壤出土土器
- 図版第四二 第二七号 上・第二九号 下 土壤出土土器
- 図版第四三 第一号住居址出土土器
- 図版第四四 埋甕炉址出土土器 一
- 図版第四五 埋甕炉址出土土器 二
- 図版第四六 トレンチ出土土器・土製品
- 図版第四七 上塙・トレンチ出土石器

B 地 区

- 図版第四八 伐樹後のB地区の現状 南側より
- 調査風景 第一、二、三号土壤付近・南側より
- 調査風景 第7、8、9グリット付近・北側より
- 図版第四九 第1号グリット全景、土層断面 南側より

- 第2号グリット全景，土層断面 南側より
- 第5号グリット全景，土層断面 南側より
- 図版第五〇 第6号グリット全景，土層断面 南側より
- 第7号グリット全景，土層断面 南側より
- 第14号グリット全景，土層断面 南側より
- 図版五一 第1号土壤遺物出土状態 西側より
- 第二号土壤遺物出土状態 西側より
- 第二号土壤遺物出土状態 東側より
- 図版五二 第三号土壤遺物出土状態 西側より
- 第四号土壤遺物出土状態 西側より
- 第五号土壤遺物出土状態 西側より
- 図版五三 第五号土壤石器出土状態 南側より
- 第六号土壤遺物出土状態 西側より
- 第七号土壤遺物出土状態 東側より
- 図版五四 第八号土壤遺物出土状態 西側より
- 第八号土壤遺物出土状態 北側より
- 有床平地式住居址全景 北側より
- 図版五五 境界塚の現状 東側より
- 境界塚の調査風景 北側より
- 境界塚盛土土層断面 A-Bセクション・東側より
- 図版五六 B地区出土遺物 一
- 図版五七 B地区出土遺物 二
- 図版五八 B地区出土石器 砧石，凹石，石皿，石劍，石棒

第一章 緒 言

友部町は茨城県のほぼ中央に位置し、水戸市に近く、JR常磐線、水戸線の分岐点である友部駅を擁するという立地条件から、昭和63年には人口が3万人に達した。

昭和30年代には減少の傾向がみられたが、40年代の高度経済成長期以降は人口増加が続いている。特に40年代には旭町を中心に宅地造成がすすみ、人口増加率は急激な伸びを記録した。

交通の要所と生活基盤の整備に加えて、宅地開発が人口増加に拍車をかけているといえよう。

人口の増加にともない、都市化の傾向が進展するにつれて、生活環境整備が行政の課題となってきたことは当然の趨勢である。

町では生活環境の整備として、公共下水道の設置、環境センター（ゴミ処理）の建設、幹線道路網の整備、南友部地区の土地区画整理事業の推進、友部駅北側開発など都市基盤の充実に努めている。また、調和のとれた地域産業の振興として、林業の近代化、北山国有林の開発などをすすめている。

友部町は「多極分散型国土形成促進法」に基く、茨城県の「振興拠点地域」の重点整備地区にあげられている。このように豊かで快適な町づくりをめざしている友部町にとって、上水道の整備もまた不可欠の急務といえよう。

こうした実情をふまえ、町水道課では南友部字金平に穴戸地区を対象とする水道タンクを建設することになった。ところが、建設予定地は周知の北山不動遺跡のエリアに該当するため、この遺跡の取り扱いについて友部町教育委員会より水戸教育事務所社会教育課へ、発掘調査要否のための現地確認調査要請があった。

平成2年6月8日、現地調査の結果、とりあえず水道タンク建設予定地についてトレンチ法による予備調査を行い、遺構の有無を確認した後にあらためて検討することにした。

予備調査は、千葉重樹（県埋蔵文化財指導員）を担当者とし、町水道課職員および地元作業員の協力を受け、調査期間を6月20日から10日間とした。

この予備調査の結果、堅穴住居址、土壙、屋外か址などの遺構が検出されたので、トレンチを拡張して確認発掘調査を実施することになった。

このため発掘調査会（宮山茂夫会長）を結成し、規約・会計規定・事業計画・予算などの審議を経て、平成2年7月17日から同年8月18日まで確認発掘調査を実施し、後述するような保存のよい土壤群を多数調査することができた。

調査最終日の8月18日には現地説明会（外国人も2名参加）を行い、遺跡の性格、遺構や出土遺物の説明をして遺跡の保護を強調した。

参考文献 「友部町史」

第二章 遺跡の位置と自然環境

北山不動遺跡は、茨城県西茨城郡友部町大字南友部金平1436～9に所在する。

県立友部高校入口付近から、S K B 友部射撃場と白鳥湖の傍らを通って北山不動尊の南側の山道を登って行くと新池がある。右折して町営グランドを左に見ながら進むと常陸霧園に至る。

霧園管理事務所の南側の標高98mの台地平坦部が本遺跡である。

友部町は県のほぼ中央に位置し、北部と西部は笠間市、東部は東茨城郡内原町・同茨城町、南部は岩間町に接する。

町域の南から東へJR常磐線が通るほか、友部駅を分岐点として栃木県小山方面を結ぶJR水戸線が西に向っている。また、北部を国道50号が横断し、南東部には常磐自動車道が走る。

町域北西部は八溝山地、鶏足山塊末端の丘陵性山地で、友部丘陵と呼ばれている。友部丘陵は鶏足山塊の南縁に発達している丘陵で、東は水戸市西北部から西は笠間・岩瀬盆地周縁まで東西に細長く帯状に分布する。狭義には友部町・内原町の丘陵をいうが、標高は50～100mで、比較的起伏が少なく、かなり広い平坦面を残している。更新世の海成砂礫層からなり、上部にローム層を載せている。丘陵上の平坦面や緩斜面はかなり耕地化され、丘陵斜面はゴルフ場にも利用されている。

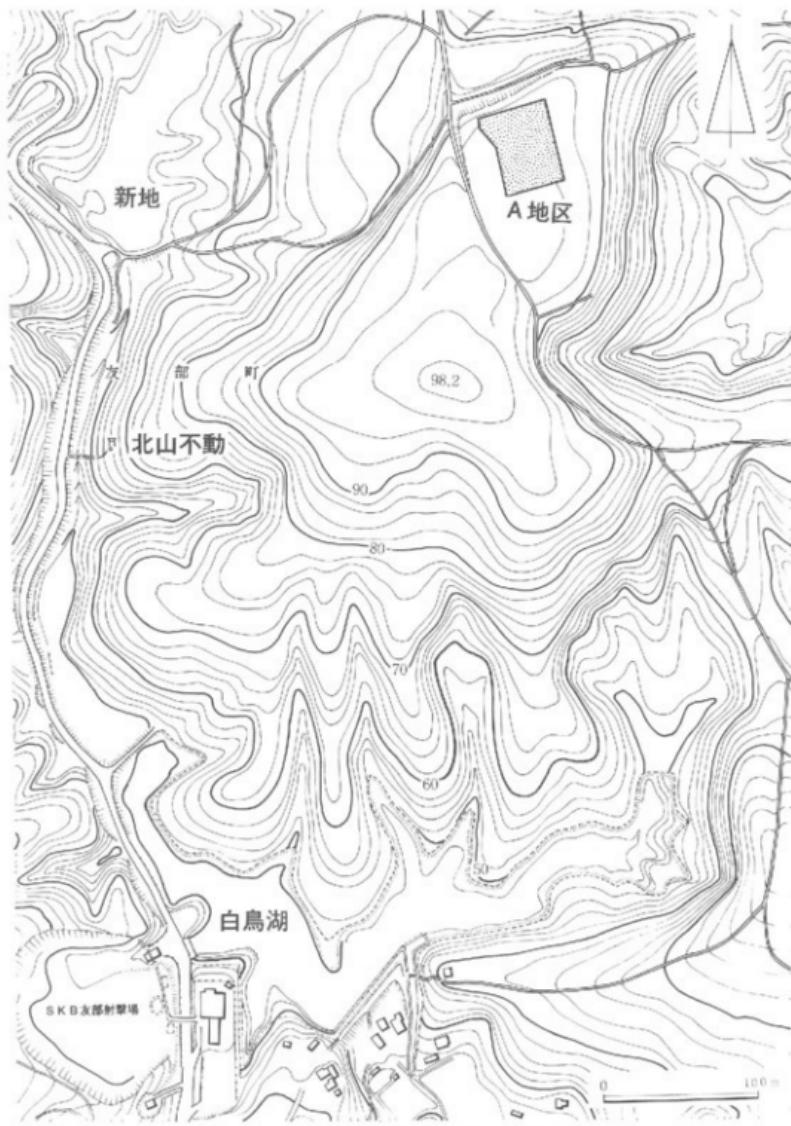
中・南部は東茨城台地の一部をなし、涸沼川・涸沼前川・枝折川の開析平野が台地を刻んでいる。北西部の友部丘陵を構成している砂層を友部層と呼んでいるが、淘汰のよい均質な細粒の砂層で、一部にはクロスラミナの発達した砂鉄の中粒砂を挟み、南友部地区では昭和30年代にこの砂層の中から砂鉄を探掘していた。

今回の調査区は、この砂鉄採掘のための事務所があった場所で、調査区西側の町営グランドに面する斜面に砂鉄層の露出部を見ることがある。

一方、縄文人の常食であった動・植物に目を転ずると、茨城町の小堤貝塚（昭和59年発掘調査）からは、貝類、魚類、カイツブリ、ウミウ、ヒシクイ、カモ類、ワシ類、キジ、ノウサギ、ムササビ、イヌ、イノシシ、ニホンジカなどの動物遺存体が多数出土しており、涸沼川流域という共通性を考えた場合、友部台地もこれらの鳥・獣類の生息に適していたことは疑う余地のないところである。食用植物もクルミ、ドングリ、クリ、キイチゴ、ヤマノイモ、アケビ、ヤマブドウなど豊かな稔に恵まれていたことであろう。

縄文人はこの友部の台地に居を構え、豊かな自然環境に順応しつつ狩猟・漁労の活動を中心とした生活を営んでいたのである。

友部町の自然環境は、概略以上のように説明できると思う。



第一図 遺跡（発掘調査区）付近地形図

第三章 周辺の縄文遺跡概観

昭和62年茨城県教育委員会発行の『埋蔵文化財包蔵地地名一覧表』には、友部町の縄文時代遺跡24か所が登載されている。ところが、平成2年発行の『友部町史』によると36か所の縄文遺跡が紹介されている。

これは、町史編纂の資料とするために綿密な分布調査が行われた結果であろう。これらのすべてを網羅することは紙数の関係で困難なので、主要な遺跡を略記すると次のようにまとめられるかと思う。

① 柏井遺跡（中期～晚期）

涸沼川とその支流である枝折川の合流点から、枝折川の上流に向って約1.5kmの北側の台地に位置する。台地は標高27mから30mで、縄文土器片が豊富な分布地である。

採集した土器は、口縁部、底部、胴部であるが、阿玉台式、加曾利EⅡ式のほか、加曾利B式、安行Ⅱ式、安行Ⅲ式土器などで、中期から晚期にいたる長期にわたる遺跡であることが確認された。このほか、石斧、石棒の破片、定角石斧などを採集したほか、県立歴史館に保管されている十版が発見された遺跡でもあって、後期、晚期の信仰や生活様式を考察するのに重要な遺跡である。

② 小原神社周辺遺跡（中期）

国道50号線の流川地内から大原小学校を経て青木地内に通ずる町道を入ると上郷小原神社が鎮座する。この神社を取りかこむように遺跡がある。遺跡のある台地の南側には涸沼前川が流れる。

この川にかかる川原橋あたりから遺跡の南東側にあたる不動谷津に向って谷津が入り込む小川があり、涸沼前川に流れ込む。遺跡はこの舌状台地のふもとあたり、標高75mから85mの平坦部と緩斜面である。神社の東側から南側にかけて土器片が多量に散布している。

中期の加曾利EⅠ式、EⅡ式が多く、神社の南西側からは阿玉台式土器が確認された。

③ 松崎台遺跡（中期）

松崎地内にあり、南側を涸沼前川が流れている。南東側には槐山地があり、涸沼前川からの谷津が入り込んでいる。

標高60～70m、台地の頂部は平坦で広く、縄文土器片が多量に散布し、口縁部、胴部の隆起帶のあるものや、沈線文のある破片が多く、加曾利E式や阿玉台式の破片が中心である。

④ 橋爪遺跡（中期～後期）

遺跡の範囲は常磐線の西側から、老人憩の家「はなさか」付近で、南側には涸沼川が広がる。

その先端部までの台地が遺跡である。分布調査の結果、縄文土器片の散布しているのは南側の台地の先端部斜面に多く常磐線沿いには少ない。加曾利EⅡ式や安行式土器片が多い。

⑤ 石山神遺跡 (先土器～前期)

北山不動尊の山道を登って行くと新池に至る。この新池の急カーブの道を登りつめると、標高94.8mの3叉路にあたる。この3叉路から笠間市外3町広域齊場に向う途中の標高100mの位置に本遺跡がある。ここからは友部町の中心部や平地の広い範囲を視野に取めることができる。

遺跡の北側には標高112.1mの山があり、この山の南側の緩斜面は山林になっている。

平成元年9月に茨城県教育財團が茨城県立総合教育センターの建設に伴い、茨城県教育委員会の委託を受けて発掘調査を行った。

その結果、縄文時代早期後半と前期に位置づけられる竪穴住居址5軒、炉穴25基、土壙500基、狩猟用の落し穴25基などが確認された。

遺物としては、琥珀の玉、蛇紋岩の首飾り、滑石の玦状耳飾りなどの石製装飾品や石鏃、搔器、石斧、磨石、敲石、凹石、石皿などの石器のほか、先土器時代のナイフ型石器や尖頭器も出土している。



第二図 遺跡位置図・周辺の縄文時代主要遺跡

- 印 北山不動遺跡
- 1 柏井遺跡 2 小原神社周辺遺跡 3 松崎台遺跡 4 橋爪遺跡
- 5 石山神遺跡

第四章 確認発掘調査の概要

1 予備調査

遺跡の現状は伐採された栗の木が未整理のまま放置されていたので、まずその整理から始まった。予備調査の範囲は、水道タンク建設予定敷地約3,000m²のうち、急斜面を除く平坦部について教育委員会と担当者千種重樹の現地踏査に基づき、教育委員会の見解、採集遺物、立地条件、表土の観察などを総合して、東西方向に平行する3本のトレンチを設定した。

各トレンチの幅は2mで、長さは1T52m, 2T48m, 3T47mである。

かなり太い栗の根株が残っていたので、トレンチ設定が困難かと思われたが、各トレンチ間を7mとすることで根株を完全に回避することができた。

トレンチの土層断面は、各トレンチとも層の厚さに著しい変化は認められない。表土は平均25cm前後の深さがあり、東側は浅く、西側が深くなる傾向がみられる。これは西側の斜面に向って表土が次第に流れ込んだものであろう。

表土はローム粒子を含んだ暗褐色を呈する。表土の下に15~35cmの黒褐色土が堆積してローム層に移行する層序を示している。これは各トレンチとも共通しているが、中央部より東側の表土の下は、他の堆積土がなくローム層に移行している。

トレンチの発掘が進むにつれて、随所に土壤や竪穴住居らしい遺構が現れた。ほとんどはトレンチ内の部分検出であるが、予備調査はプランの確認だけで終らせた。

この時点で、あらためてトレンチを拡張して遺構の全容を把握するための発掘調査が確定的となった。予備調査において検出された遺構の数は下記のとおりである。

第1トレンチ	土壤	9基
第2トレンチ	土壤	6基
	炉址	1基
第3トレンチ	土壤	3基
	竪穴住居址	1軒

2 確認発掘調査の方法

予備調査において設定したトレンチの総面積は296m²である。これは調査区全体の面積からみれば決して充分な面積とはいえない。しかし、充分とはいえないトレンチ内だけでも上記の遺構が検出されたため、トレンチ外にも遺構が埋没している可能性も考えられるので、915m²の表土除去を行った。

調査区は5m方眼のグリッドを設定した。グリッドは南北方向に縦軸をとり、これに直交する東西方向を横軸とし、前者にはアルファベット記号、後者にはアラビア数字（算用数字）を用いて標記した。

竪穴住居址と土壤の発掘に当っては、原則として原位置のまま遺物を柱状に残し、出土地点、

床上レベル、表裏関係などを記録した後で収納する方法をとった。

いわゆる「原位置論による発掘法」である。また、完形品や大形破片については、時間の許す限り実測図にその形を記録することにつとめた。

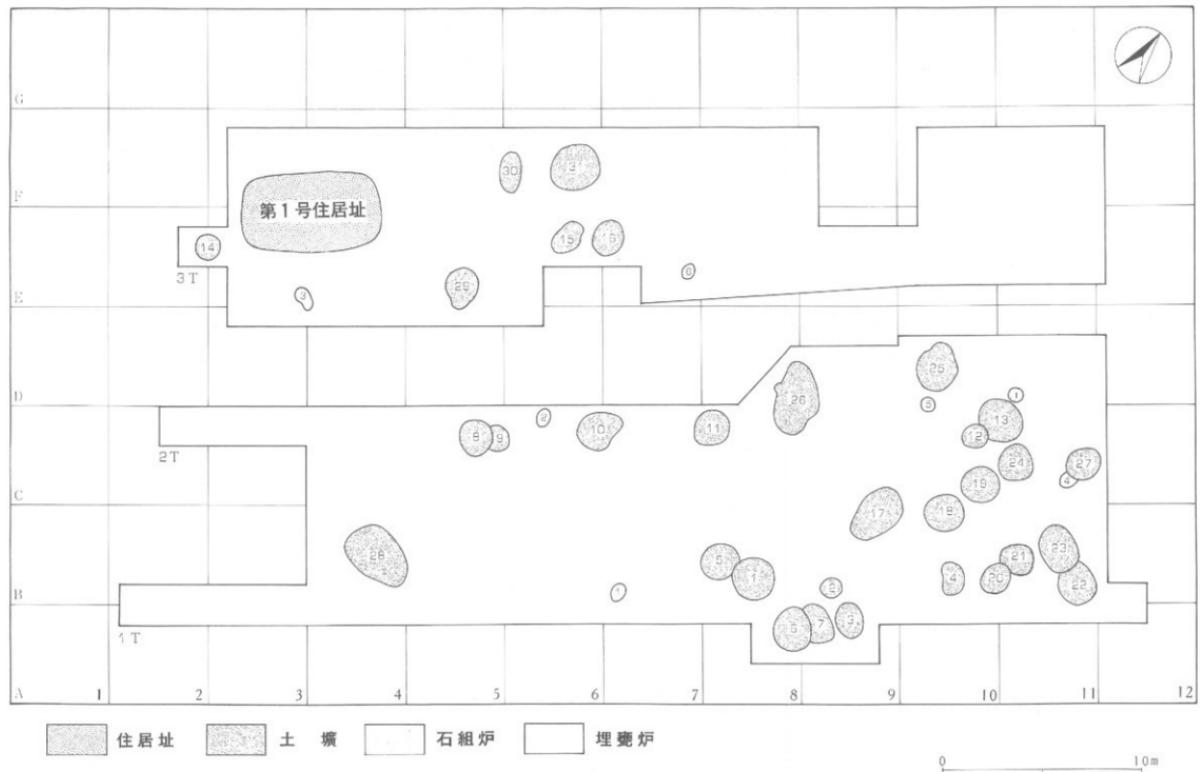
3 遺構の種類

発掘した遺構は、縄文時代中期前葉から後期後葉に至る竪穴住居址、土壙、複式かきを含む屋外埋葬炉などである。種類と数は下記のようにまとめられる。

- | | | |
|------------|-----|-----------|
| ① 竪穴住居址 | 1軒 | 縄文時代中期 |
| ② 土 壙 | 31基 | 縄文時代中期～後期 |
| ③ 屋外複式埋葬炉址 | 1基 | 縄文時代中期 |
| ④ 屋外埋葬炉址 | 4基 | 縄文時代中期 |
| ⑤ 石圓炉址 | 1基 | 縄文時代中期 |

こうした遺構は、調査区域に隣接する南東側の栗林(約5,000m²)にも確實に拡散しているので、この区域だけを考えても、大集落遺構が埋没しているように思われる。

先史時代の石山神遺跡と至近距離にある本遺跡は、友部町の原始・古代の歴史を叙述する上で、極めて重要な地位を占めるものと考えられる。



A 地区の遺構と遺物

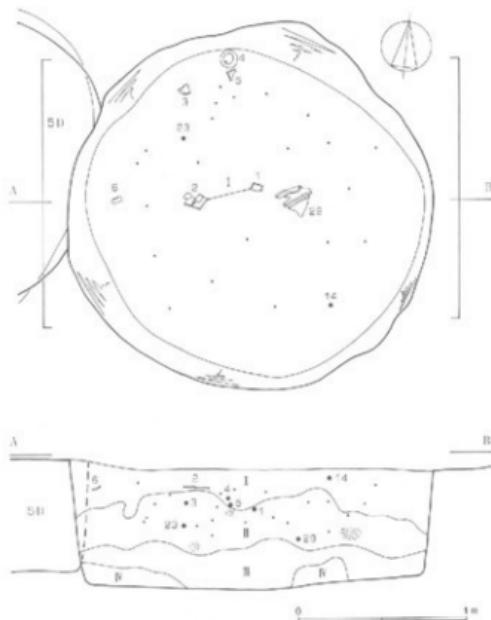
第五章 土 壤 群 の 調 査

1 第一号土壤 (第四図, 図版第七・八)

本土壤は、第1トレンチB-7より検出された。形状はおおむね円形で、開口部の大きさは、東西215cm、南北213cm、中心部の深さは72cmを測る。

底径は東西200cm、南北190cmで底面もほぼ円形である。遺存状態は良好である。

A-Bセクションの南側の底面は非常に硬く、人為的に踏み固めたと思われる痕跡が窺われる。底面は平坦で硬度3に相当する。掘り込みの形状は円筒状を呈する。壁面崩落は認められない。埋没土は4層に区分できる。Iは黒色土がベースでローム粒子と鹿沼粒子を混入する暗褐色土、IIはローム粒子と鹿沼粒子の混合土で、大小の鹿沼ブロックが散在する黄褐色土、IIIはIよりも黒の色調が濃く粘性ブロックが点在する黒褐色土、IVは粘性ロームである。



第四図 第一号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

この埋没土の性状と堆積状態は、土砂が周囲から自然に流入したものではなく、明らかに短時間に埋め戻されたものであろう。

土壤内における遺物の出土状態は、平面的に観察すると全面にまばらに散在するが、層位的にはⅠとⅡに集中し、下層からは全く出土していない。この状態は、埋没土の埋め戻しと土器破片の投棄との間に密接な関係があるようと思われる。

2 第二号土壤（第五図、図版第八）

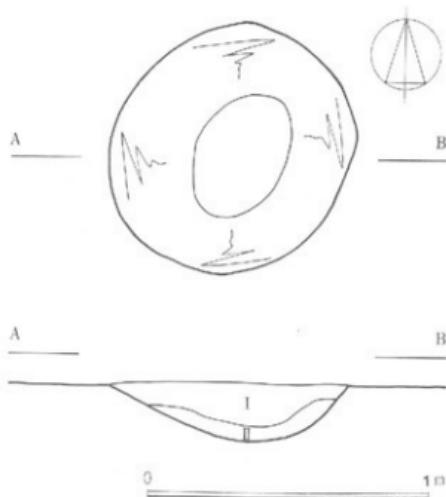
第1トレンチB-9より検出された。第1号土壤の北側3mほどの位置である。

開口部のプランは円形で、東西85cm、南北90cm、中心部の深さは21cmである。

底面は南北方向に長い椭円形状を示し、底径は東西33cm、南北45cmでやわらかく、第五図の断面のとおり舟底状を呈する。壁面はやわらかく崩れ易い。

埋没土は2層に区分される。Ⅰは黒色土でわずかにローム粒子を混入し、Ⅱは明褐色土でローム粒子を多量に含んでいる。Ⅱはローム層を攪拌した色相といえる。

規模、埋没土の性状、深さ、遺物の出土が皆無であることなどから判断すると、土壤とはいひ難く、風倒木痕とした方がよさそうである。



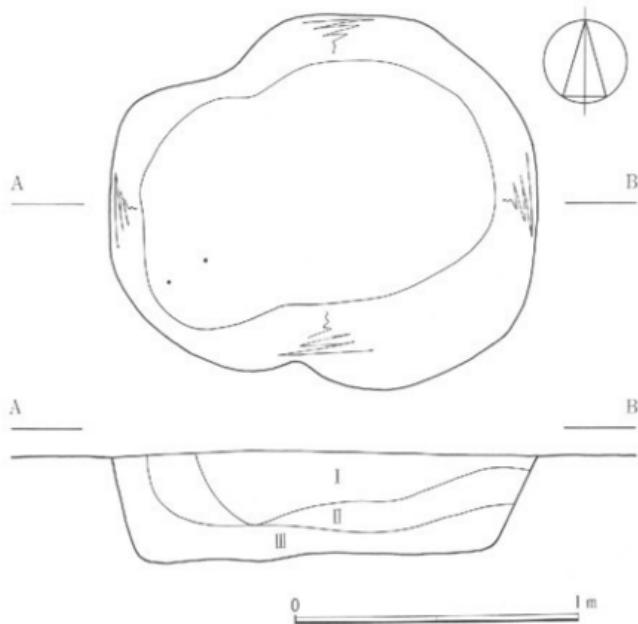
第五図 第二号土壤実測図

3 第三号土壤（第六図、図版第九）

本土壤は、第1トレンチA-9より検出された。第二号土壤の東側1mほど位置である。形状は、開口部の大きさが東西150cm、南北130cm、東側を基部とする不倒翁形を呈する。中心部の深さは35cmを測る。底径は、東西125cm、南北85cmで、底面は不整橢円形である。断面形によると、周壁は斜めに掘り込まれており、底面は平坦で固くしまっているが、中央付近には浅い凹凸が認められる。周壁の崩落はなく遺存状態は良好である。

埋没土は、Iがやわらかい暗褐色土、IIはロームブロックを多量に混入する黄褐色土、IIIは明褐色土である。この層序のあり方は明らかに人為的埋め戻しである。

出土遺物はわずかに土器破片2個のみである。



第六図 第三号土壤実測図・遺物出土状態図

4 第四号土壤（第七図、図版第九）

第1トレンチB-10より検出された。表土を除去する時点で若干の土器破片が表土中に含まれていたので、土壤の存在を予知できた。

形状は、南北方向に長い不整橢円形で、開口部の大きさは東西117cm、南北195cm、中心部の深

さは37cmを測る。底径は東西100cm、南北143cmで、底面は長方形に近い不整橢円形を呈している。遺存状態は良好である。

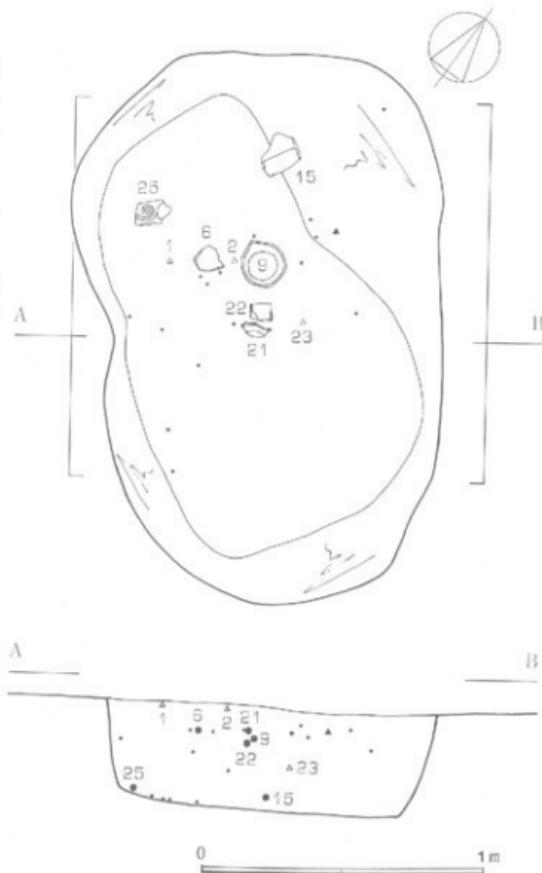
A-Bセクションで断面形をみると、周壁は斜めに掘り込まれている。底面は平坦で全体に固くしまっており、踏み固めたような痕跡が認められる。底面硬度は3に相当する。

埋没土は明瞭な黒褐色土の單一層で、土層を区別できるような異質の土砂は全く混在していなかった。この埋没土の性状と堆積状態は、土砂が周囲から自然に流入したものではなく、明らかに短時日に埋め戻された

ものであろう。

土壤内における遺物の出土状態をドットマップによって平面的に観察すると、周縁部は少なく、中央付近に集中的に認められる。

これを垂直分布に投影すると、層位的には底面から確認面まで平均に分布しており、特徴的な変化や傾向を指摘することはできない。



第七図 第四号土壤実測図・遺物出土状態図

5 第五号土壌（第八図、図版第一〇）

本土壌は、第一号土壌の西側B-8より検出された。トレンチ拡張によって検出した土壌である。開口部の東側が第一号土壌によってわずかに切られているが、開口部の形状は円形である。

開口部の大きさは、東西220cm（推定）、南北225cm、深さは72cmを測る。

底径は、東西190cm、南北195cmで、底面の形状もおむね円形である。底面は平坦で固く、硬度は3に相当するだろう。北壁際に小ピットが1個存在する。保存状態は良好である。

断面図のA-Bセクションで観察すると、周壁の掘り込みは東側を除いてラスコ状を呈するが、西側の底部が大きく外方に開く東西非均衡の形状である。

埋没土は、明瞭な区分線をもって3層に分離され、次のように説明できる。

Iは黒褐色土で、黒色土をベースにローム粒子およびローム小ブロックが点在する。IIは褐色土でローム粒子を多量に含んだ搅拌土砂である。IIIは黒色土とロームを搅拌した暗褐色土である。

埋没土は以上のように説明でき、入為的に埋め戻されていることは確実である。

出土遺物の総数は56個で、その出土状態を平面分布で観察すると、一つの特長をもっている。

それは、周壁周縁部の出土が少なく、南東から北西に向って扇状に散在していることである。

垂直分布では、下層には少なく、大部分がIの黒褐色土層中にまとまりを示している。つまり大小の破片がほぼ同一レベル上に集中していることになる。

6 第六号土壌（第九図、図版第一〇）

第1トレンチ拡張部A-8~9より検出された。

形状は南側に膨らむ格好の楕円形を呈し、開口部の大きさは東西180cm、南北230cm、深さ52cmを測る。底径は東西160cm、南北200cmで、底面も開口部と同様に東側に膨らむ不整楕円形である。断面形をみると、周壁は斜めに掘り込まれており崩落は認められない。底面は鹿沼層に達しているが、粘性ロームを固く踏みしめておりおむね平坦である。

埋没土は、黒褐色土だけが充満し、埋没土断面の精査によっても土層を区別し得るような変化は全く認められなかった。

遺物の出土状態を平面分布に記録したドットから観察すると、分布図の左下、つまり南から北に向って直線状にすべての遺物が散在し、これ以外の場所は皆無である。

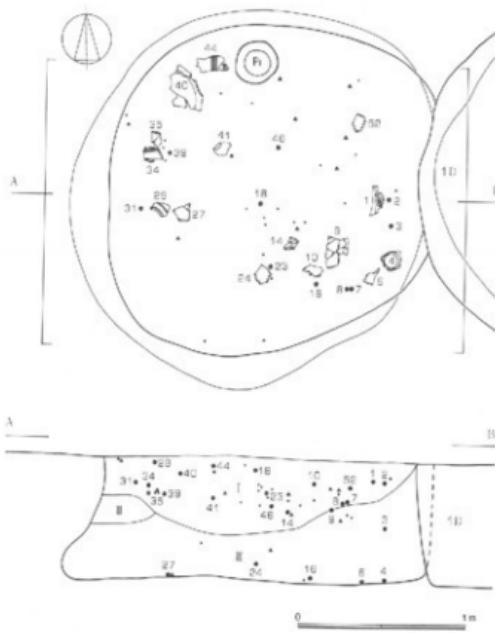
この事象は、遺物廃棄の方向性を示唆しているものと考えられる。

7 第七号土壌（第九図、図版第一〇・一一）

本土壌も、第1トレンチ拡張部A-9より検出された。第六号土壌と重複している。

第六号土壌の東側に位置し、西側の周壁付近が第六号土壌によって切られているが、保存状態は良好といえるだろう。

形状は、東側に膨らむ不整楕円形で、開口部の大きさは東西175cm（推定）、南北230cm、深さ



第八図 第五号土壤実測図・遺物出土状態図

は27cmである。底径は、東西150cm、(推定)、南北210cmで、底面も開口部と同様の不整梢円形を呈する。

断面形を観察すると、東壁は斜めに掘り込まれており、底面は平坦で固くしまっている。

西壁は第六号土壤に切られているが、東壁と同様の掘り込みであろうと想定される。底面中央部の東寄りの位置に小ピット1個が存在する。口径18×12cm、深さ16cmである。

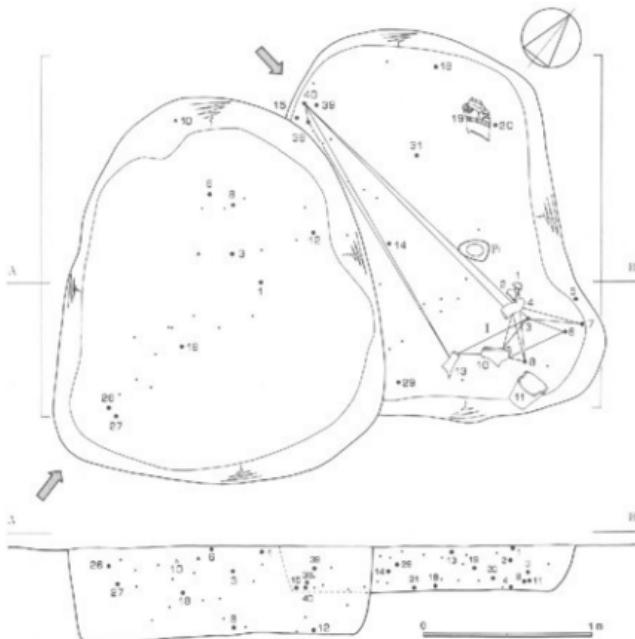
埋没土は、黒褐色土の單一層で、半載発掘方式による断面で土層を精査しても、層相の変化は全く認められなかった。

遺物の出土状態を平面分布で観察すると、他の土壤には見られない特長をもっている。それは遺物を西から東に向って投棄した際に破損したものと思われる同一個体の破片が、遺物番号40を基点として扇状に拡散していることである。

垂直分布では、下層から確認面付近まで全体に平均に散在している。

この事象は、遺物の一括廃棄の同時性と方向性を示唆するもので、接合線のあり方が端的にそれを物語っているといっても過言ではあるまい。

これは、土壤の時期決定に有力な資料となるものである。



第九図 第六号、第七号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

8 第八号土壠（第一〇図、図版第一一）

本土壠は、第2トレンチC-5より第九号土壠と重複して検出された。プラン確認の段階では埋没土に全く変化がみられず、土壠間の切り合いも不明瞭であった。完掘後の底面の状態を検討した結果、第一〇図に示すとおり、第九号土壠を西側から一部破壊して第八号土壠が構築されたことが判明した。したがって、新旧関係は、第九号土壠が古く、第八号土壠が新らしい。

形状は楕円形で、開口部の大きさは、東西153cm、南北182cm、中心部の深さは53cmを測る。

底径は、東西110cm、南北140cm、底面もほぼ楕円形である。底面は鹿沼層に達しているが、平

坦で固くしまっている。中央部の西壁寄りにピットが1個存在する。口径50×20cm、深さは10cmである。

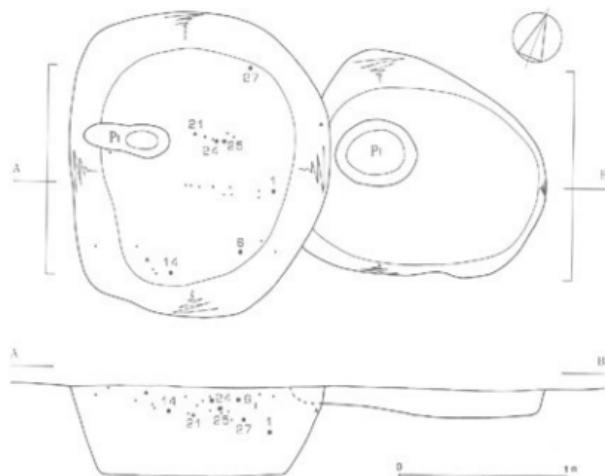
埋没土は、ローム粒子と鹿沼粒子を混入する黒褐色土が充満し、層相の変化は認められない。

この埋没土の状態は、周囲の土砂の自然流入ではなく人為堆積である。

土壤内の遺物出土状態を平面分布のドットから観察すると、北から西へかけての周壁周縁部には全然散在しておらず、南北を結ぶ中心線の東側に偏在する傾向を指摘できる。

垂直分布のあり方をみると、下層からの出土は皆無で、中層から上にまとまりを示している。

この状態は、第一号土壤と同様に、埋没土の投げ込みと遺物投棄との間に、密接な関係があることを示唆するものであるといえよう。



第一〇図 第八号、第九号土壤実測図・遺物出土状態図

9 第九号土壤（第一〇図、図版第一一）

本土壤は、第2トレンチC-5より検出された。第八号土壤と重複している土壤である。

形状は、北側に張り出し気味の楕円形で、開口部の大きさは東西150cm（推定）、南北130cm、深さ17cmと浅い、底径は東西130cm（推定）、南北105cmで、底面は楕円形である。

周壁はやや斜めに掘り込まれており、底面は平坦で固い。西壁寄りに48×40cm、深さ9cmの1個のピットが存在する。埋没土は第八号土壤と同様の黒褐色土が充満する。遺物の出土はない。

10 第一〇号土壙（第一一図、図版第一二・一三）

本土壙は、第2トレントC-6~7より検出された。表土の除去の段階で表土中から若干の土器破片が出土したので、土壙の存在を予知できたが、果せるかな復元可能な深鉢形土器や大形片が多数出土した。

平面形の形状は、東西に長い楕円形を呈する。開口部の大きさは、東西258cm、南北195cm、深さは50cmを測る。底径は、東西160cm、南北165cmで、底面は不整円形である。

断面形をA-Bセクションで観察すると、東側は浅く斜めに2段掘りになっており、西側は深い。重複土壙かと思われたが、完掘後の観察で同一土壙であることが判明した。

底面は平坦で全体が固くしまっており、踏み固められたものであろうと思われる。

西壁際にピット1個が存在する。ピットは確認面から掘削されたもので、口径48×40cm、底面からの深さは47cmである。底面硬度は3に相当するだろう。

埋没土は、全体に微量のローム粒子を含んだ黒色土が堆積しており、埋没土の断面精査によつても、層相を区別する境界線を引けるような土層の変化は全く認められなかった。

この堆積状態は、人為による埋め戻しであることはいうまでもない。

土壙内には、本調査区の土壙では最も多量の遺物が包含されていた。遺物総数は119個であるが、その出土状態を平面分布でみると、西壁周縁部を除いて全面に散在しており、第一一図の遺物番号96・97は復元可能な深鉢形土器で、土圧によって潰れた出土状態である。

断面図に投影すると、西壁側は少ないが、底面上から確認面まで平均に分布している。

この状態からは特別な傾向を指摘することはできない。

この土器破片113個の表裏関係は、表50個(44.2%)、裏48個(42.5%)、立ち15個(13.3%)という比率になる。

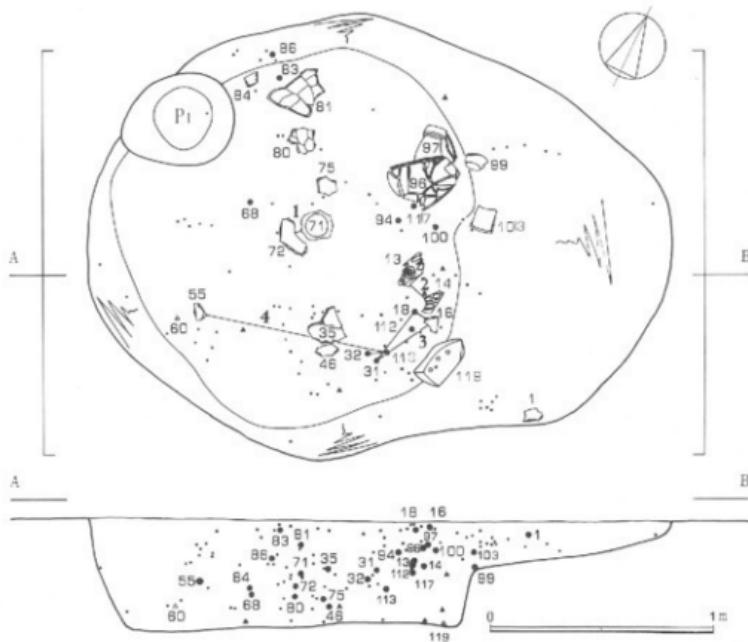
11 第一一号土壙（第一二図、図版第一三・一四）

本土壙は、第2トレントC-8より検出された。形状はほぼ円形で、開口部の大きさは、東西180cm、南北175cm、深さは40cmを測る。底径は、東西160cm、南北142cmで底面もおおむね円形を呈する。

断面形をA-Bセクションで観察すると、周壁は内側へ斜めに掘り込まれ、壁面の崩落はなく堅固である。底面は平坦で、硬度は3に近い2に相当するだろう。

東壁に接した底面と南西の周壁にピットが存在する。前者の口径は40×45cm、深さ38cmで底部は鹿沼層に達している。後者の口径は42×43cm、確認面より掘られているが、深さは32cmで土壙の底面より浅い。北西の周壁には浅い擾乱穴が存在するが、本土壙の損壊はきわめて軽微である。

埋没土は、暗褐色土の単一層で、下層の底面付近はローム粒子の混入がやや多くなるが、区分線を引けるほどの明瞭な層相の変化は認められない。人為堆積であることはいうまでもない。



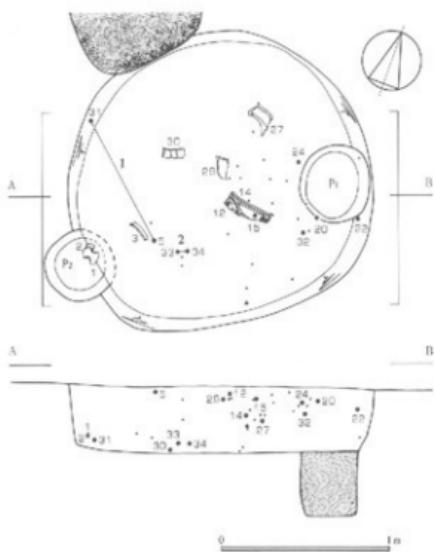
第一一図 第一〇号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

遺物の出土状態を平面分布のドットで観察すると、南北中心線の東側と西側のグループに分けられる。特に中央部より東寄りの部分に集中する傾向がみられる。

西側のグループからは接合資料2例が抽出された。西壁のピット底部からは分銅形石斧が2個重なって出土した。

出土状態を断面図に投影すると、東側のグループは下層からの出土は皆無に近く、大部分が中層から上層にまとまりを示している。

接合資料1の出土レベル差は30cmである。



第一二図 第一一号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

12 第一二号土壤（第一三図・図版第一四）

本土壤は、第2トレーナーC-10より検出された。

北側は第一三号土壤と接している。

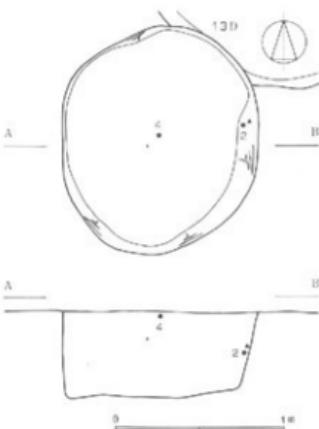
形状は梢円形で、開口部の大きさは東西115cm、南北135cm、深さ50cmを測る。

底径は、東西100cm、南北125cmで、底面は不整梢円形を呈する。

周壁の掘り込みをA-Bセクションの断面図で観察すると、西壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、東壁は内側へ斜めに掘られている。

壁面の崩落は認められない。底面には若干の凹凸があり、踏み固められたような痕跡はない。

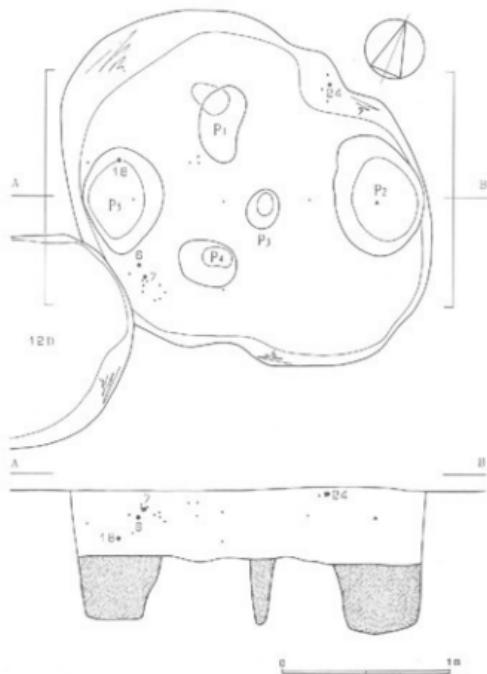
埋没土は、ローム粒子およびローム小ブロックを含む暗褐色土が充満している。東壁側はやや色



第一三図 第一二号土壤実測図

調が明るくなるが、明確な区分線は引き難い。

出土遺物はきわめて少なく、土器破片3個、自然石1個の計4個である。



第一四図 第一三号土壤実測図・遺物出土状態図

13 第一三号土壤（第一四図・図版第一四）

本土壤は、第2トレンチC-10~11より検出された。南西側は第一二号土壤に接している。

形状は東西方向に長い不整楕円形で、開口部の大きさは東西245cm、南北190cm、深さは40cmを測る。底径は、東西210cm、南北160cmで、底面も中央部がくびれた不整楕円形を呈する。

断面形をみると、東壁はほぼ垂直に、西壁はやや斜めに掘り込まれており、底面にはかなりの凹凸が認められる。底面硬度は2程度である。底面には5個のピットが存在する。

中央部北壁寄りのP₁は口径25×45cm、深さ44cm、東壁際のP₂は口径53×70cm、深さ53cm、中

央部のP₁は口径19×24cm、深さ40cm、中央部南寄りのP₂は口径28×35cm、深さ24cm、西壁際のP₃は口径48×65cm、深さ50cmである。これらのピットは、おそらく本土墳に付隨して掘られたものであろう。

埋没土は、ローム粒子を混入する黒褐色土が全体に堆積する。

遺物の出土状態を平面分布のドットで観察すると、極めて散發的で北壁際と南壁際には偏在する。これを断面図に投影すると、一層明確にその傾向を指摘することができる。

14 第一四号土壤（第一五図、図版第一五）

本土墳は、第3トレンチE-2～3より検出された。

開口部の平面プランが乱れているのは、本土墳と東側の第一号住居址付近に、第二章で述べた砂鉄探査の事務所があった位置に相当するので、その当時の影響ではないかと考えられる。

おそらく原形は楕円形状ではなかったかと推察される。

開口部の大きさは、東西120cm、南北150cm、深さは82cmを測る。底径は東西100cm、南北は90cmで、底面はほぼ円形である。

A-Bセクションによって断面形を観察すると、周壁は若干斜めに掘り込まれているが、円筒状土壤といってよいだろう。

壁面は堅固で全く崩落はなく工具使用痕が認められる。底面は平坦で固く硬度3に相当する。

埋没土は、黒褐色土の單一層で、層相に変化はみられないが、層の中間に、厚さ8～12cmの焼土層が介在する。

遺物の出土状態に特別の傾向は認められず、平面分布のドットをみると、全体に平均に分布している。断面図に投影すると、底面上は皆無で、周壁周縁部もなく、中層から上層にまとまりを示している。

15 第一五号土壤（第一六図、図版第一五）

本土墳は、第3トレンチE-6より検出された。形状は楕円形である。

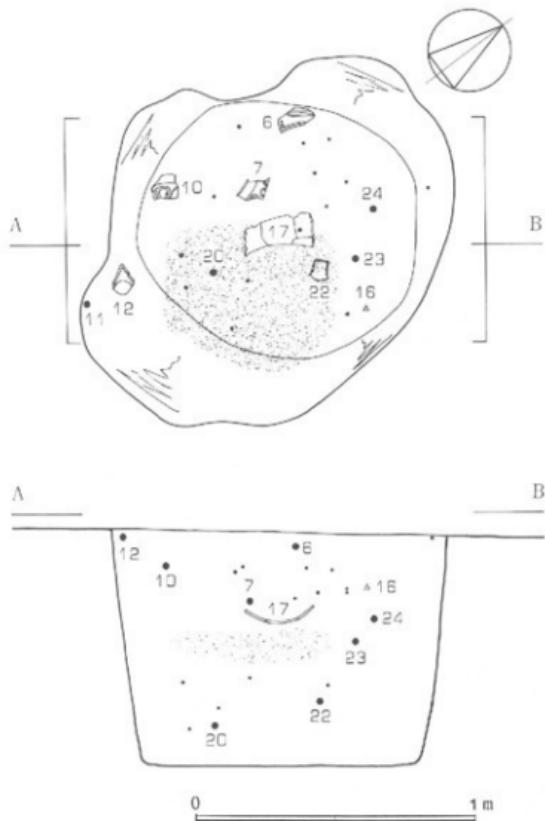
開口部の大きさは、東西145cm、南北190cm、深さは40cmを測る。底径は、東西125cm、南北140cmで、底面は不整楕円形を呈する。

A-Bセクションで断面形を観察すると、周壁は斜めに掘り込まれており、壁面の剥落は認められず堅固である。底面はおおむね平坦であるが、踏み固められたと思われる痕跡は窺えない。

北東の壁際と北壁際にはピットが存在する。前者は確認面からの掘削で、口径は50×50cm、底面からの深さは15cmである。後者の口径は、16×17cm、深さは14cmを計測した。

埋没土は、ローム粒子を混入する黒褐色土が充満しており、半蔵発掘の土層断面を精査しても層相の変化は認められなかった。人為による埋め戻しであることはいうまでもない。

出土遺物は、わずかに土器破片2個である。



第一五図 第一四号土壤実測図・遺物出土状態図

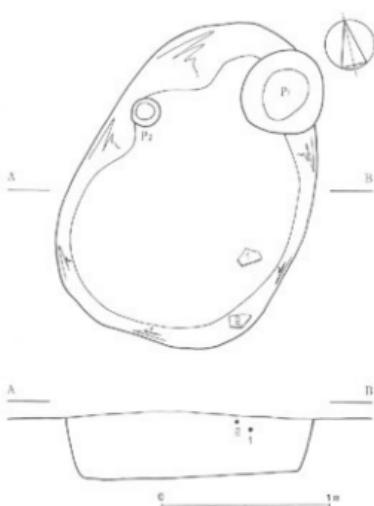
16 第一六号土壤（第一七図、図版第一六）

本土壤は、第3トレンチE-6~7、第一五号土壤の東側50cmの位置に検出された。

形状はおおむね橢円形である。開口部の大きさは、東西160cm、南北200cm、深さは95cmを測り、底面は鹿沼層に達している。今回調査した土壤の中ではもっとも深い。

底径は、東西225cm、南北70cmで、底面は橢円形を呈する。

A-Bセクションで断面形を観察すると、開口部の直径より頸部が若干小さくなつて内湾しながら大きく外側に開き、底面は平坦となるフラスコ状（袋状）の断面を呈する。



第一六図 第一五号土壤実測図・遺物出土状態図

黒色土が、6～9cmの厚さで堆積しているが、南側の部分的な堆積のため、断面図にはあらわれない。

底面には2個のピットが存在する。北壁下のP₁は、口径60×75cm、深さ32cm、南壁下のP₂の口径は50×79cm、深さは47cmである。

土壤内における遺物の出土状態は、平面分布のドットをみると、すべての遺物が開口部の範囲内に平均に散在する。その在り方を断面図に投影すると、下層底部は皆無の状態で、中層より上部にまとまりを示している。

本土壤からは、完形壺形土器、半完形の大形浅鉢形土器、石斧などが出土しているが、これらの遺物がほぼ同一レベルで出土していることや、位置関係などの出土状態からみて、被葬墓の土壤墓である可能性が考えられる。

第一七図上部左側、すなわち北西壁下の壺形土器と、右側の北東壁下の石斧は、供獻用の副葬品ではないかと思われる。また、中間層の焼土層は、埋葬後、獸肉を焼いて死者に供える風習があったことから推測すれば、おそらくこれに類似の行為が行われたものであろうと推察される。

底面は強く踏み固めた痕跡が窺われ、その硬度は3に相当するだろう。

ほぼ原形をとどめている保存状態の良い土壤である。

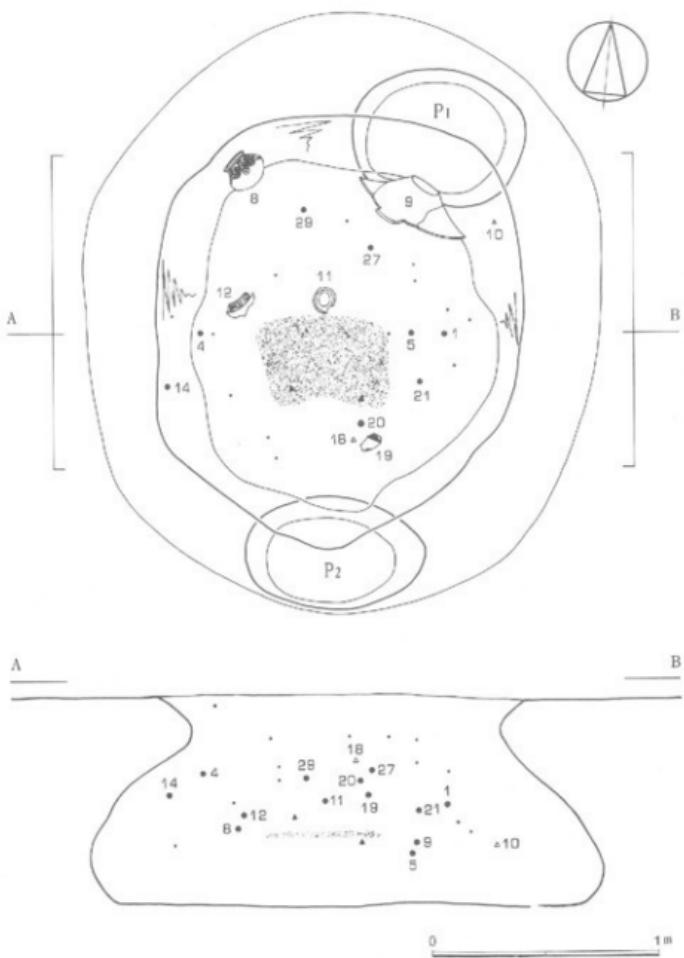
壁面は堅固で崩落は全く認められず、歷然とした工具使用痕も確認した。

土壤内の埋没土は、微量のローム粒子を混入した暗褐色土が充満し、壁面から崩落したような土砂のブロックは全然混在していない。

しかし、A-Bセクションより南寄りの中間層に、東西55cm、南北35cmの範囲で焼土層が存在する。

層の厚さは平均7cmで、南側が厚く北側が薄い。

焼土層の上部には焼土粒子が点在し、下部には微細な炭化物を混入する。



第一七図 第一六号土壤実測図・遺物出土状態図

17 第一七号土壤（第一八図、図版第一七）

本土塙は、第1トレンチと第2トレンチの中間拡張部B・C-9より検出された。

形状は、南北方向の長楕円形で、開口部の大きさは、東西170cm、南北310cm、深さは最深部で40cmである。底径は、東西133cm、南北255cmで、底面は中心部がくびれた楕円形状を呈する。

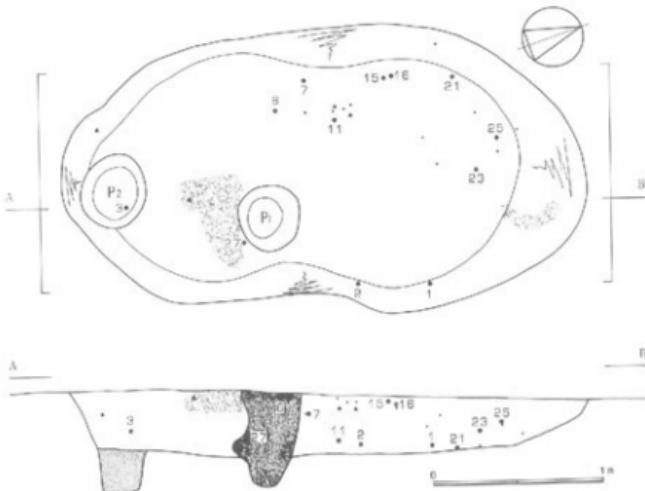
A-Bセクションで断面形を観察すると、確認ローム面は北側への緩斜面で、周壁は斜めに掘り込まれているが、南側は深く、北側が浅い。底面はおおむね平坦であるが比較的やわらかい。

土壤内には2個のピットが存在する。中央部東壁寄りのP₁は、確認面からの掘削で本土壌に付随するものではないと思われるが、口径38×38cm、深さは底面下18cmである。南壁際のP₂は、口径40×45cm、深さは25cmを測る。

埋没土は、Iが黒色土、IIはローム粒子と焼土粒子を少量含んだ暗褐色土で、この区分は明瞭である。P₁に接する南側の確認面と、北壁際の中間層に焼土層が存在する。層の厚さは、前者が11cm、後者は8cmを計測した。

遺物の出土状態を平面分布でみると、空白部分が多く、北側の西寄りに大部分の遺物が偏在する傾向を指摘できる。

この在り方を断面図に投影すると、南側にはきわめて少なく、北側の層中に集中していることを一層明確に看取することができる。



第一八図 第一七号土壤実測図・遺物出土状態図

18 第一八号土壤（第一九図、図版第一七）

本土壤は、第1トレンチと第2トレンチの中間拡張部B・C-10より検出された。

形状は不整円形で、開口部の大きさは、東西190cm、南北185cm、深さは中心部で36cmを測る。

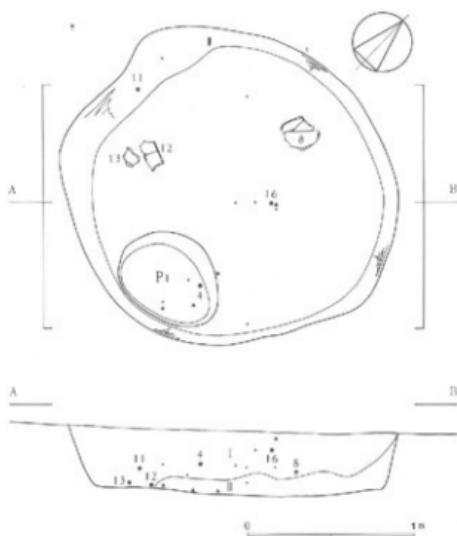
底径は、東西165cm、南北170cm、底面も不整円形を呈する。保存状態は良好である。

周壁は斜めに掘り込まれており、壁面の崩落は認められず、底面はほぼ平坦で固い。

南壁際にピットが1個存在する。口径50×65cm、深さは12cmである。

埋没土は、明瞭に2層に区分される。Iがわずかにローム粒子を混入する黒褐色土、IIは褐色土で、ロームと黒色土の搅拌土砂である。この埋没土の性状と堆積状態は、明らかに投げ込みによる埋め戻しである。

遺物の出土状態はきわめて散発的で、特別な傾向は指摘できない。断面図に投影しても、下層は自然石が多く、土器破片は中層の中心部にややまとまりをみせる程度である。



第一九図 第一八号土壤実測図・遺物出土状態図

第一九号土壤（第二〇図、図版第一八）

本土壤は、第1トレンチと第2トレンチの中間拡張部C-10より検出された。

形状は円形に近い楕円形である。開口部の大きさは、東西175cm、南北185cm、深さは中心部で

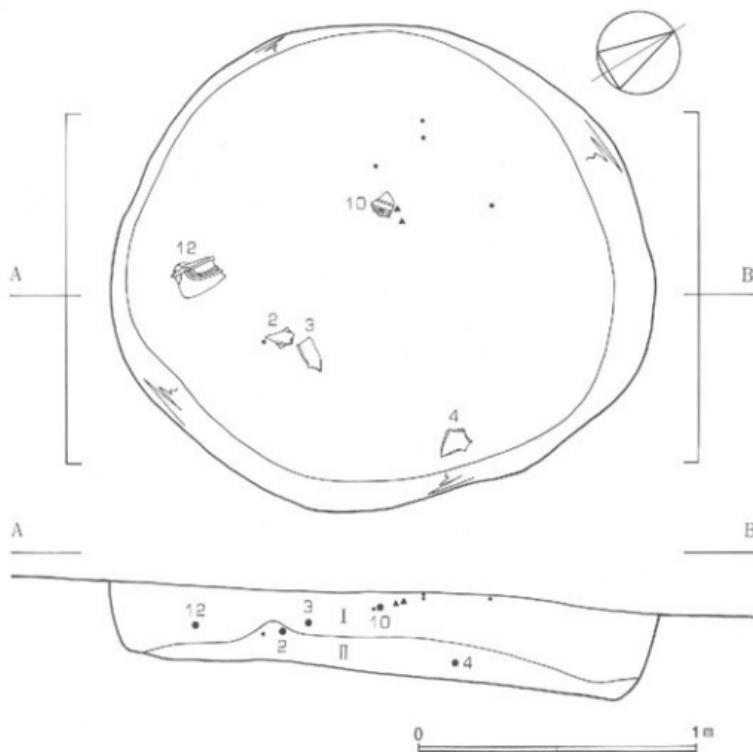
29cmを測る。底径は東西160cm、南北160cmで、底面はほぼ円形である。

北側への緩斜面上に位置し、断面形によると周壁は斜めに掘り込まれており、南側が浅く北側が深い。底面はおおむね平坦であるが、北側へ傾斜する傾向を示している。

埋没土は、明瞭な境界線をもって2層に区分することができる。Iはわずかにローム粒子を混入する黒褐色土、IIは褐色土で、ロームと黒色土の搅拌土砂である。この埋没土の性状と堆積状態は、人為による投げ込み埋め戻しであることはいうまでもない。

遺物の出土状態を平面のドットマップで観察すると、きわめて散発的で周壁周縁部の出土はなく、全体に空白部が目立つ、遺物総数は12個にすぎない。

断面に投影しても、周壁周縁部の空白は明らかで、このほかには特別な傾向は指摘できない。



第二〇図 第一九号土壤実測図・遺物出土状態図

20 第二〇号土壙（第二一図、図版第一八）

本土壙は、第1トレンチ内に部分的なプランを検出したもので、拡張して全容を把握した。位置はB-10~11である。北側は第二一号土壙と接している。

平面プランは、南側に突出する不整円形を呈する。開口部の大きさは、東西145cm、南北135cm、深さはピットを除いて最深部37cmを測る。底径は東西125cm、南北110cmで、底面も開口部と同様の形状を示す。

A-Bセクションの断面形では、周壁は斜めに掘り込まれているが、南から東へかけての壁面はほぼ直に掘り下げている。底面はほぼ平坦で踏み固めたような痕跡は認められない。

中央部と南東周壁下に2個のピットが存在する。前者の口径は50×50cm、深さは21cmである。

後者は口径24×15cm、深さは9cmで、共に本土壙に付随して掘られたものであろう。

埋没土は、ローム小ブロックが点在する程度の黒褐色土が充満しており、脆弱気味である。

遺物の出土状態を平面ドットで観察すると、中央のピットの部分を除いて平均に散在している。

これらを断面に投影すると、遺物の大部分は中央より西側にまとまりを示しており、層位的には下層から上層まで平均に分布している。

21 第二一号土壙（第二一図、図版第一八）

本土壙は、第1トレンチ拡張部C-11より検出され、南側の周壁は第二〇号土壙に切られている。形状は、不整梢円形で、開口部の大きさは、東西175cm、南北200cm、深さは32cmを測る。

底径は、東西160cm、南北165cmで、底面はほぼ円形を呈する。

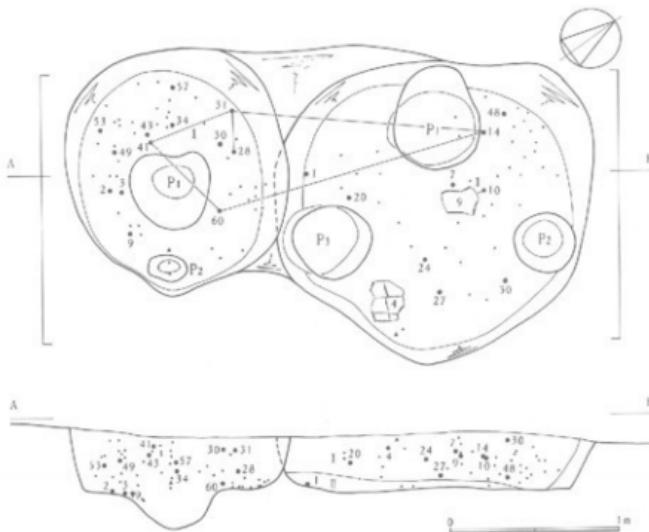
断面形を観察すると、周壁は斜めに掘り込まれており、壁面の崩落は認められず堅固である。

底面はおおむね平坦で、硬度は3に近い硬さである。

底面には3個のピットが存在する。西壁寄りのP-1は口径45×50cm、深さ60cm、東壁寄りのP-2は口径35×35cm、深さ25cm、南壁寄りのP-3は口径45×45cm、深さ48cmである。

埋没土は2層に区分することができる。この識別は明瞭で、Iは黒褐色土、IIはローム粒子と黒色土の混合土で褐色土である。

遺物の出土状態を平面分布で観察すると、全面に平均して散在しており、特別の変化は認められない。これを垂直に記録したドットで観察すると、層位的には全体に分布しているが、大部分の遺物は中央より下側に集中している傾向を指摘できる。



第二一図 第二〇号、第二一号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

22 第二二号土壤（第二二図、図版第一九）

本土壙は、第1トレントB-11より検出されたが、部分検出のため北側へ拡張して全容を把握した。北側は第二三号土壤に接している。

形状は不整椭円形で、開口部の大きさは東西170cm（推定）、南北190cm、深さは55cmを測る。

底径は東西135cm（推定）、南北150cmで、底面は北側に突出する不整椭円形を呈する。

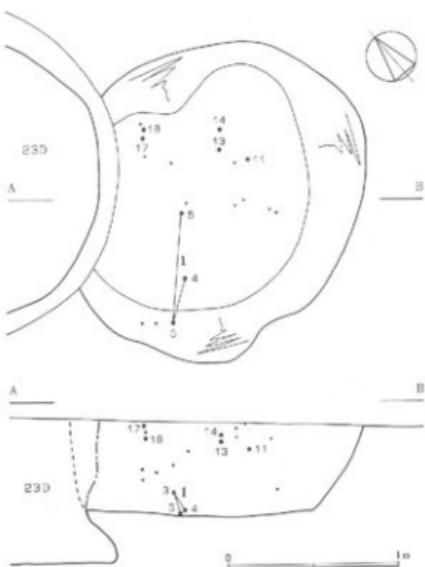
周壁の北側は第二三号土壤によって切られているが、残存周壁の掘り込み状態から想定すれば斜めに掘り込まれているものと思われる。第二三号土壤との切合部分を除けば、壁面の崩落は認められず、底面もおおむね平坦である。底面硬度は比較的やわらかい。

埋没土は黒褐色土の單一層で、区分線を引けるような層相の変化は認められない。

遺物の出土状態は散発的であるが、平面分布のあり方をみると、A-Bセクションの北側に偏在する傾向を指摘できる。

垂直分布を断面図に投影すると、底面上は少なく中層から上層にまとまりを示している。

接合資料が1例存在するが、接合線のあり方は遺物投棄の方向性を如実に示唆しているものといえよう。



第二二図 第二二号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

23 第二三号土壤（第二三図、図版第一九）

本土壙は、第1トレチ北壁拡張部B-11より検出された。南側は第二二号土壤に接している。形状は楕円形で、開口部の大きさは東西255cm、南北180cm、深さ90cmを測る。

底径は、東西90cm、南北210cmで不整円形を呈し、西側だけは斜めに掘り込まれているが、その他の周壁は袋状に掘り込まれており、底面は鹿沼層に達している。底面は硬く平坦である。

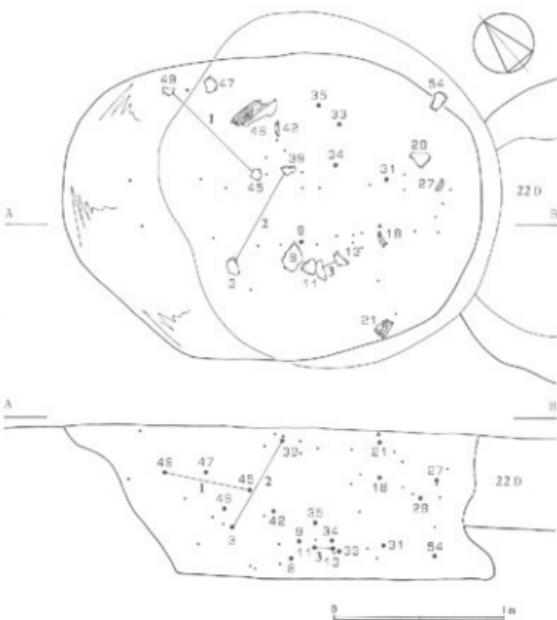
埋没土は、第二二号土壤と同様の性状の黒褐色土が充満し、層相に変化は認められない。

遺物の出土状態を平面ドットで観察すると、全体に平均に散在しており、断面図に投影しても特に変った傾向を指摘することはできない。

24 第二四号土壤（第二四図、図版第一九・二〇）

本土壙は、第1トレチと第2トレチの中間拡張部C-11より検出された。緩く東側へ傾斜する斜面上に位置する。

形状は、おむね楕円形で、東西170cm、南北195cm、深さは22cmである。底径は東西155cm、南北165cmで方形に近い円形を呈する。



第二三図 第二三号土壤実測図・遺物出土状態図・接合関係図

周壁は斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落は認められない。

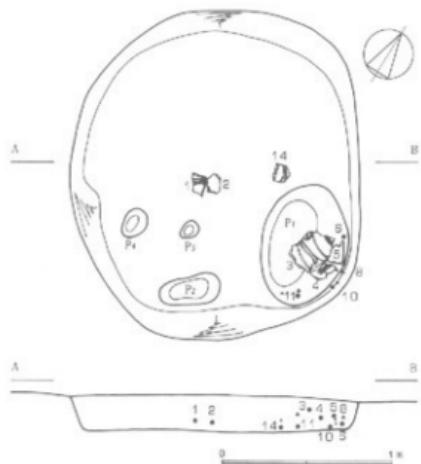
底面には細かい凹凸があるもののほぼ平坦で、堅く踏み固めたと思われる痕跡が窺われる。

埋没土は、微量のローム粒子を混入する暗褐色土が充満し、層相を区分し得るような変化は認められない。

底面には4個のピットが存在する。P₁の口径は50×73cm、深さ39cm、P₂は17×35cm、深さ9cm、P₃は10×10cm、深さ6cm、P₄は15×18cm、深さ8cmである。

遺物総数は少ないが、大部分が大形破片で、その出土状態を平面分布でみるとA-Bセクションの北側は皆無で、南側の南東壁下のピット部分に集中する。

断面図に投影すると、更にその傾向を明確に把握することができる。



第二四図 第二四号土壤実測図・遺物出土状態図

25 第二五号土壤（第二五図、図版第二〇）

本土壤は、第2トレンチの北壁拡張部D-10より検出された。

形状は、開口部が崩落のために乱れているが、掘削当時は楕円形であったろうと思われる。

開口部の大きさは、東西190cm、南北245cm、深さ73cmを測り、底面は鹿沼層に達している。

底径は、東西240cm、南北290cmで、底面は東側が不均衡であるが、ほぼ南北方向に長い楕円形を呈する。底面は硬く踏み固められており硬度は3に相当するだろう。

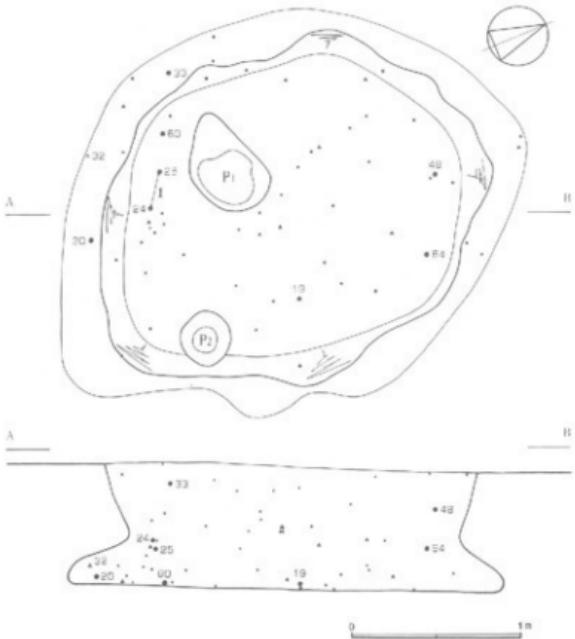
断面形をみると、開口部の直徑より中間が若干小さくなつて内湾しながら大きく外側に開き、底面は平坦となるフラスコ状の断面を形成する。

開口部に若干の崩落はみられるが、ほぼフラスコ状の原形をとどめており、保存状態は良い。

埋没土は、底面付近に微量の鹿沼粒子の散在が認められる程度の黒褐色土が充満しており、開口部崩落の土砂も明確な区分線を引けるような層序の変化には至っていない。

底面には2個のピットが存在する。P₁の口径は38×60cm、深さ36cm、P₂は29×32cm、深さ10cmである。本土壤付随のピットと見做してよいだろう。

遺物の出土状態を平面分布によって観察すると、特に変った傾向はなく、断面図に投影しても底面上から上層まで全体に平均して分布していることを看取できるだけである。



第二五図 第二五号土壤実測図・遺物出土状態図

26 第二六号土壤 (第二六図・図版第二一)

本土壤は、第2トレンチ北壁拡張部C・D-8～9より検出された。プラン確認の時点では1個の土壤かと思われたが、完掘した結果2個の土壤であることが判明した。

左側をA号、右側をB号と呼称することとし、B号がA号を切って掘削している。

A号の形状は、ほぼ円形で、開口部の大きさは、東西190cm、南北180cm（推定）、深さ42cmを測る。B号の形状は円形で、開口部の大きさは、東西200cm、南北200cm、深さは50cmである。

A号の底径は、東西170cm、南北150cm、B号の底径は、東西180cm、南北185cmで、いずれも円形に近い形状である。

周壁は、すべて斜めに掘り込まれており、壁面の崩落は認められない。

底面には、細かい凹凸はあるものの、ほぼ平坦で、硬く踏み固められている痕跡が窺える。

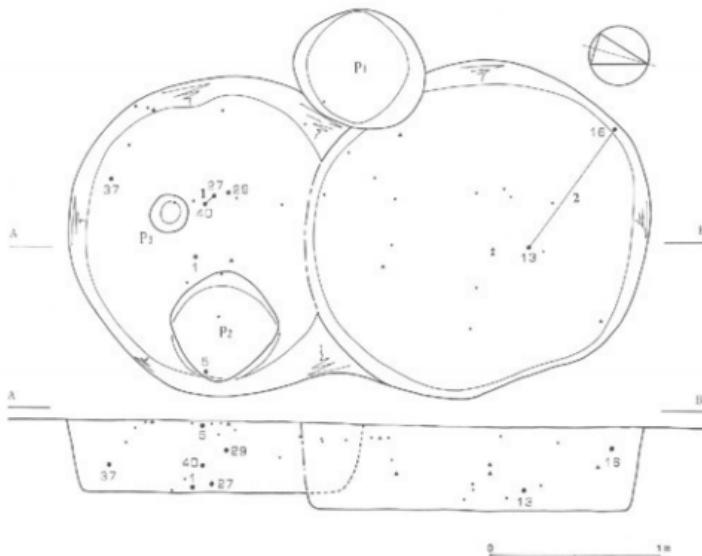
確認面から掘り込まれたピット1個（P₁）と底面に2個のピットが存在する。（A号）

P_1 の口径は70×75cm、深さ39cm、 P_2 は60×65cm、深さ53cm、 P_3 は21×22cm、深さは19cmである。

P_2 と P_3 は本土壤に付随して掘られたものであろう。

両者の埋没土は、ごく微量のローム粒子を混入する黒褐色土が充満しており、層序の区分線を引けるような層相の変化は識別できない。また、A号・B号の埋没土の性状も同一である。

遺物の出土状態は、A号・B号ともに散発的で特別な傾向はない。



第二六図 第二六号土壤実測図・遺物出土状態図

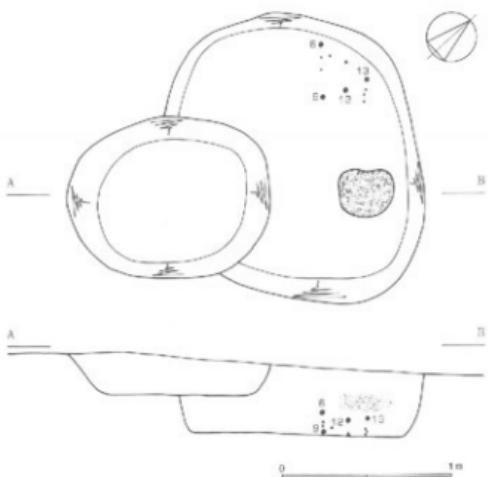
27 第二七号土壤（第二七図・図版第二一）

本土壤は、第2トレンチ東端南壁拡張部のC-11より検出された。南壁側は第四号埋窯炉に切られている。形状は方形に近い円形で、開口部の大きさは東西190cm、南北165cm、深さは42cmを測る。底径は東西170cm、南北140cmで、底面も開口部と同様の形状を呈する。

周壁は斜めに掘り込まれており、壁面の崩落は認められない。底面は平坦で硬度は3に近い。

埋没土は黒褐色土の單一層で南壁側に焼土粒子を散見する。北壁寄りの中間層に厚さ10cm、幅32cmの焼土層が存在する。

遺物の出土状態を平面分布でみると、北壁下の小範囲に集中している偏在性を指摘できる。



第二七図 第二七号土壤実測図・遺物出土状態図

28 第二八号土壤 (第二八図, 図版第二二)

本土壌は、第1トレンチ北壁拡張部B-4より検出された。

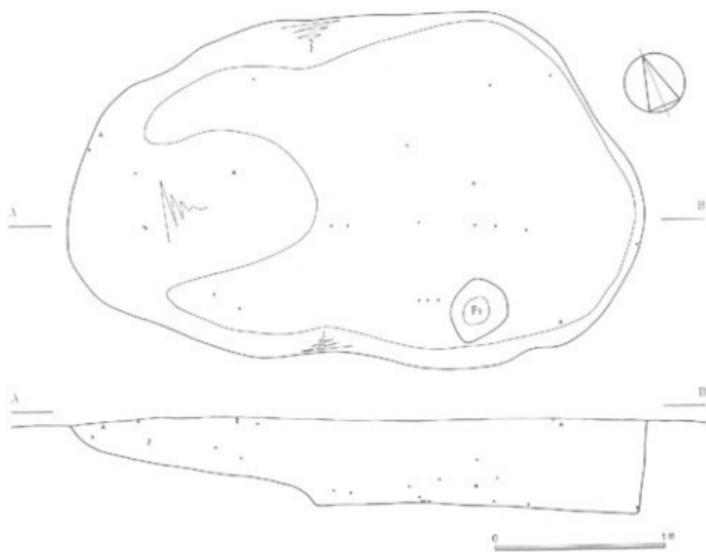
形状は椭円形を呈し、開口部の大きさは東西340cm、南北210cm、深さは中心部で47cmを測る。

底径は、東西190cm、南北190cmで、底面は蟹の爪の形状に似ている。

周壁の東側は、ほとんど垂直に近い掘り込みであるが、西壁はきわめてゆるやかな傾斜で底面に至る。底面は鹿沼層に達しており、硬く踏み固められている。

埋没土は、黒褐色土の単一層で、底面付近はやや色調が明るくなるが、漸移的で明確な区分線は引き難い。

遺物の出土数は規模に比して少なく、出土状態は散発的である。



第二八図 第二八号土壤実測図・遺物出土状態図

29 第二九号土壤 (第二九図、図版第二二・二三)

本土壤は、第3トレント南壁拡張部E-5より検出された。

形状は、南側に突出した不整円形で、開口部の大きさは東西170cm、南北215cm、深さは中心部で30cmを測る。

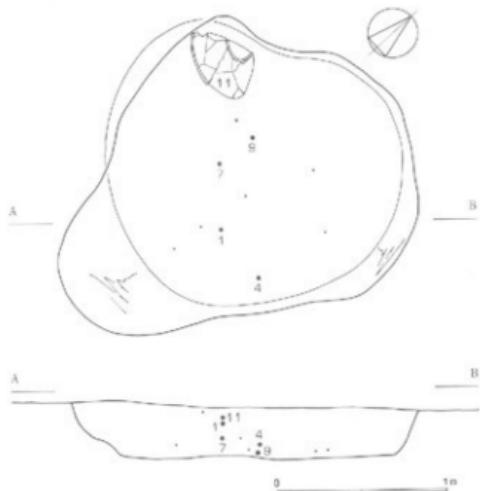
底径は、東西180cm、南北170cmで、底面は不整円形を呈する。

周壁は、斜めに掘り込まれているが、西側はやや袋状に外側に張り出している。

壁面は比較的堅固で崩落の痕跡は認められないが、底面にはかなりの凹凸が目立ちやわらかい。

埋没土は、黒褐色土の單一層で、区分線を引けるような層序の変化は認めることはできない。

遺物総数は11点と少ないが、大型の浅鉢形土器の半完形が1個出土している。



第二九図 第二九号土壤実測図・遺物出土状態図

30 第三〇号土壤 (第三〇図, 図版第二三)

本土膜は、第3トレンチ北壁拡張部F-6より検出された。

東側1.5mには第三一号土壤が位置する。形状は、長方形に近いともいえる南北方向に長い長楕円形で、開口部の大きさは、東西105cm、南北240cm、深さはA-Bセクションの中心部で47cmを測る。

底径は、東西85cm、南北200cmで、底面は長楕円形を呈する。

周壁は斜めに掘り込まれているが、南東隅の一部だけは若干外側へ張り出し気味である。

壁面の崩落は認められず、底面はおおむね平坦で硬度は2に相当するだろう。

埋没土は2層に区分される。この識別は極めて明瞭である。Iは黒褐色土、IIはローム粒子を多量に混入する褐色土で、黒色土とロームとの搅拌上であり、人為投棄によるることは明らかである。

遺物総数はわずかに6個で、その出土状態はきわめて散発的で、断面図に投影しても特別な傾向を指摘することはできない。

31 第三一号土壤（第三一図、図版第二四）

本土塚は、第3トレンチ北壁拡張部F-6より検出された。

形状は、不整円形で、開口部の大きさは東西270cm、南北220cm、深さは38cmを測る。

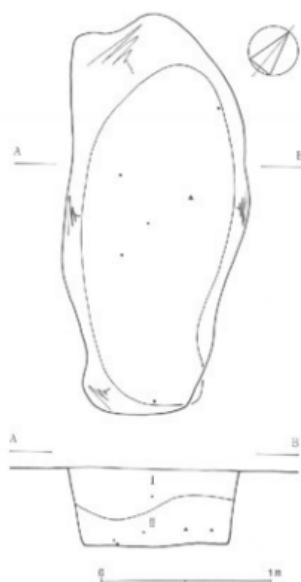
底径は、東西230cm、南北150cmで、東西方向に長い不整楕円形を呈する。

周壁は斜めに掘り込まれているが、北壁はゆるやかな傾斜の2段掘り込みになっている。

壁面の崩落は認められず、底面に硬さはないがおおむね平坦である。

南壁下にピットが1個存在する。口径は60×65cm、深さは66cmである。

埋没土は3層に区分できる。Iは暗褐色土、IIは黒色土がベースで、ローム粒子を混入する黒褐色土で、底面上に堆積するIIIは、ロームがベースで、黒色土とロームブロックを含む褐色土である。



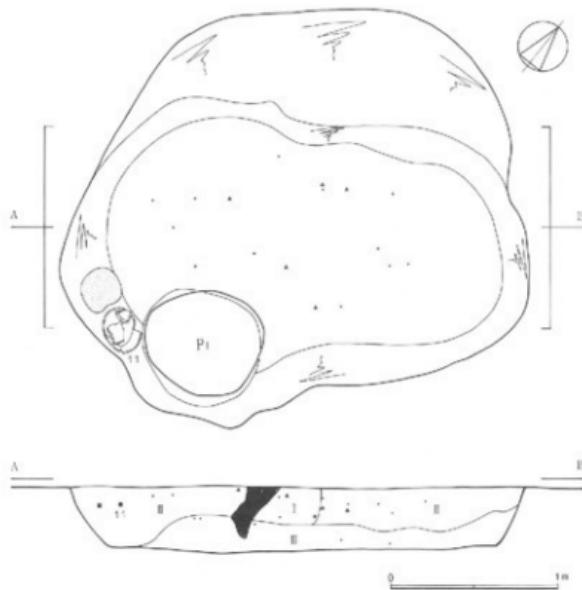
第三〇図 第三〇号土壤実測図・

第II層はさらさらとしていて脆弱気味である。

遺物出土状態図 この埋没土の性状は、周囲の土砂の自然流入ではなく、人為による埋戻しであることはいうまでもない。

遺物の出土状態を平面分布で観察すると、周壁周縁部は皆無に近く、大部分は中央部に集中している。

断面図に投影すると、底面上は皆無で、中層から上層にかけてまばらに散在している。



第三一図 第三一号土壤実測図・遺物出土状態図

第六章 縄文時代住居址の調査

1 第一号住居址（第三二四、図版第二四）

本調査区から検出された住居址は、縄文時代中期の竪穴住居址1軒だけである。

本址は、第3トレーンチの西端部北壁側拡張部E～F～3～4から検出されたが、第二章で述べた砂鉄採掘事業当時の事務所が所在した位置に該当する。

竪穴の上層部全面は、その事務所の建設もしくは解体整理の際に、削平により破壊を受けたらしく、竪穴平面プランの確認が非常に困難であった。したがって、遺物が出土する範囲を一応住居址の輪郭と想定しなければならなかった。

プラン確認作業中は、壁面が不明瞭であったために、2軒の住居址が重複しているものと考えられたが、最終的には長大な1軒の住居址であることが明確になった。

保存状態は決して良いとはいえないが、幸いにして破壊の深度が浅かったのと、擾乱などによる損壊を受けていなかっただけに辛うじて全面的な破壊は免かれた。

規模 W-X辺長7.2m（推定）、X-Z辺長3.5m（推定）、Y-Z辺長7.1m（推定）、W-Y辺長3.5m（推定）を測り、原形は長方形で、面積は推定25.2m²ほどの竪穴住居址であったと想定される。

壁 残存周壁を観察すると、部分的には黒色土を壁としていると思われる場所もあるが、若干斜めに掘り込まれており、壁面に凹さではなく脆く崩落し易い。

確認面からの深さは、Wコーナー15cm、Xコーナー19cm、Yコーナー15cm、Zコーナー14cm、東壁中央部21cm、西壁中央部17cm、南壁中央部13cm、北壁中央部23cmを測り、北壁がやや深い傾向を示している。

床面の状態 全面に細かい凹凸はあるが、おおむね平坦で、地山のロームを床としており、貼床は施されていない。北側がごくわずかに低くなっている。全体的に硬度2～3のかたさである。炉址は構築されなかつたらしく残っていない。

この床面には、P₁とP₂の中間に赤く変色した焼土塊が存在する。それは煉瓦状に赤く焼けた粘土で、厚さは薄いところで3～5cm、厚いところでは10cm前後を有する。竪穴外部から投棄した状態ではなく、床面上に置かれた粘土が焼けたように思われる。焼土下部の床面も火熱の影響がおよんで多少かくなっていた。

竪穴内の埋没土中には、木炭・灰など炭化物の混入が全くみられなかったことから、住居の焼失に起因するものではないと思われる。

ピット 床面精査の結果、大小16個のピットを発見した。ピットは次表のようにまとめられる。

第一表 ピット一覧表

単位: cm

ピット番号	形 状	短 径	長 径	深 さ	備 考
P ₁	楕 圆 形	45	50	58	
P ₂	圆 形	50	54	55	
P ₃	圆 形	45	45	57	
P ₄	不整椭圆形	60	70	55	
P ₅	圆 形	54	56	51	
P ₆	圆 形	53	54	60	P ₁₀ と重複
P ₇	椭 圆 形	30	35	16	P ₄ と重複
P ₈	圆 形	40	41	23	
P ₉	椭 圆 形	30	42	14	
P ₁₀	椭 圆 形	30	38	18	
P ₁₁	圆 形	23	25	21	
P ₁₂	圆 形	30	38	17	
P ₁₃	椭 圆 形	22	30	21	
P ₁₄	不 整 圆 形	28	28	24	
P ₁₅	不 整 形	130	170	29	
P ₁₆	圆 形	48	50	24	P ₁₀ と重複

ピットの配列状態を観察すると、P₁とP₂の間1.1m、P₂とP₃の間1.8m、P₄とP₅の間1.0m、P₈とP₉間1.3m、対角線の長さP₁とP₄間3.3m、P₃とP₆間3.6mという位置関係は、住居面積約25.2m²の構造上からみても、形状・口径・深さなどの規模においても類似点が多く、ほぼ規則的であることが窺われ、P₁～P₆の6個が主柱穴としての機能を果したピットであると考えられる。

これらの柱穴については、大洗鑿釜方式による半截発掘法で克明な観察記録を作成したかったが、調査日数が遅延するため実施しなかった。

埋没土 壓穴内の埋没土は、壓穴そのものの残存が浅いため土層の細分が困難であったが、2層に区分することができた。

I 黒褐色土 黒色土がベースでローム粒子を混入し、全体に比較的やわらかい土砂である。部分的には褐色の強いところもみられる。

II 明褐色土 ロームが主体で黒色土を混入する。部分的には色調の変化がみられるが、区分線を引けるような顕著な層序変化ではない。

以上の上砂は、その性状と区分線から窺われるよう、明らかに埋め戻されたものである。

遺物の出土状態　床面または埋没土中から出土した遺物は、土器の破片と自然石でその総数は215個である。内訳は土器破片199個、自然石16個である。これは土器破片93%に対し、自然石7%の比率となる。

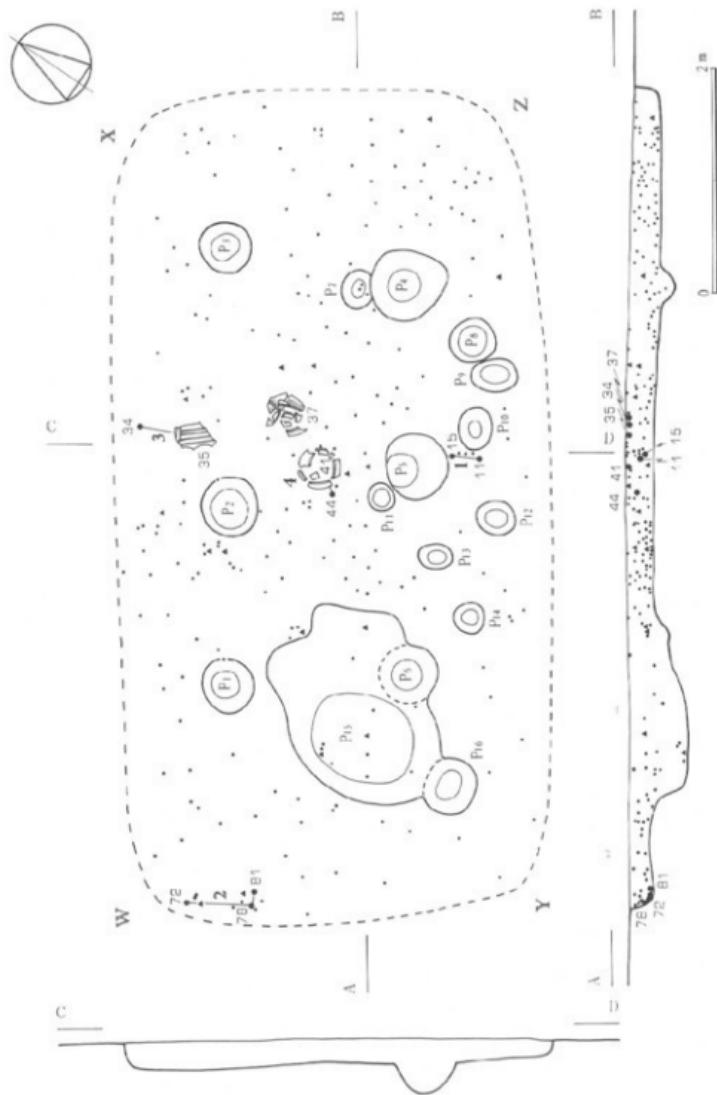
土器の表裏関係をみると、表98個(49%)、裏88個(44%)、立ち13個(7%)の数字を示している。土器破片の表裏の関係が50%を前後して出土するという在り方は、これまでの縄文・弥生・古墳時代住居址の調査例とほとんど変りないといえる。こうした事象は、人間が開拓した廃棄行為の実体を物語るものであろう。

住居址内における遺物の出土状態を、まず平面的分布から観察してみると、土器破片類が廃棄された状態は遺物出土状態分布図に示したとおりで、接合可能な人形破片は中心部より出土しているが、大部分の破片は全面的に散布量が平均化していることがわかる。

また、垂直分布の状態をみても、ほぼ相似した傾向が観察できる。ただ、A-B断面に投影したドットをみると、床直上から出た資料が少なく、それよりわずかに浮いた状態で出土している。このことから竪穴内の土砂に混在していた遺物はあきらかに廃絶後に投棄されたものと見做すことができよう。

このような破片の出土状態は、これまでに調査してきた各地の住居址の事例（大宮町梶原遺跡、水戸市下郷遺跡、同高天原古墳群、茨城町小堤貝塚など）にてらしても、非常に類似した点が多くみられ、今回に限って特別に変った傾向は認められない。

遺物出土状態図の現象は、不用品を廃棄（投棄）するという人間行動の一般的なありかたを示すものと理解できるのである。



第三二圖 第一號住居址實測圖・遺物出土狀態圖・接合關係圖

第七章 屋外埋甕炉址・石組炉址の調査

1 屋外埋甕炉址 本調査区から 6 基の屋外埋甕炉址と 1 基の石組炉址が検出された。これらはすべて屋外に単独で設置されたものである。

例外なく深鉢形土器が埋設されており、使用された土器をみると胴部片のみのもの 1 個、底部を欠いているもの 2 個、口縁部の一部と底部を欠いているもの 4 個、完形に近いもの 1 個である。

埋甕炉址の時期は、縄文時代中期初頭から後期中葉に比定されるものと思われる。

掘り方の長径方向は、実測図（第三三～三七図）から窺わるように各方向を指向しており、一定した規則性を見出すことはできないが、埋設土器の設置の方法は第六号埋甕炉址を除いて底面と垂直、あるいは垂直に近い置き方で、逆位ではなくすべて正位に置かれている。

なお、第四号埋甕炉址には 3 個の土器が埋設されており注目に値しよう。

大部分の土器内および周囲には焼上粒子を含む赤褐色土が堆積しており、屋外炉として使用された可能性が極めて高いといえよう。

1 第一号埋甕炉址（第三三図、図版第二五）

第 1 トレンチ中央部 B-7 より検出された。もっとも近い第五号土壙からでも約 8 m 離れており、単独の屋外埋甕炉址である。

プランの形状は、南北方向に長い椭円形を呈し、東西 115 cm、南北 140 cm を測る。

掘り方は斜めに掘り込まれており、中央部の深さは 20 cm である。

埋没土は明瞭に 2 層に区分される。上層のⅠは焼土粒子を多量に混入する赤褐色土、下層のⅡは煉瓦状に固い焼土層である。

埋設土器は、口縁部と胴部の一部を欠いた深鉢形土器が正位で底面上に垂直に置かれている。

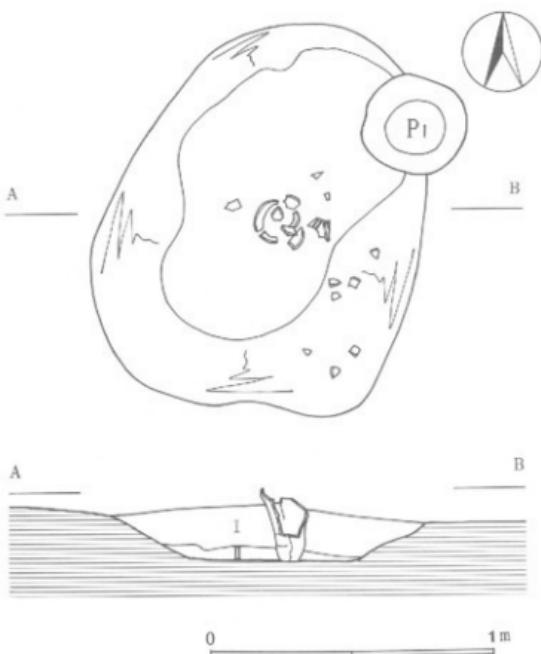
口縁部は確認面より上に出ており、埋設当時は完形であったように思われるが、一部が欠損しているのは後世の擾乱によるものか、もしくは土圧によるものかもしれない。

2 第二号埋甕炉址（第三四図、図版第二五）

第 2 トレンチのほぼ中央部 C-6 より検出された。西側 160 cm に第九号土壙、東側 150 cm に第一〇号土壙が存在し、本址も単独の埋甕炉址である。プランの形状はほぼ円形を呈しており、東西 135 cm、南北 130 cm を測る。断面形は舟底状を示し、最深部は 26 cm である。

埋没土は 3 層に区分されるが、この識別は明瞭である。上層部のⅠは焼土粒子を混入する褐色土、中間層のⅡは焼土、下層のⅢは赤褐色土である。

土器は中央部の中間層から上に埋設されており、底部と口縁部を欠いた深鉢形土器の胴部である。火熱を受けて赤変しており、器面の表裏はともに剥離しやすい状態である。土器の周囲には実測図（第三四図）のとおりまばらに石（花崗岩）が配されており、複式炉の形態に近い。



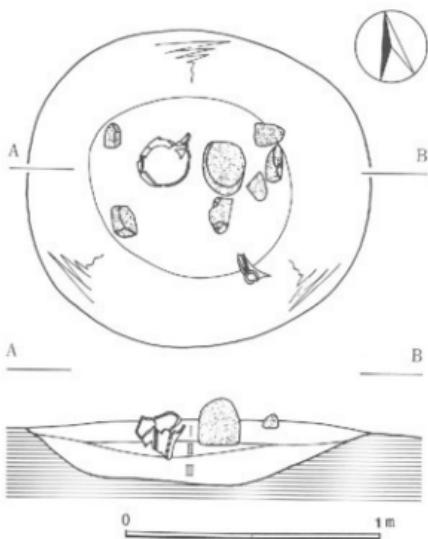
第三三図 第一号埋壺炉址実測図

3 第三号埋壺炉址（第三五図、図版第二六）

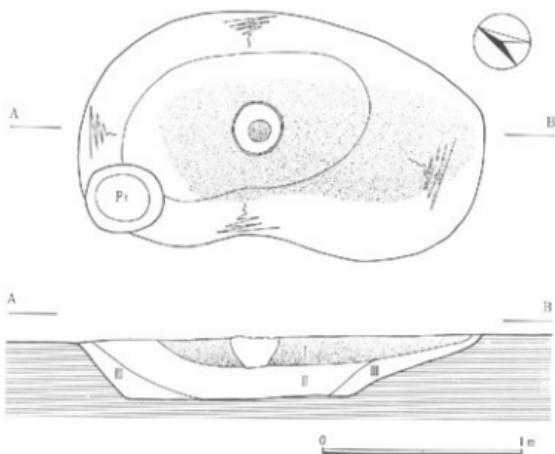
第3トレンチの西端寄り南壁拡張部E-3~4より検出された。第一号住居址の南側170cmに位置する。単独の埋壺炉であることは前の2基と同様である。確認プランは南北方向に長い椭円形で、東西115cm、南北200cm、深さは30cmを測り、埋壺炉址では最大の規模である。

底面は平坦で、埋没土は3層に区分することができる。Iは焼上層で埋設土器を囲むような範囲にかなり広く堆積しており、その厚さも15cmで、埋設土器の現存器高に匹敵する。IIは赤褐色土、IIIは若干の焼土粒子を混入する黒褐色土である。焼土層の状態から窺えることは、南側に焚き口が存在したように思われる。

土器は中央部に埋設されており、底部と口縁部を欠いた深鉢形土器で、垂直正位ではあるがやや南側に傾いた状態で置かれている。中間層より上に埋設されており、土器の内部には焼土が充満し、外側（表面）も焼土に蔽われているため、火熱を受けて脆くなってしまっており、遺物収納には細心の注意を要した。



第三四図 第二号埋焼炉址実測図



第三五図 第三号埋焼炉址実測図

4 第四号埋焼炉址（第三六図、図版第二六）

第2トレンチ東端部南壁側拡張部C-11より検出された。第二七号土壤の南壁の上に構築されているが、第二七号土壤に付随するものではない。

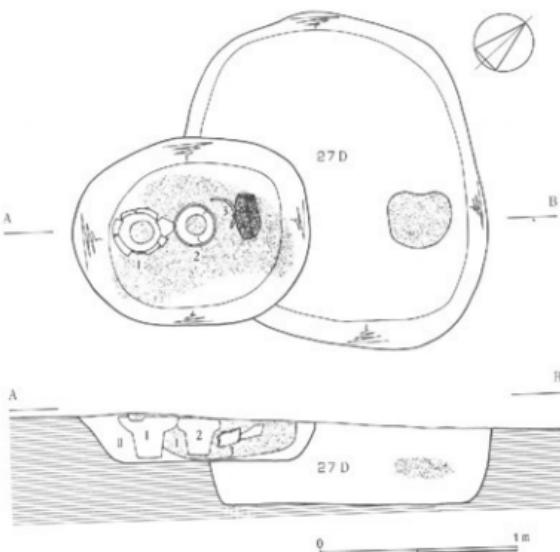
プランは梢円形を呈し、東西96cm、南北129cmを測り、掘り方は斜めに掘り込まれており、底面は平坦である。深さは25cmを計測する。

埋没土は2層に大別することができる。Iは焼土層で、平面的には東西90cm、南北60cmの範囲におよび、厚さは20cmに達する。IIは焼土粒子を多量に混入した褐色土で、底面近くは煉瓦状に固く焼けしており、埋没土の性状や堆積状態からみて、使用頻度が高かったことが窺われる。

埋設土器は、実測図（第三六図）に示すとおり、深鉢形土器3個がほぼ南北方向に並んで出土した。置き方は3個ともに正位垂直である。

南側から口縁部の一部と底部を欠いたもの、胴下半部と底部を欠いたもの、胴部だけのものの3個であるが、1基の埋焼炉に3個の土器が埋設されているのは稀有な例といえるだろう。

火熱のために土器が脆くなっていることはいうまでもないが、特に1号土器の脆弱度がもっともひどかった。



第三六図 第四号埋焼炉址実測図

5 第五号埋甕炉址（第三七図）

第2トレンチ東端寄りの北壁側拡張部C-D-10より検出された。本址の北側約50cmの位置に第二五号土壙が存在する。

プランは梢円形を呈し、東西75cm、南北90cm、深さは比較的浅く15cmである。

掘り方は斜めに掘り込まれており、底面は平坦である。

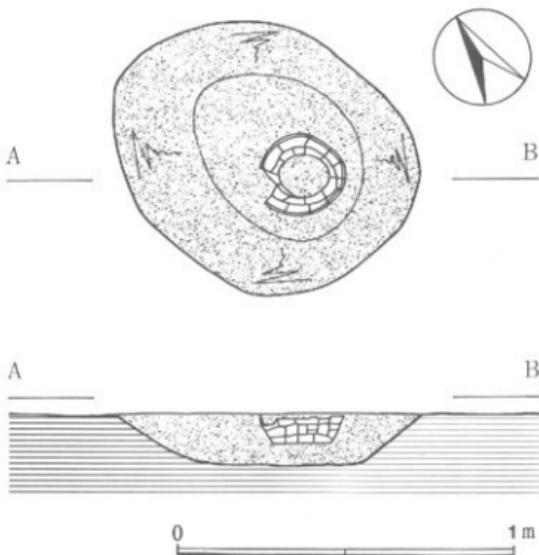
埋没土は全体に焼土が充満しており、このために口縁部と底部を欠く深鉢形土器の胴部埋設土器は、火熱によって著しい損傷を受けており、触れただけで器面が剥落し、実測図（第三七図）から窺えるように、器形も細かく割れて埋甕炉の埋設土器の中では収納にもっとも困難を極めた。

6 第六号埋甕炉址（図版第二七）

第3トレンチ中央部南壁側拡張部E-7より検出された。第一六号土壙の東側3.2mに位置する。プランは円形で、東西、南北ともに60cm、深さは18cmを計測した。

底部と口縁部および胴部の一部を欠いた深鉢形土器が底面上に埋設されているが、ほとんど南側に倒れた状態で置かれている。

埋没土は、焼土粒子を多量に混入する赤褐色土が全体に堆積し、土器の保存状態は火熱を受けて脆くなっている。



第三七図 第五号埋甕炉址実測図

2 屋外石組炉址

1 第一号石組炉址（第三八図、図版第二七）

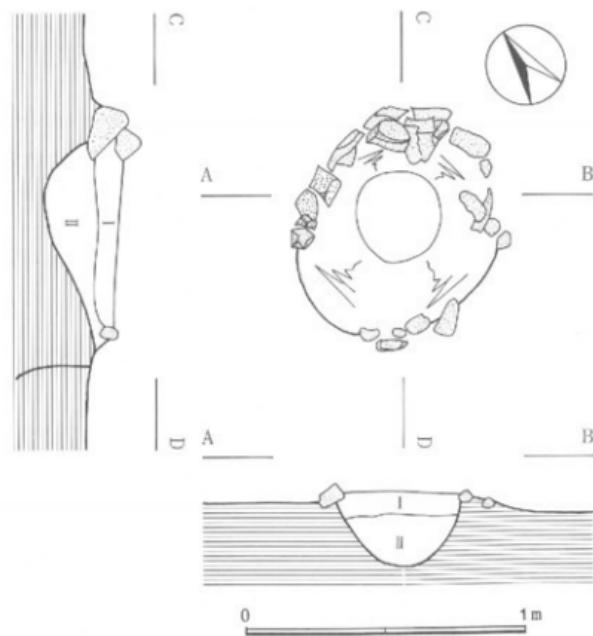
第2トレチ東端寄り北壁側拡張部D-11より検出された、第一三号土壙の北側に位置する。

形状は東西方向にやや長い楕円形で、東西85cm、南北70cm、深さは中心部で27cmを測る。

西側の焚口部を除いて楕円形状に石（花崗岩）が組まれているが、大部分は火熱と風化によって非常に脆くなっている。中には原形を留めないものもある。その様子は図版第二七によって窺うことができよう。

埋没土は、Iが焼土粒子を多量に混入する赤褐色土上、IIはロームをベースに微量の焼土粒子を含む褐色土である。

石以外の遺物の出土はなかった。



第三八図 第一号 石組炉址実測図

第八章 出土遺物の概要

本調査区（A地区）の土壤群、住居址、埋甕炉址から出土した遺物数は下表のとおりである。

表二 出土遺物数一覧

遺構名	土器	石器	自然石	遺構名	土器	石器	自然石
第一号土壤	28	—	—	第二一号土壤	48	—	1
第二号土壤	—	—	—	第二二号土壤	19	—	—
第三号土壤	2	—	—	第二三号土壤	53	—	1
第四号土壤	21	1	3	第二四号土壤	12	—	2
第五号土壤	47	—	9	第二五号土壤	53	1	14
第六号土壤	25	—	2	第二六号土壤	105	—	8
第七号土壤	40	—	—	第二七号土壤	13	—	—
第八号土壤	25	1	2	第二八号土壤	22	—	4
第九号土壤	—	—	—	第二九号土壤	9	—	2
第一〇号土壤	113	1	5	第二〇号土壤	6	—	—
第一一号土壤	36	2	1	第一三号土壤	15	—	6
第一二号土壤	3	—	1	第一号住居址	199	—	16
第一三号土壤	24	—	1	第一号埋甕炉	1	—	—
第一四号土壤	24	—	1				
第二号埋甕炉	1	—	—				
第一五号土壤	2	—	—	第三号埋甕炉	1	—	—
第一六号土壤	27	1	2	第四号埋甕炉	3	—	—
第一七号土壤	23	—	4	第五号埋甕炉	1	—	—
第一八号土壤	14	—	4	第六号埋甕炉	1	—	—
第一九号土壤	10	—	2				
第二〇号土壤	57	—	1				

調査区の出土遺物の大部分は、縄文時代中期後半に属する土器と石器である。

中期縄文土器は、昭和56年度の日本考古学協会大会のシンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」において、その変遷を10段階に区分する試案が発表された。本県関係は瓦吹賢・鶴志田篤二の両氏が担当している。

本調査区の中期縄文土器を区分表に準拠して概観すると、加曾利E I式古手の段階に対応するVI期の土器はほとんどみられず、大部分のものは加曾利E I新手の段階、つまり東北南部の大木

表三 橋文中期土器区分表

本大會	大木式	関東
IV期 (勝坂盛時段階)	大木7b新 阿玉台II	
V期 (勝坂終末段階)	大木8a古	阿玉台III・IV
VI期 (加E1古手段階)	大木8a新	東京加E1期
VII期 (加E1新手段階)	大木8b	東京E2~3期
VIII期 加曾利E2	大木9古	東京加E4期
IX期 (加曾利EIII)	大木9新	東京加E5~6期
X期 (加曾利EIV)	大木10	東京加E5期

8b式や從來の加曾利EII~III式に対峙しうるVII期の土器群であろうと考えられる。

また、これに続くVIII期の土器も若干出土している。

出土遺物の説明は、印刷予算の関係からすべてを収めることができ難くなつたので、その概要を記述するにとどめ、実測図・拓影図・写真図版を紙面の許すかぎり収録した。

また、紙面の関係で実測図の遺構番号が前後する部分がある。

土器

出土土器の中で完形品は第五〇図8の広口壺形上器1個だけで、口径13.5cm、器高13cmの比較的小形の土器である。腹部に渦線で渦巻文を描出する大木8b式の特徴的施文法に対比されよう。接合資料や口縁部破片をみると、ほとんどが平縁でキャリバー状の深鉢形を呈するが、中には口辺部の膨らむ度合の弱いものや、胴部が円筒状に近いものもある。口縁も平縁のものと小波状を形成するものとがある。

口縁部は、湾曲部に隆起線をもって渦巻文を中心とした文様を構成し、隆起線の両縁は渦線を用いて縁どりされているものがもっと多く、波状口縁の波頂部に盲孔を施して1~2本の平行沈線を横走させたもの、太目の線で区画した内側に継位の渦線を引き並べたもの、口縁に無文帶を残し、微隆起線の下から繩文を押捺したものなどが存在する。

口縁部文様帯に退化がみられ、胴部の崩消渦文が口縁に拡大してくる仲間は加曾利EIII式に該当するだろう。

キャリバー状深鉢形土器は文様帯が口縁部と胴部に分離構成されており、その境は貼付隆線を横走させて区画しているが、胴部文様帯の破片の大部分は、口辺部と底部を欠損した深鉢形を呈しており、胴部をほぼ等間隔に区画して、繩文地の上に直線渦線や波状(蛇行)渦線を垂下させ

ただけの磨消繩文が発達をみない段階のものが多く、加曾利EⅡ式の仲間に相似する。

垂下する沈線間や幅広の磨消繩文を伴うもの、胴部の文様が繩文に代って櫛歯条線文で特徴づけられる仲間もあり、いずれも中期後半に属するだろう。

第五〇図の9と第六〇図の11は大型の浅鉢形土器で、前者の口径は50cm、器高は18cmである。

無文で口縁は外反し1本の太い沈線がめぐっている。

後者は口径37cm、器高22cmを測る。口縁は内湾し器面全体に斜繩文を押捺する。

第四二図の10と40も波状口縁を呈する無文の浅鉢形土器の同一個体の破片で、波頂部の内側に盲孔を施し、2本の太い沈線をめぐらせている。

第一号住居址の37は胴部にクルミ圧痕をめぐらせた深鉢形土器であろう。鳥獸、魚貝類は繩文人の貴重な蛋白源ではあったが、主体となったのは植物質食糧であろう。植物遺体の追求に精力的にとり組んでいる渡辺誠氏の集計によると、堅果類は栄養学的にみてデンプン質にすぐれたドングリ類、トチ、クリなどと、タンパク・脂質にすぐれたブナ、ハシバミ、クルミなどがあり、主体はクルミ、ドングリ類、クリ、トチの4種類であるといふ。

北海道はクルミ一種に限られ、九州はドングリ類を主とし、中间の本州は4種が混在するが東にゆくほどクルミの比率が増し、西はドングリの比率がふえるそうである。

先の栄養学的な面からみれば、クルミの多い東日本はめぐまれた状態にあったといえるだろう。

石川県船岡山遺跡からクルミ圧痕のつけられた上器底部が出土しているが、これは1個の圧痕で、意識的につけられたものか、偶然につけられたものか判然としないといわれている。

本遺跡の場合は、明らかに意識的に加飾されたものであることは明白な事実で、大型の浅鉢形土器の出土とも関連して、繩文時代中期における当地方の食生活の一端を物語る間接的証拠といえるだろう。

埋壙中の埋設土器8個はすべて深鉢形土器である。キャリバー状を呈するものと、口縁湾曲部の弱いものとがある。1を除いて胴下半部と底部を欠損しており、口縁部を欠くものもある。

4-3は胴部破片である。口縁部の文様は隆起線で円形、三角形、楕円形などで区画をし渦巻文らしい部分も窺知できる。また、波状文を沈線で構成するものもある。

胴部は繩文地の上に2~3本の直線沈線や波状沈線を垂下させている。これは磨消繩文の手法が発達しない段階のもので加曾利EⅡ式に比定できると思われる。

胴部に3本の連弧文で構成する3は罹期に該当するものであろう。

石 器

1は第一〇号土壙より出土した凹石である。a面に直径1.9~2.5cmのくぼみが5個、c面に直径2.3~2.8cmのくぼみが3個存在する。現存長21cm、最大幅12.2cm、厚さ8.3cmを測る。

石斧は打製と磨製が発見された。2と3は分削形、4と6は撥形に近い。両面から打削を加え

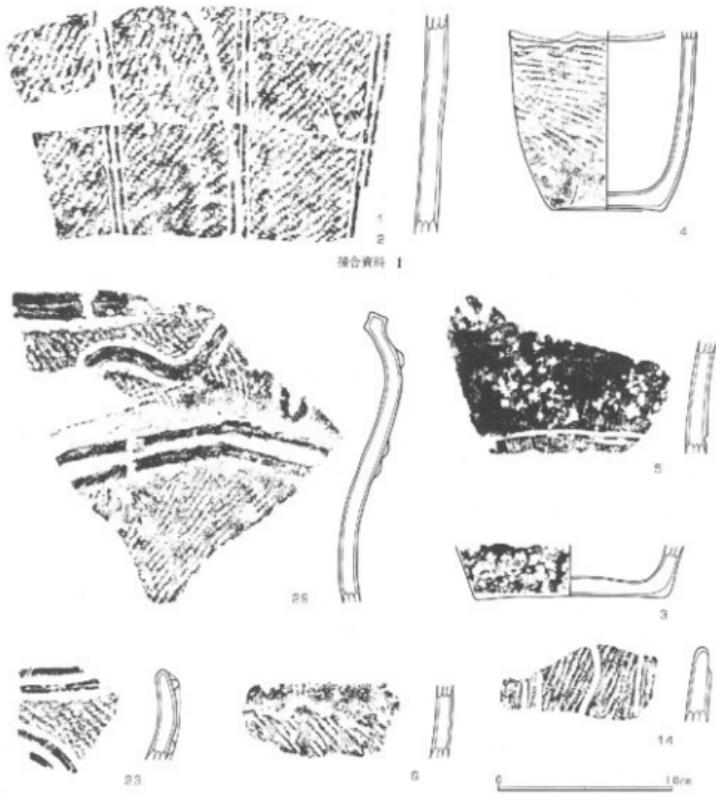
て刃部を作出している。磨製石斧は両面から研磨を加えている。石鏃はいずれも無茎である。

第63図 トレンチ出土14の土製品は、いわゆる耳飾りで、つづみ型耳飾り、輪鼓状耳飾りなどの名称がつけられている。東日本では縄文時代中期以降にあらわれ、比較的発見例も多い。

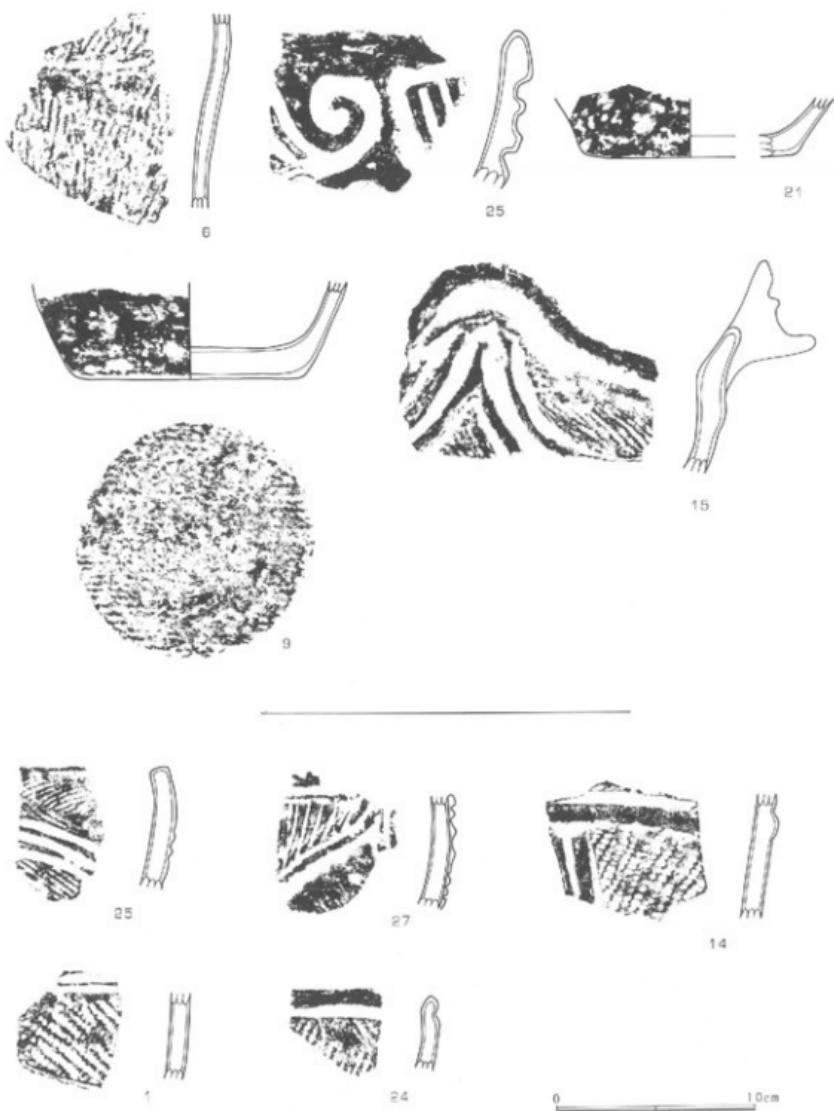
この土製品が、耳朶に孔をあけてこの孔を拡大させ、そこへはめこんだ耳飾りであることを最初に気付いたのは江見水藤である。彼は1905年（明治38）東京都田園調布の下沼部貝塚から直径3.6cmほどの透彫りのある奇妙な土製品を発掘し、当時は香か型土器の蓋ではないかとも考えられていた。ところが、前年の1904年（明治37）にも千葉県市川市の古作貝塚の焼から円形土製品を表面採集しており、古作貝塚の円形土製品と同形のものが、千葉県銚子市余山貝塚や埼玉県岩槻市真福寺貝塚などから出土した木菟土偶の耳朶の位置についており、これが耳朶にはめこんだ耳飾りの姿を実証する資料となった。

本遺跡から発見された耳飾りは、直径3.6cmほどで細い沈線で三方向から円弧状の区画をし、その中には小さな連続刺突文が施されている。

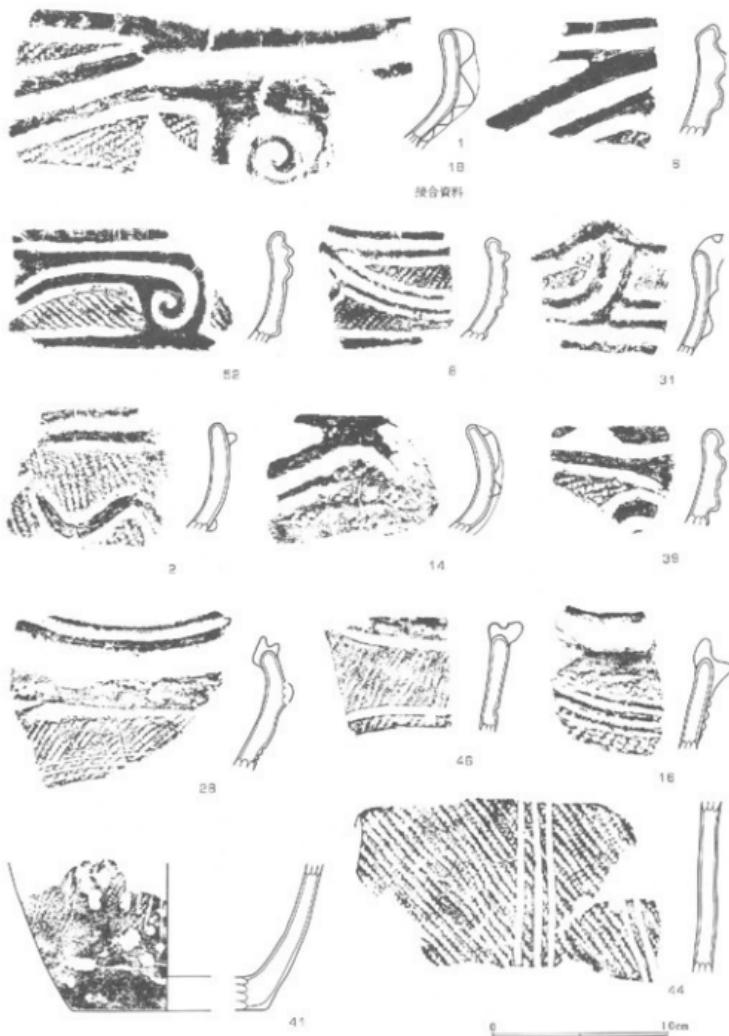
大阪府藤井寺市国府遺跡で、縄文時代晩期の埋葬骨の頭蓋骨の右耳の位置から土製輪鼓状耳飾りが発見された例が報告されているが、この人骨は青年期の男性であった。耳飾りを男、女向性がつけるのが一般的な風習であったかどうかは今日でも不明の点が多い。



第三九図 第一号土壤出土純文土器実測図・拓影図



第四〇図 第四号土壤（上）、第八号土壤（下）出土縄文土器拓影図



第四一図 第五号土壙出土繩文土器拓影図(一)



第四二図 第五号土壤出土縄文土器実測図・拓影図(二)



24



25



26



27



28



29



30



31



32



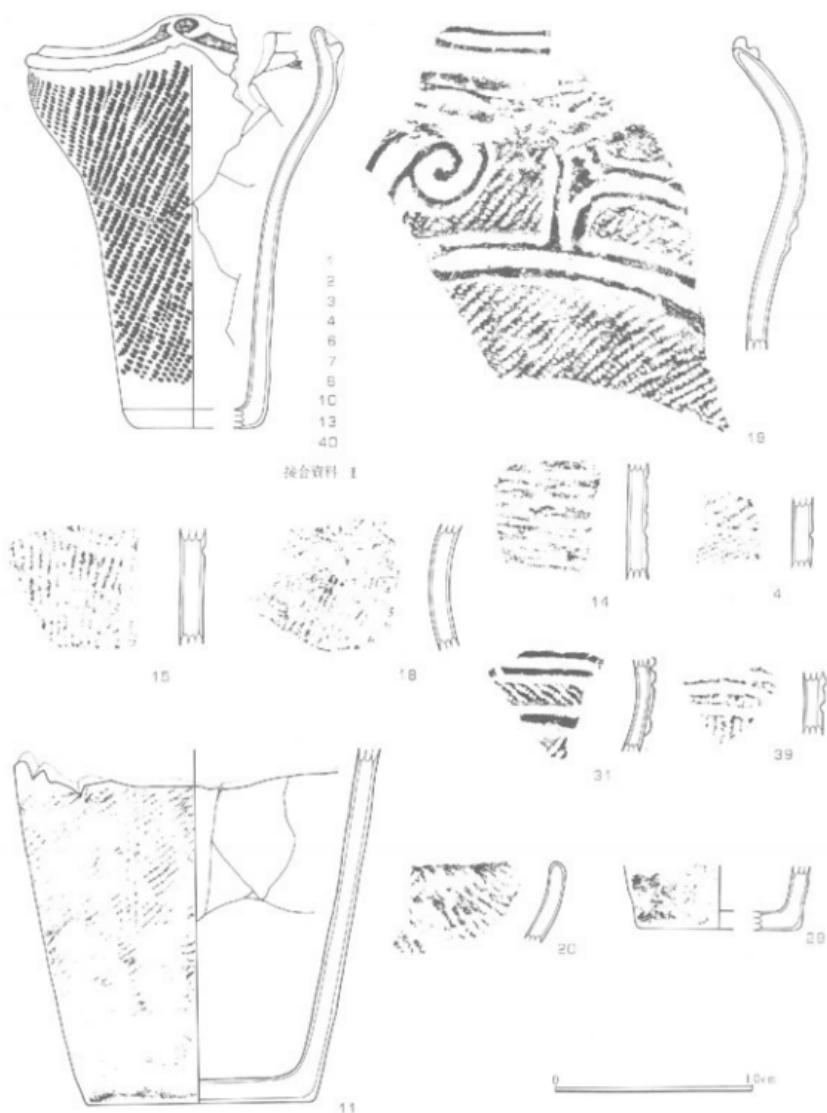
33



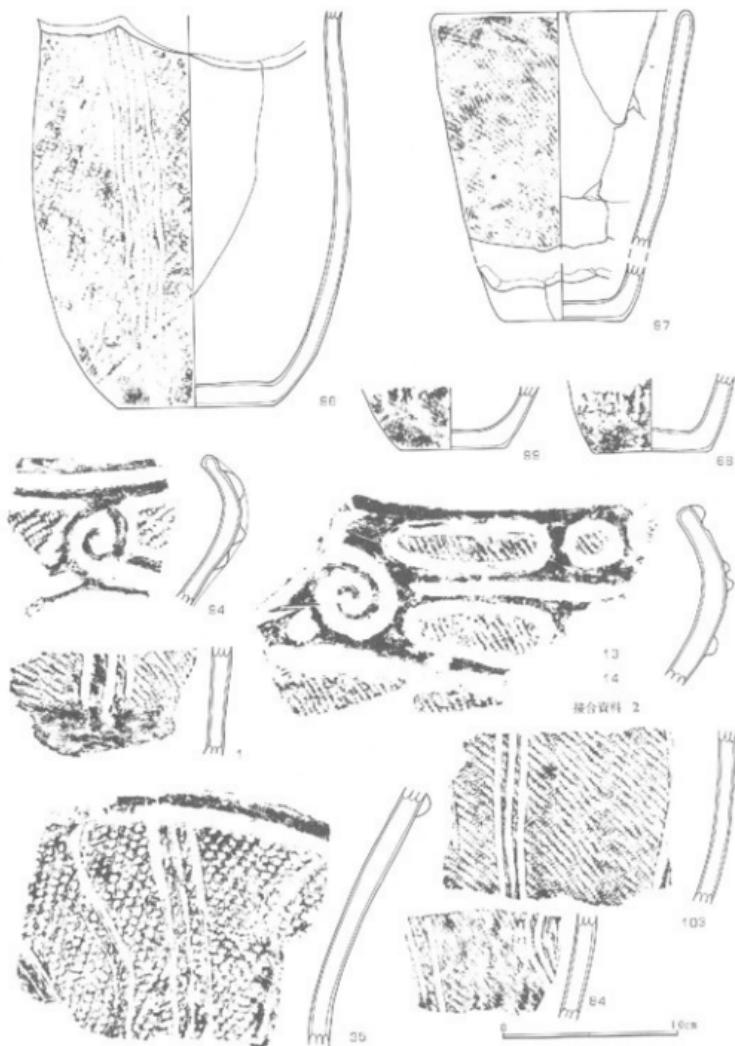
34

0 10cm

第四三圖 第五號土壤（上），第六號土壤（下）出土繩文土器拓影圖



第四四圖 第七号土壤出土綱文土器実測図・拓影図



第四五図 第一〇号土壤出土縄文土器実測図・拓影図(一)

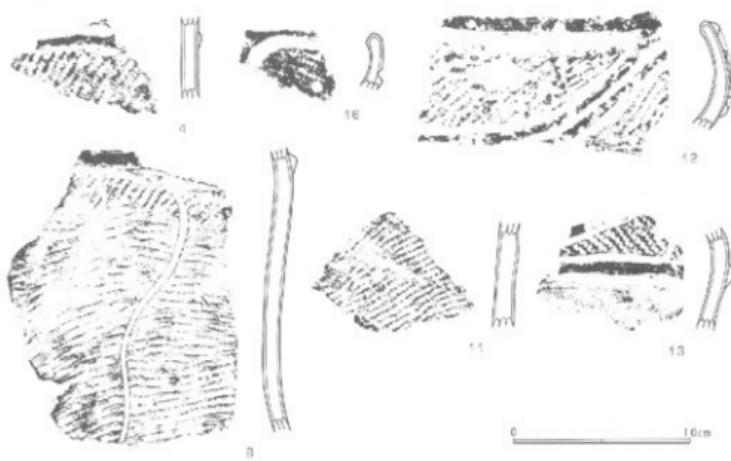
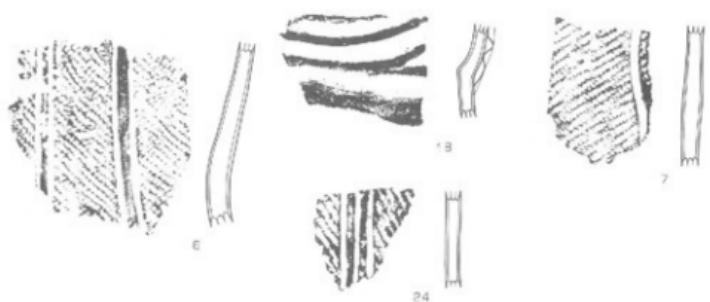


第四六圖 第一〇号土壤出土縄文土器拓影図(二)

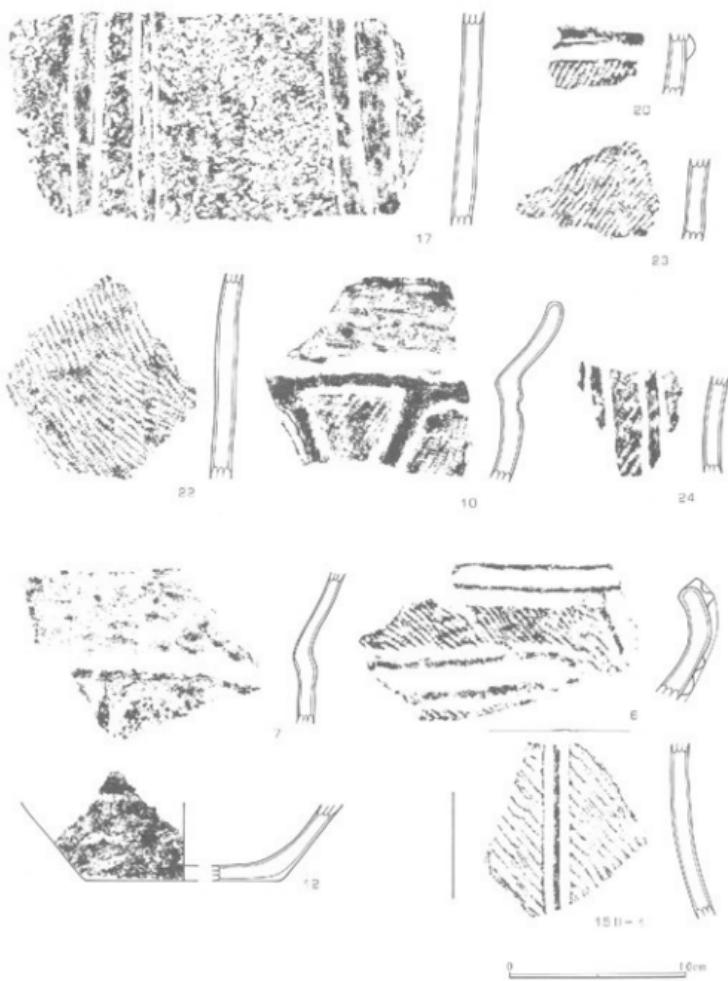


0 10cm

第四七図 第一一号土壤（上），第一一二号土壤（下）出土繩文土器拓影図



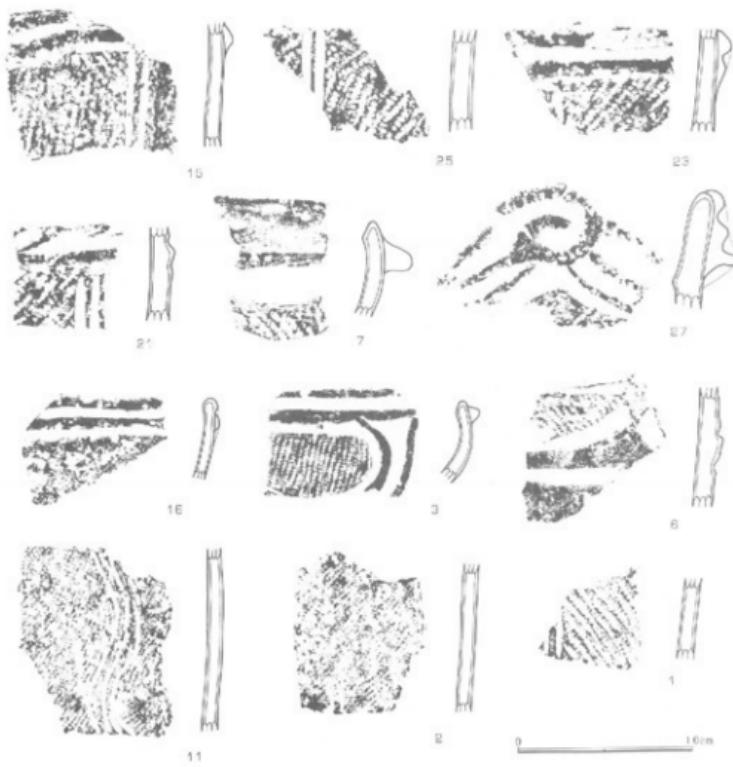
第四八圖 第一三號土壤（上），第一八號土壤（下）出土繩文土器拓影圖



第四九図 第一四号土壤・第一五号土壤（右下）出土縄文土器拓影図



第五〇図 第一六号土塚出土縄文土器実測図・拓影図



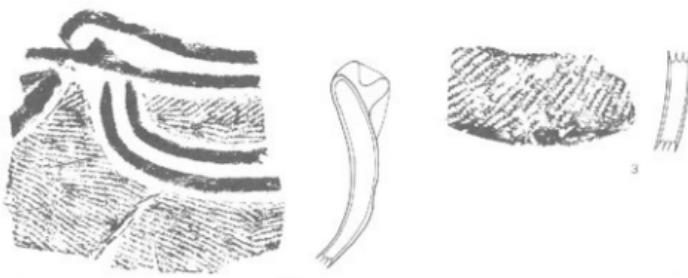
第五一図 第一七号土壤出土縄文土器拓影図



10

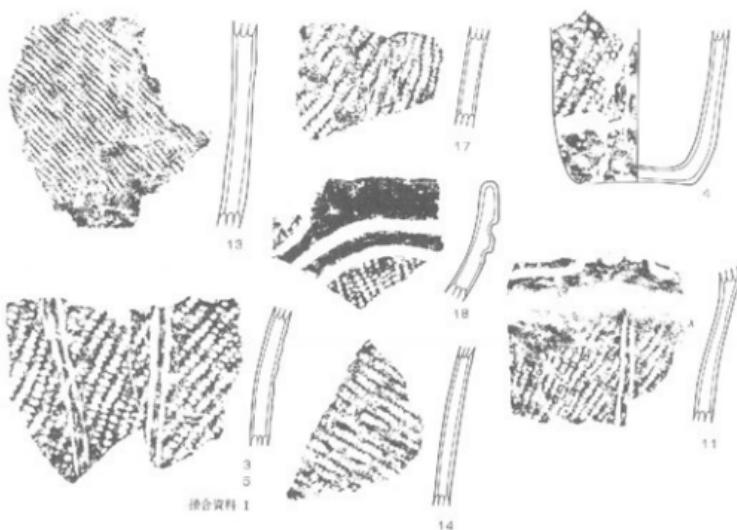
4

2



12

3



13

17

16

18

11

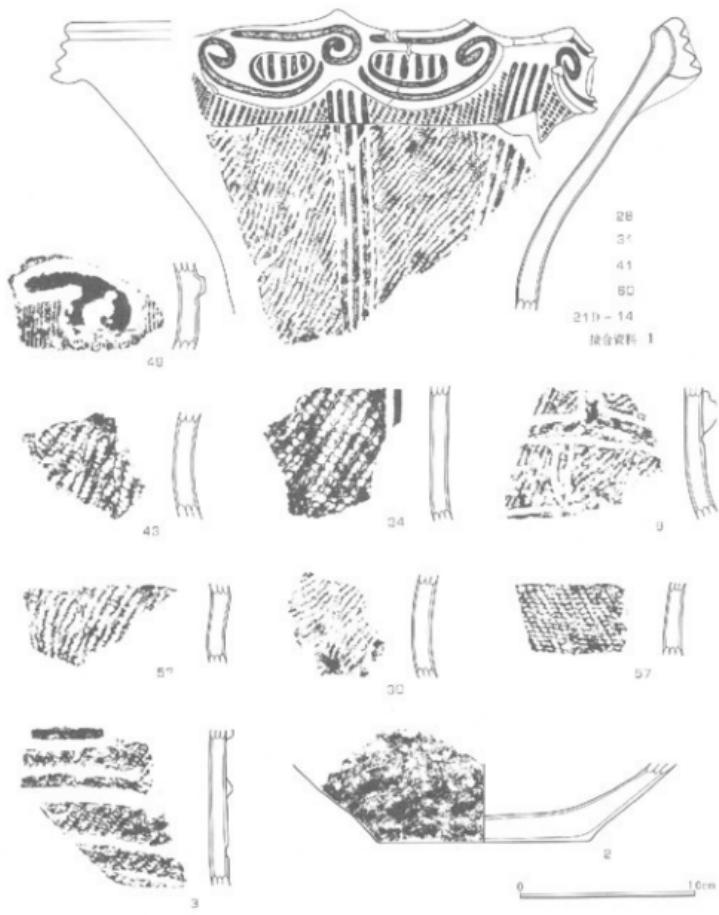
混合資料 1

3

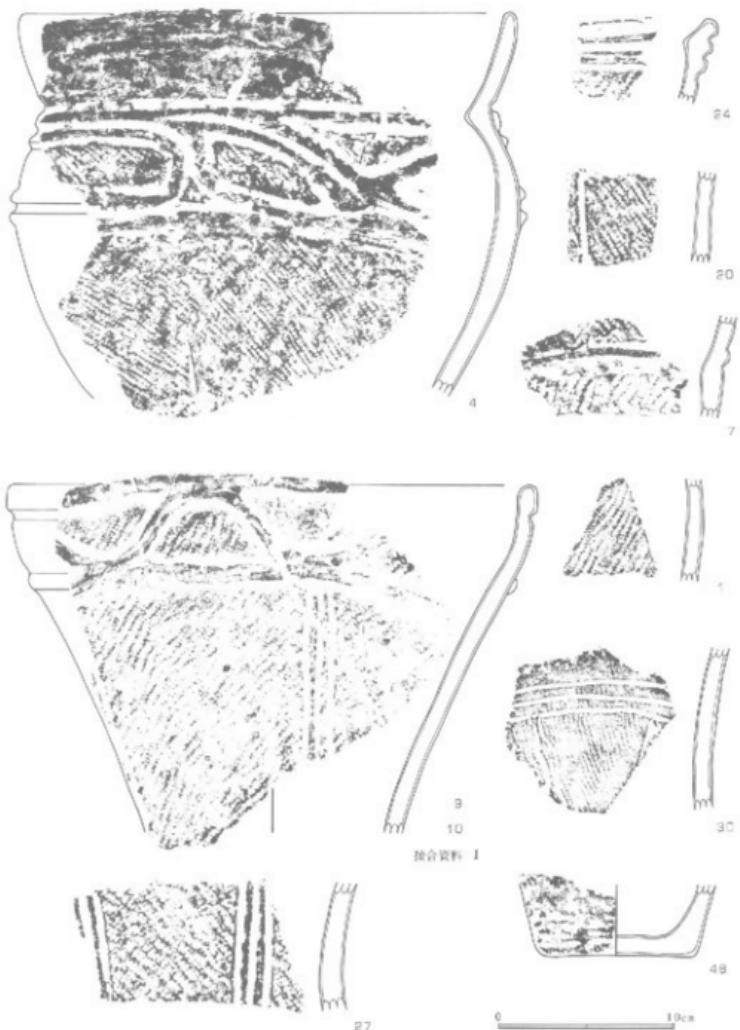
5

14

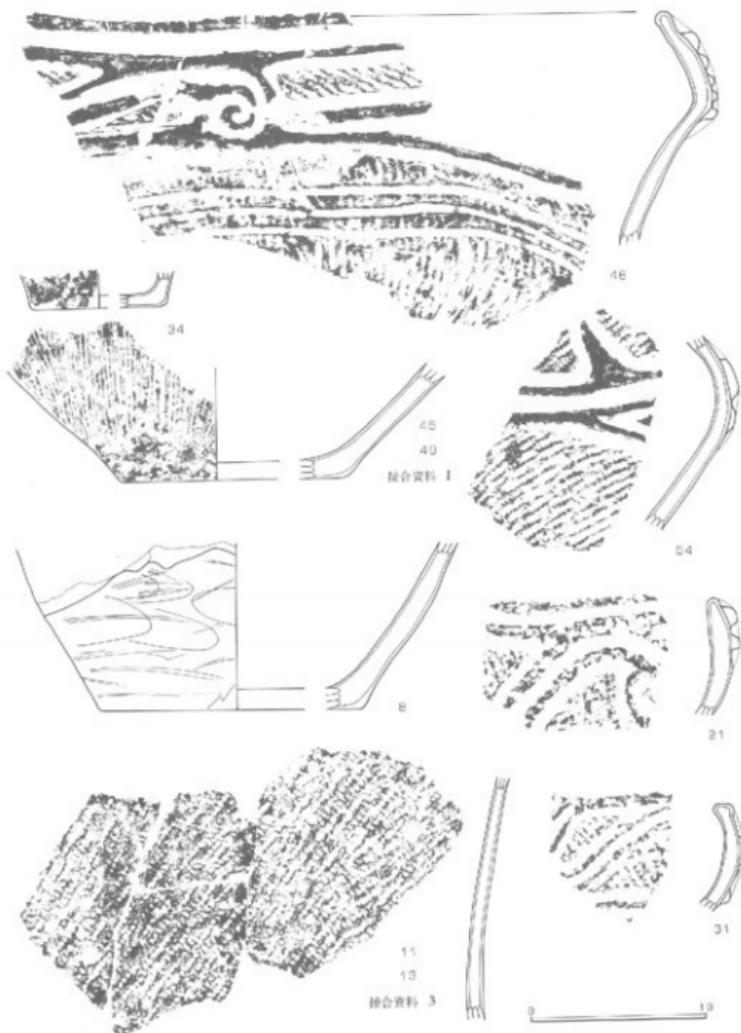
第五二図 第一九号土壤（上），第二二号土壤（下）出土縄文土器拓影図



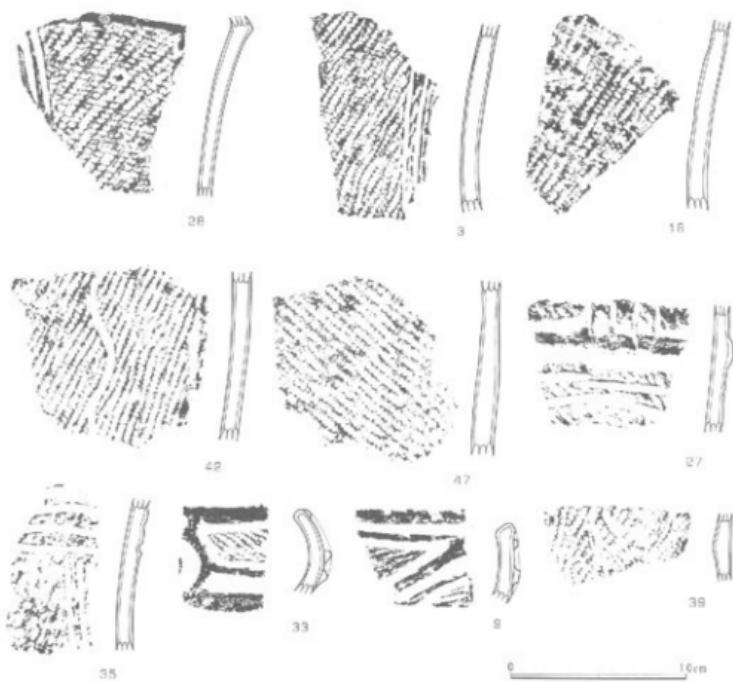
第五三図 第二〇号土壙出土純文土器実測図・拓影図



第五四図 第二一号土壤出土縄文土器拓影図



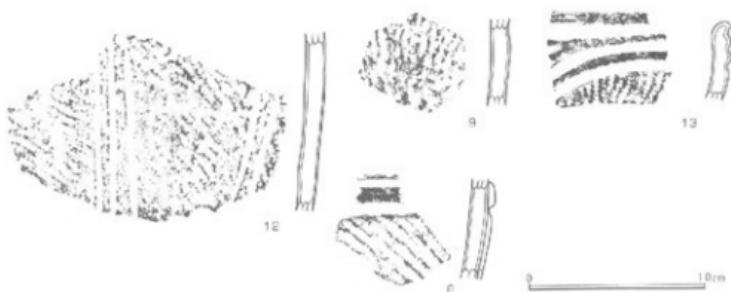
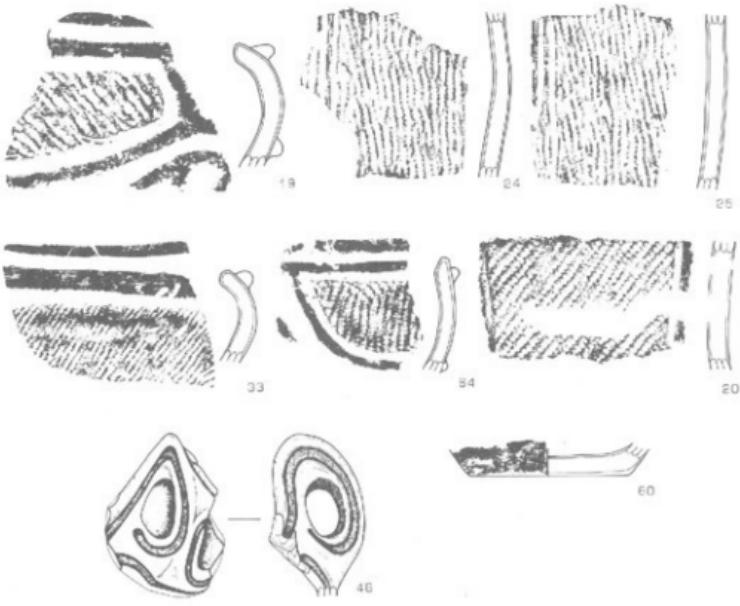
第五五圖 第二三號土壤出土繩文土器實測圖・拓影圖(一)



第五六図 第二二号土壤出土縄文土器拓影図(二)



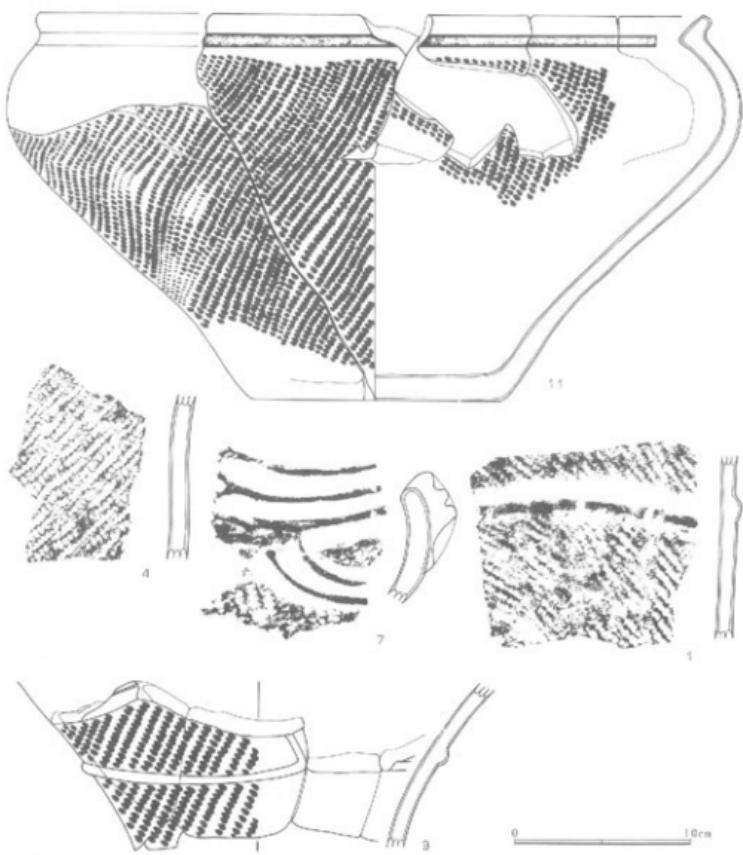
第五七图 第二四号土壤出土绳文土器拓影图



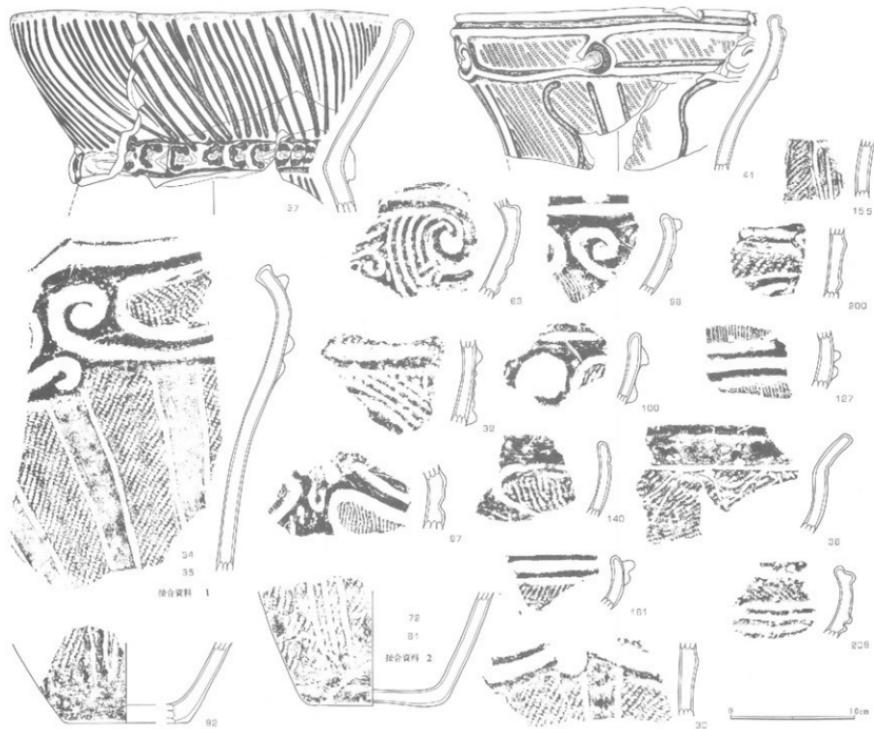
第五八図 第二五号土壤（上），第二七号土壤（下）出土縹文土器実測図・拓影図



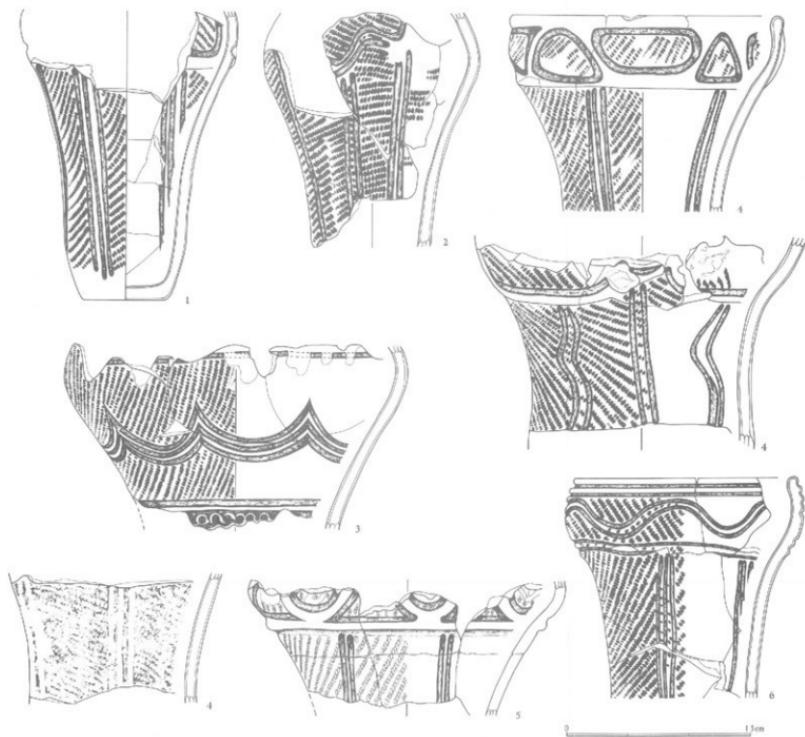
第五九圖 第二六土壤出土繩文土器拓影圖



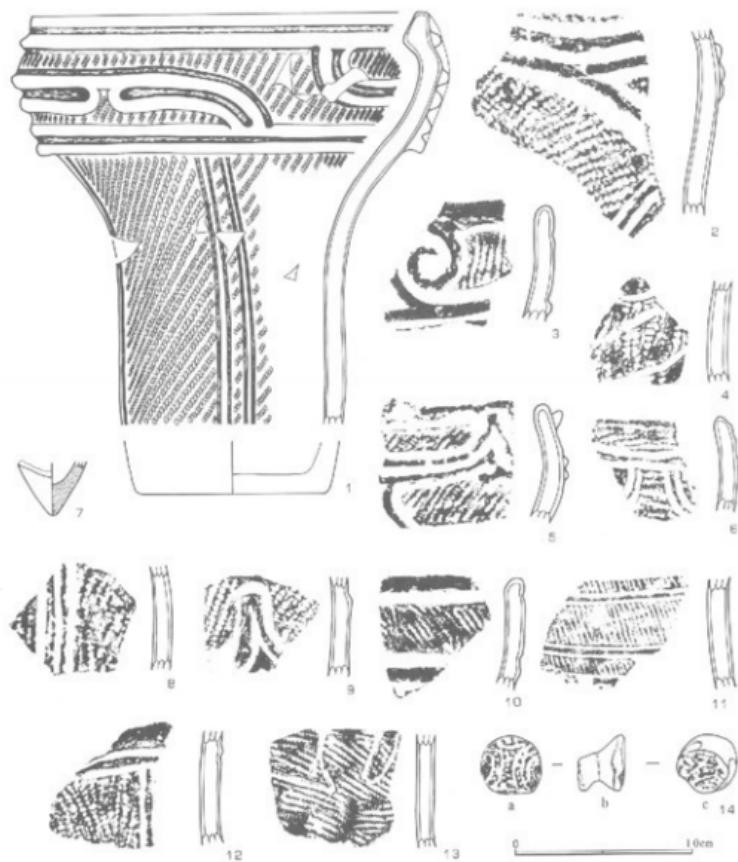
第六〇図 第二九号土壤出土縄文土器実測図・拓影図



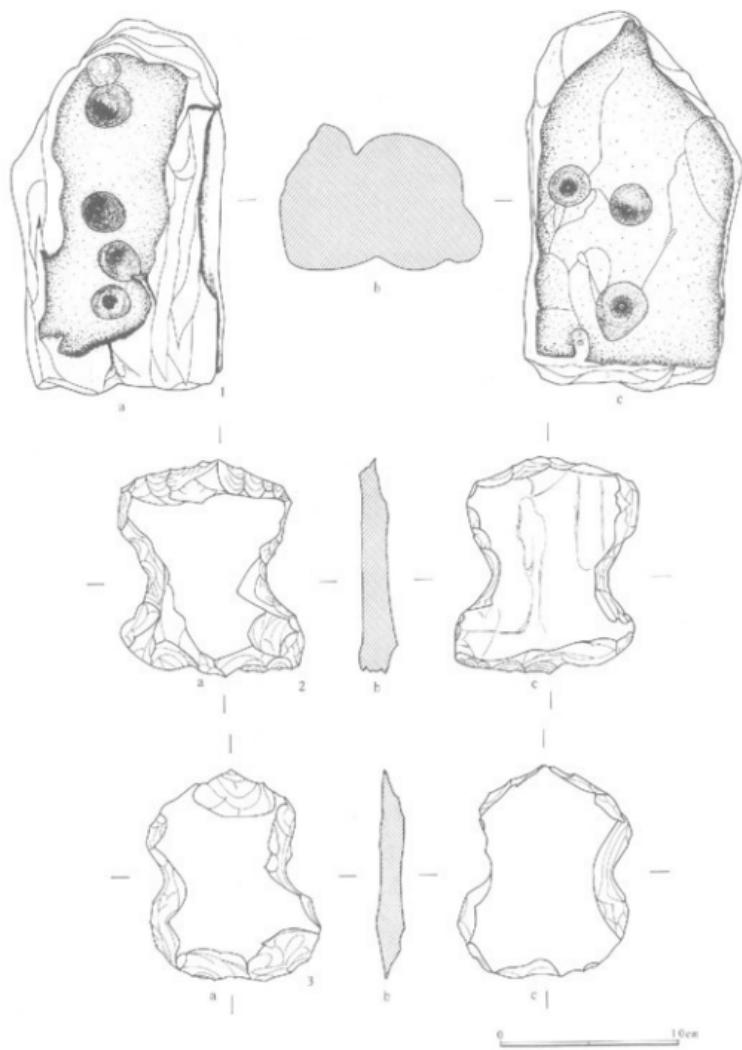
第六一図 第一号住居址出土縄文土器実測図・拓影図



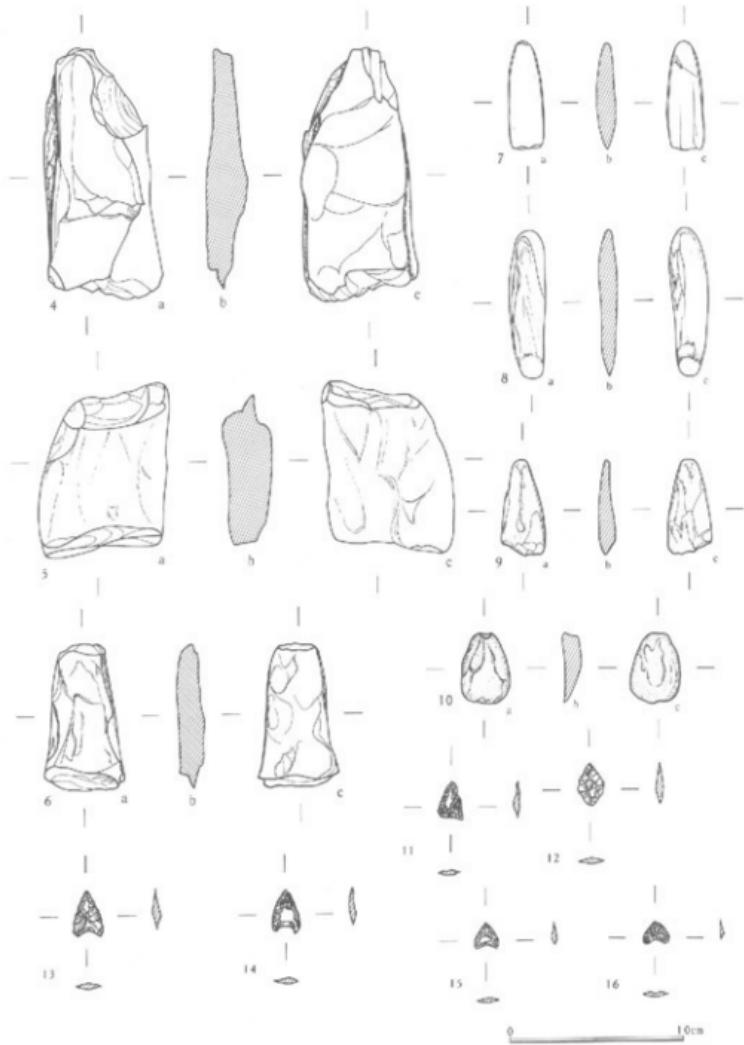
第六二图 埋甕炉址出土绳文土器实测图·拓影图



第六三図 トレンチ出土縄文実測図・拓影図



第六四圖 調査区出土石器実測図(一)



第六五図 調査区出土石器実測図(二)

B 地区の遺構と遺物

第九章 B 地区の調査概要

A 地区の調査が終了し、遺物の整理も済んで、報告書の一部印刷を開始した平成 3 年 8 月、A 地区に隣接する友部町大字平町字北山1416-1 の、町道 2 級 4 号線道路改良工事に伴う記録保存のための第二次発掘調査を実施することになった。

開発面積は約 5832m²で、この地区を B 地区と呼称することにした。急傾斜面を除く平坦部について調査を行うこととし、樹木や草やぶの伐開を開始した。

その結果、調査予定区域のはば中央部から、円墳状の塚が現れ、当地に伝承されている境界塚らしいということになった。そこで、この塚の調査も含めて、調査方針を次のように設定した。

- 1 調査区域は細長い地形なので、2 × 2 m のグリッドを 14か所に設定する。
- 2 遺構の存在が確認された場合は、グリッドを拡張して、原位置法による発掘調査を行う。
- 3 20cm コンターによる塚の測量調査を行う。
- 4 測量調査終了後、セクションベルトを設定して盛土の全面除去を行う。
- 5 調査期間を平成 3 年 8 月 26 日より 22 日間とする。
- 6 調査報告書は、A 地区に B 地区を併せて刊行する。

という基本方針を立て、主任調査員に千種重樹、調査員に水谷正、飯島栄子を加え、地元作業員の協力を受けて調査を実施した。

各グリッドの堆積土の厚さ（深さ）は、70~100cm を測り、随所に山芋を掘ったら穴らしい凹みがあるものの、ローム面まで達しているのはわずかで、遺構の確認には支障がなかった。

確認された遺構は、第 1 グリッドと第 2 グリッドの拡張部から土壙 4 基、第 5 グリッドから土壙 1 基、第 7・8 グリッド拡張部から土壙 3 基、第 11 グリッド拡張部から有床平地式住居址 1 軒である。

これを時期別に分類すると、縄文時代中期中葉の土壙 4 基、中期後葉の土壙 4 基となる。

有床平地式住居址は、おそらく縄文時代中期後葉に属するものと思われる。

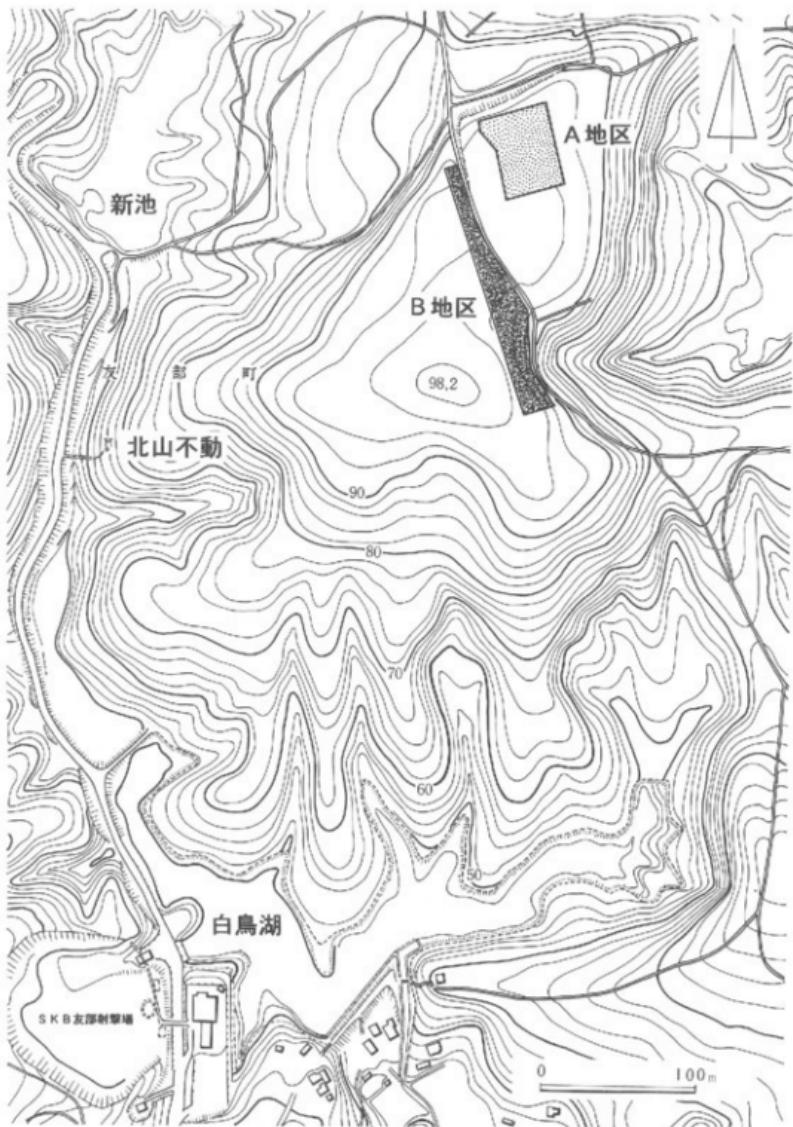
円墳状の塚については、後述するように境界塚であろうと考えられる。

第 11 グリッドからは、地表下 20cm の位置に炭焼跡らしい形跡が現れたが、調査日数の関係で詳細な記録は省略した。

出土遺物は、土器破片と石器および自然石であるが、土器の完形品は皆無である。

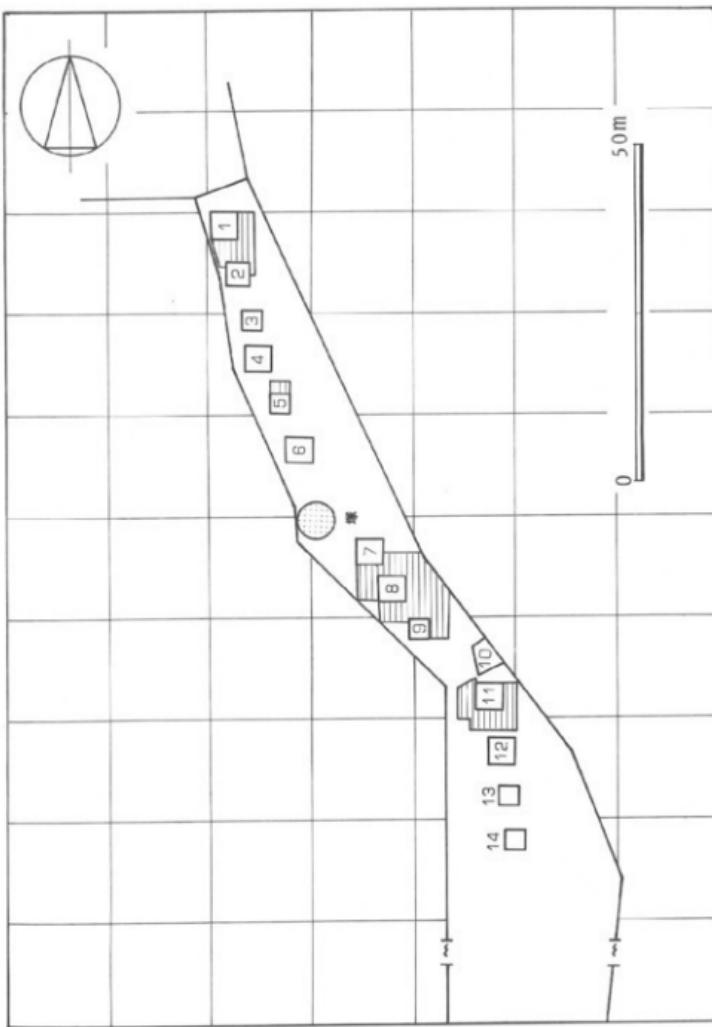
土器の器種、器形は縄文時代中期中葉～後葉の平縁乃至キャラリバー状の深鉢形が大部分を占めており、石器は、凹石、石皿、石棒、石剣などが出土した。

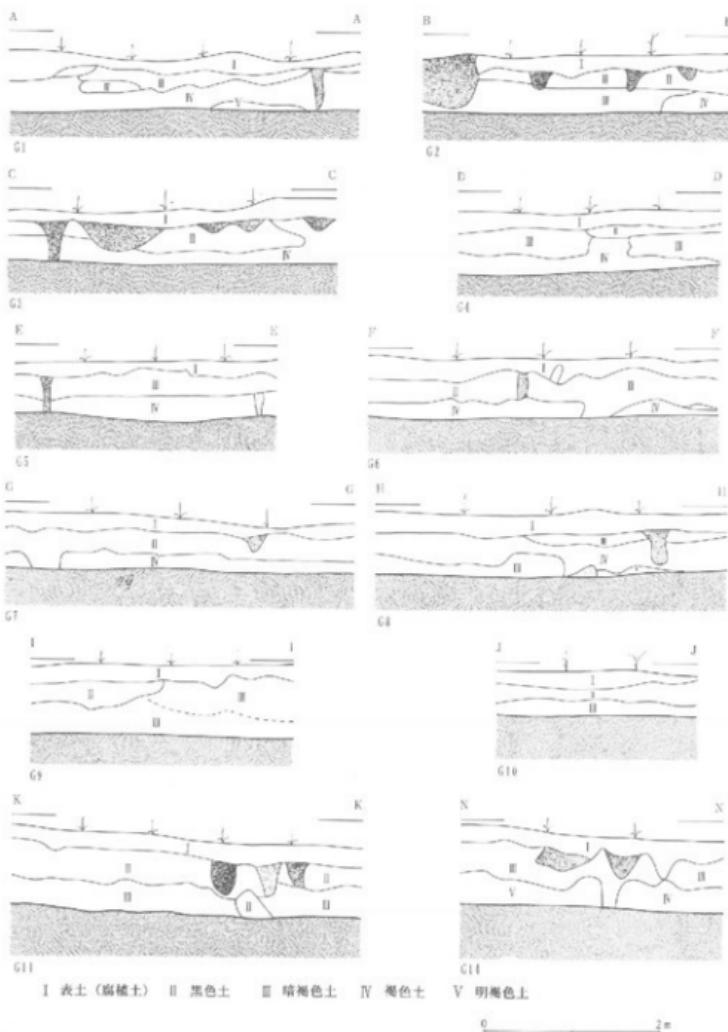
A・B 両地区が同一遺跡であることはいうまでもないことである。



第六六図 B 地区調査区位置図

第六七図 B地区グリット設定図・境界線位置図





第六八図 グリット土層断面図

第一〇章 土 壤 群 の 調 査

1 第一号土壤 (第六九・七一図、図版第五二)

本土壙は、第1号グリットより部分検出され、拡張して全容を把握した。

形状は、南側が尖った不整円形で、開口部の大きさは、東西193cm、南北210cm、深さは東側が深く西側が浅い。中心部の深さは27cmである。底径は東西160cm、南北180cmで開口部とほぼ同様の形状を呈する。断面形を観察すると、周壁は斜めに掘り込まれているが、東側の立ち上がりは西側に比して急である。壁面の崩落は認められず比較的堅固である。

底面はおむね平坦で、特に踏み固めた様子は窺えず硬度は2程度である。

埋没土は、微量のローム粒子を混入する黒褐色土の単一層で、層序を区分できるような土層の変化は全く認められない。

遺物の出土状態を平面分布で観察すると、空白部分が多く、強いて言及すれば北側と南側にやや部分的なまとまりを示す程度である。これを垂直に記録したドットでみると、層位的には下層から確認面付近まで平均に散在している。

遺物総数は25個で、内訳は縄文土器破片24個、自然石1個で、完形品は出土せず、すべて破片である。器種、器形を窺えるものには平縁の深鉢形土器がある。

2 第二号土壤 (第七〇・七一図、図版第五一)

本土壙は、第1号グリットを拡張した際にその一部が南壁側に現れ、更に拡張して全体を検出した。形状は、ほぼ円形で、開口部の大きさは東西156cm、南北165cm、深さは51cmを測る。

底径は、東西140cm、南北150cmで、底面もほぼ円形といえるだろう。

断面形を観察すると、周壁はやや斜めに掘り込まれているが、円筒状に近い形状を呈している。壁面の崩落は認められず堅固である。底面はおむね平坦で、硬度は3に近い硬さである。

底面には5個のピットが存在する。周壁下に正五角形状に掘られており、P₁の口径は28×16cm、深さ10cm、P₂は口径22×12cm、深さ4cm、P₃は22×10cm、深さ9cm、P₄は25×13cm、深さ10cm、P₅は42×23cm、深さ29cmである。これらのピットは本土壙に付随して掘られたものであろう。

埋没土は、ローム粒子・焼土粒子を混入する黒褐色土が充満しており、底面付近はやや色調が明るくなるが明確な区分線は引き難い。

遺物の出土状態を平面分布に記録したドットから観察すると、分布図の左上、つまり北西側に集中する傾向を指摘できる。

この状態を断面図に投影すると、遺物番号34以外はすべて上層部の西側に集中する特徴的な傾向がみられる。

これは、本土壙廃棄時の土砂の埋め戻しと、遺物投棄の間に密接な関係があるものと思われる。

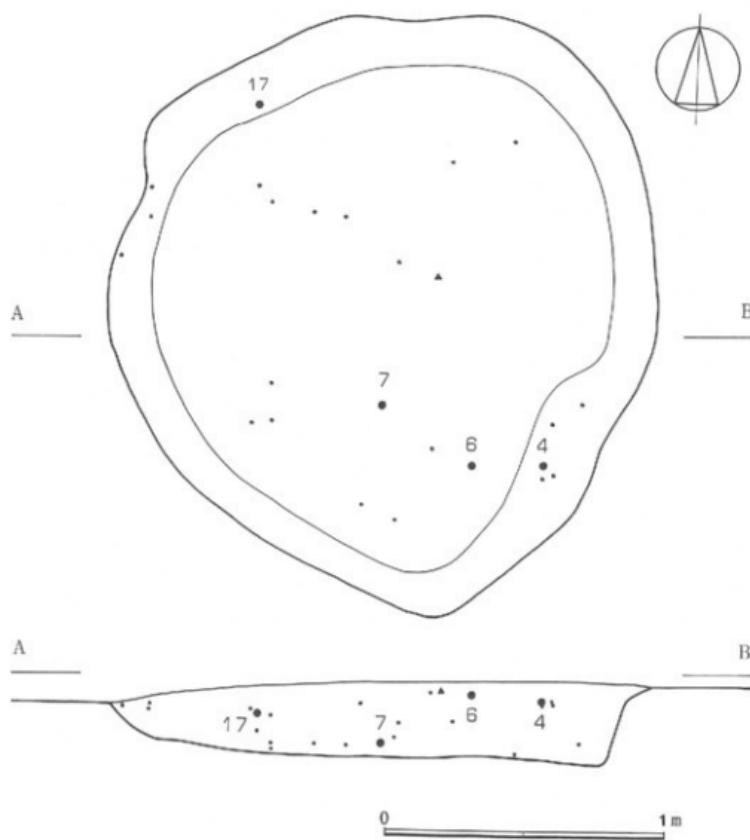
遺物総数は34個で、縄文土器破片33個と自然石1個である。接合資料は3例が抽出できた。

接合資料 1 〈深鉢形土器〉 9▽18・10▽50

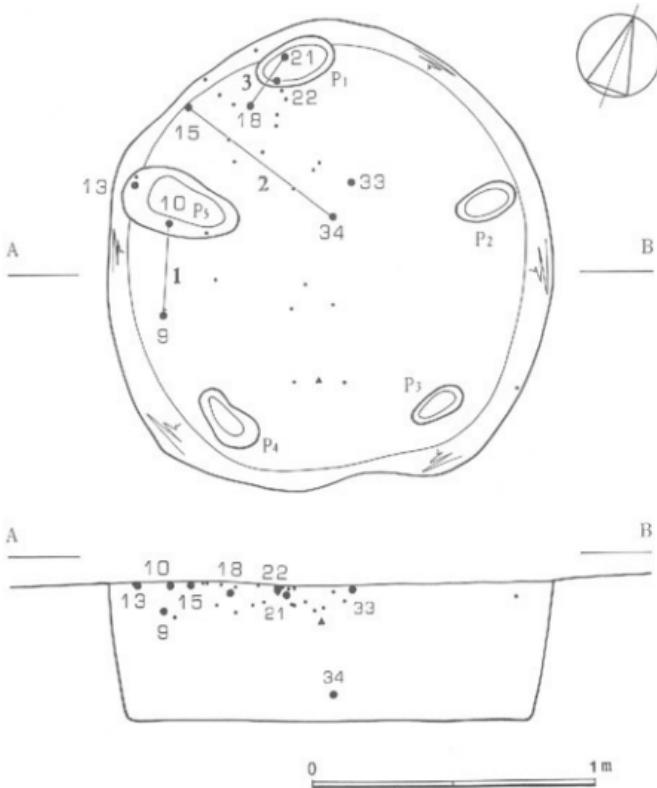
接合資料 2 〈 タ 〉 15▽36・34▽50

接合資料 3 〈 タ 〉 22▽51・18▽40

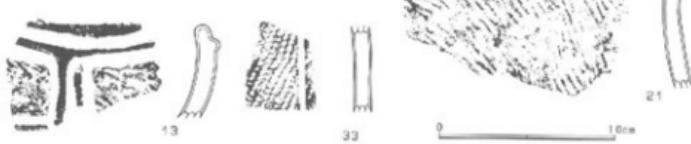
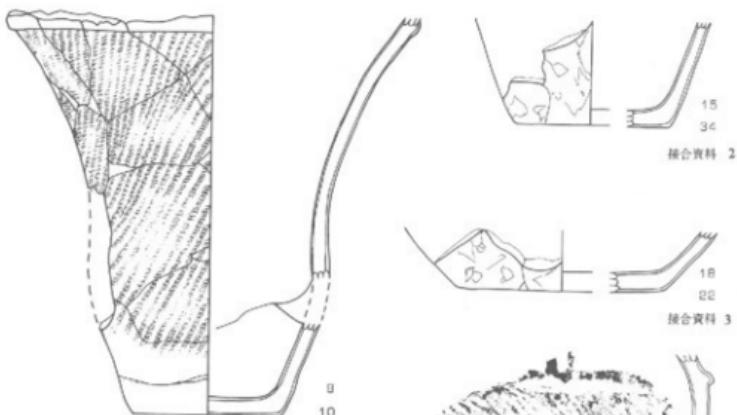
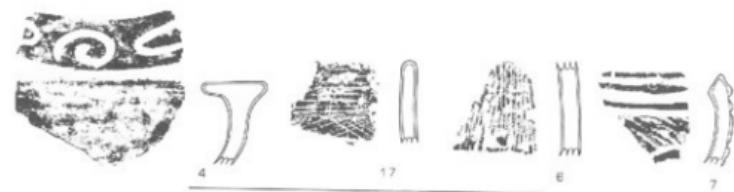
接合資料1は口縁部を欠損しているが、おそらくキャリバー状の深鉢形土器であろう。13がその口縁部ではないかと思われる。接合資料2は深鉢形土器の底部、接合資料3は浅鉢形土器の底部である。本土墳は、縄文時代中期中葉に比定されよう。



第六九図 第一号土壤実測図・遺物出土状態図



第七〇図 第二号土壤実測図・遺物出土状態図



第七一図 第一号（上段），第二号（下段）土壤出土土器実測図・拓影図

3 第三号土壙（第七二・七四図、図版第五二）

本土壙は、第1グリット拡張によって検出された土壙である。プラン確認の時点では、埋没土に全く変化がみられなかつたので1基の土壙かと思われたが、調査の進行につれて2基の土壙が重複していることが判明した。西側をA号、東側をB号と呼称することにしたが、B号東側の一部は調査日数の延伸を避けるため完掘には至らなかつた。A号が旧くB号が新らしい。

A号の形状は、開口部の大きさ東西220cm（推定）、南北190cmで梢円形を呈し、深さは31cmを測る。底径は、東西190cm（推定）、南北165cmで底面も梢円形である。

東壁の掘り方は、B号に破壊されているので不明であるが、西壁の掘り込みと同様に斜めに掘り込まれているものと思われる。残存周壁の崩落は認められない。

底面はおおむね平坦であるが、踏み固めたような痕跡はなく硬度は2程度である。

埋没土は、ローム粒子をわずかに混入する黒褐色土が充満し、層序の区分線を引けるような層相の変化は識別できない。

遺物の出土状態は、極めて散発的で、わずかに8個にすぎない。縄文土器破片5個と自然石3個である。拓影図に収録できたのはA-7の1個だけで、キャリバー状深鉢形土器の口縁部である。これ以外は摩耗が著しく、拓影は不可能であった。

B号の開口部形状は梢円形で、東西150cm（推定）、南北175cm、深さは100cmを測る。

底面の形状も梢円形を呈するものと思われる。底面は比較的かたく硬度は3に近い。

断面図でみるとおり、周壁はフ拉斯コ状（袋状）に掘り込まれておらず、壁面は堅固で崩落は認められない。

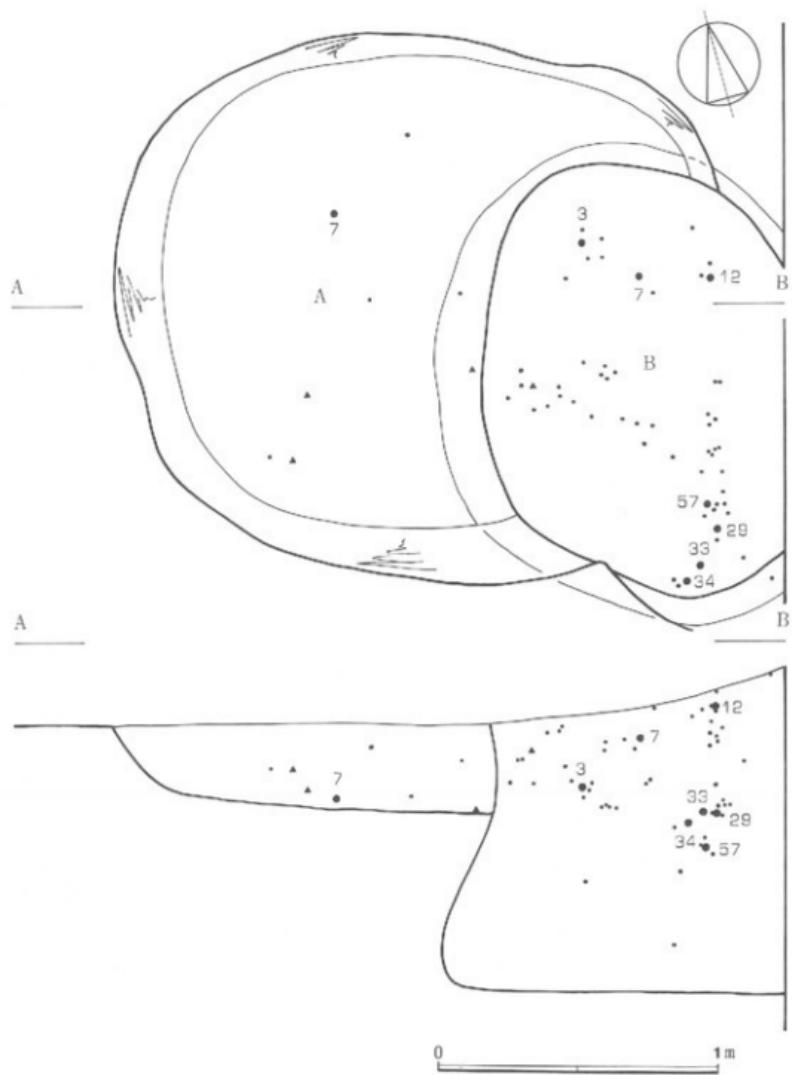
埋没土の性状は、A号と同様に微量のローム粒子を混入する黒褐色土だけが堆積し、埋没土断面を精査しても土層を区別し得るような変化はみられない。

遺物の出土状態は、平面的には大部分の遺物が開口部の範囲内に散在する。この在り方を断面図に投影すると、底面上には皆無で、中層より上部に集中する傾向を指摘できる。

この状態は、本土壙の埋め戻しと遺物投棄の間に密接な関係のあることを示唆している。

出土遺物の総数は58個で、内訳は縄文土器破片57個、自然石1個である。土器破片57個の表裏関係は、表42個（74%）、裏8個（14%）、立ち7個（12%）という比率になる。

器種、器形は平縁やキャリバー状深鉢形土器が大半を占め、縄文時代中期中葉に属するものと考えられる。



第七二図 第三号土壤実測図・遺物出土状態図

4 第四号土壙（第七三・七四図、図版第五二）

本土壙は、第2グリット内に部分検出され、拡張して全容を捉えることができた。

開口部の形状は不整円形で、東西210cm、南北220cm、深さは45cmを測る。

底径は、東西195cm、南北200cmで、底面も不整円形である。

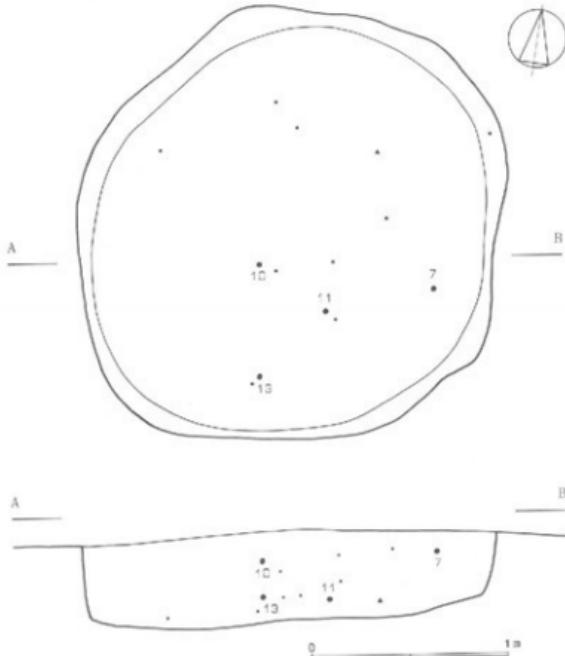
周壁は斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落は認められない。底面には若干の凹凸はあるもののほぼ平坦で、硬度は2に相当する。

埋没土は、黒褐色土だけが充满し、層序の変化は認められない。

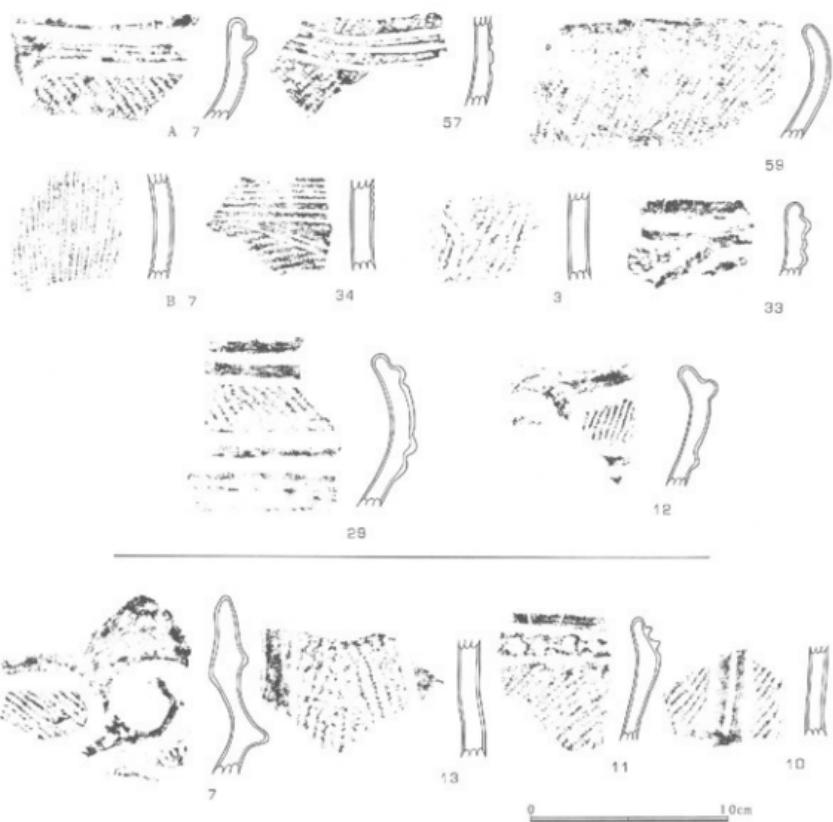
遺物の平面分布はきわめて散発的で、空白部分が多く、特別な傾向は指摘できない。

断面図に投影しても西側には少なく中央部より東側の中間層にやまとまりを示す程度である。遺物総数は14個で、縄文土器13個、自然石1個である。拓影図をみると、磨消しの手法を用いた深鉢形土器が多い。

本土壙は、縄文時代中期後葉に比定されよう。



第七三図 第四号土壙実測図・遺物出土状態図



第七四図 第三号（上段），第四号（下段）土壤出土土器拓影図

5 第五号土壙（第七五・七六・七七図、図版第五二・五三）

本土壙は、第5グリットの北壁寄りに部分検出され、グリットを北側に拡張して全容を把握した。開口部の形状はほぼ円形で、東西265cm、南北250cm、深さは中心部で53cmを測る。

底径は、東西233cm、南北232cmで、底径も円形である。

断面形を観察すると、周壁は斜めに掘り込まれており、壁面は堅固で崩落の痕跡を認めることはできない。

底面の一部は鹿沼層に達しているが、やや凹凸の存在は認められるもののおおむね平坦で、硬度は2に相当する。

埋没土の性状は、微量のローム粒子が混入する黒褐色土の單一層で、わずかにロームブロック・鹿沼ブロックも点在する。

遺物の出土状態を平面分布に記録したドットから観察すると、北壁際の小さなまとまりと、中央部より南東寄りの大きなまとまりとに分けられる。特に後者は密度が高い。

これをA-Bセクションに投影すると、底面直上から確認面付近まで万遍なく散在していることが看取できる。

出土遺物の総数は76個で、内訳は繩文土器片71個、石器2個、自然石3個である。

土器片71個の表裏関係は、表31個(44%)、裏30個(42%)、立ち10個(14%)という比率になる。

器種、器形はキャリバー状深鉢形土器が多い。

第七七図の右器は、60が凹石の破損品、61が砥石の完形品である。

凹石はA面に57個、C面に12個、合計69個の凹みがあり、C面を石皿として利用している。

凹石の原形は長橢円形であったと思われるが、ほぼ中央部より破損しており、現存最大長28cm、最大幅26cm、中央部の厚さは8.7cmを測る大型のものである。

砥石は完形品で、細長い自然石を利用しており、最大長55cm、最大幅15cm、厚さ9cmを測る。

砥石としての利用面は長さ49cm、幅5~11cmで、磨製石斧、石棒、石劍などの研磨に使用したらしく極めて平滑である。砥石としては大型のものといえるだろう。

本土壙は、繩文時代中期中葉に比定されるだろう。

6 第六号土壙（第七八・八一図、図版第五三）

本土壙は、第7号グリットより一部検出され、拡張を行って全体を捉えることができた。

開口部の形状は椭円形を呈し、長径280cm、短径230cm、深さは中心部で40cmを測る。

底径は長径260cm、短径210cmで、底面も椭円形である。

断面形は、周壁を斜めに掘り込んでいるが、南側は浅く2段掘込みの形状を示している。

壁面は比較的堅固で、崩落の痕跡は認められない。底面には凹凸が多く軟らかい。硬度は2程度である。西壁際には3個のピットが存在するが、本土壙に付随して掘られたものであろう。

埋没土は、ローム粒子とローム小ブロックが混在する黒褐色土の単一層である。

遺物の出土状態を平面ドットで観察すると、中央部より西側に偏在する傾向を指摘できる。

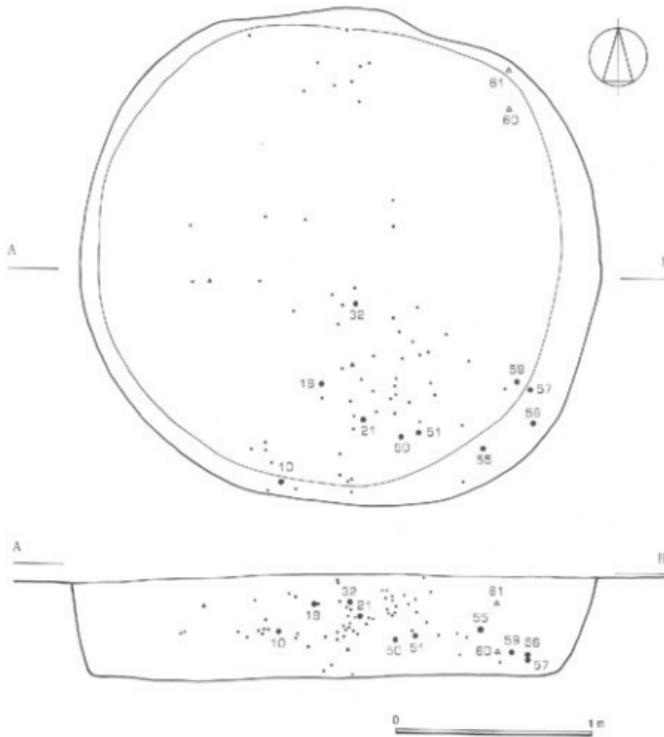
A-B セクションに投影した垂直分布の在り方は、中央部より右側（東側）には少なく、左側（西側）の層中に广泛なく散在している。

遺物総数は53個で、縄文土器破片51個、自然石2個である。

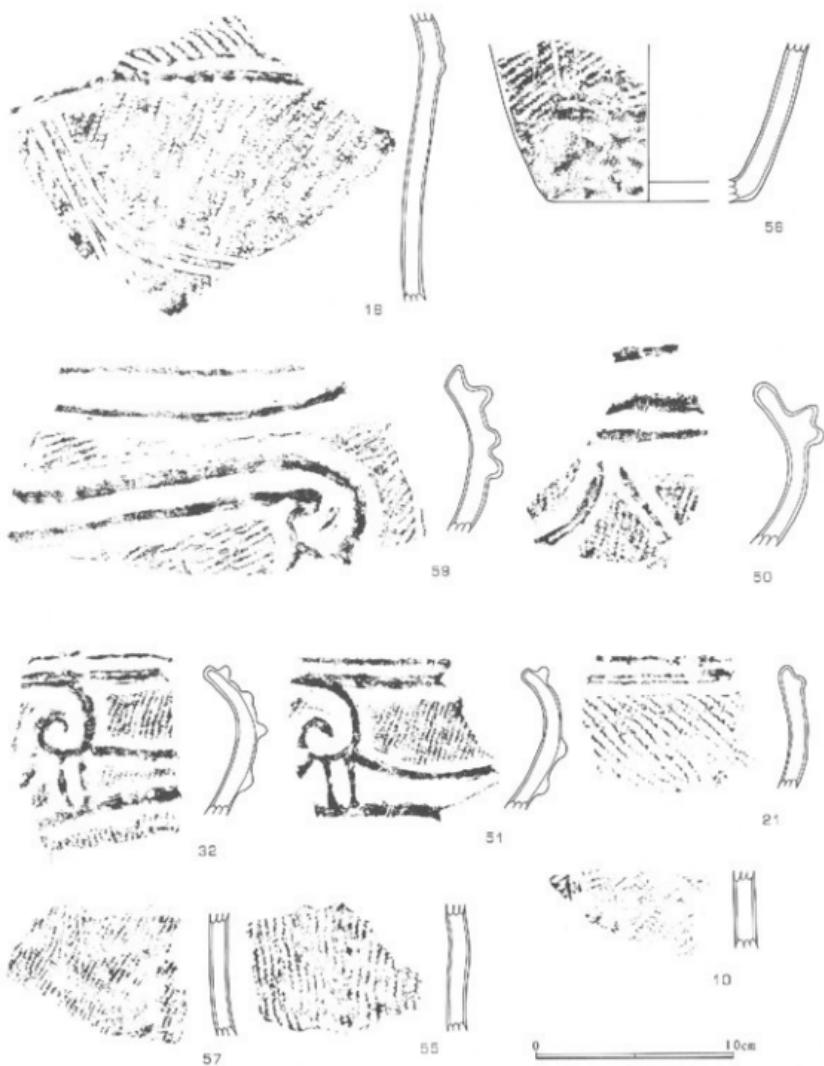
土器破片51個の表裏関係は、表29個（57%）、裏16個（31%）、立ち6個（12%）という比率になる。

出土土器の大部分は、磨消しの手法を用いた深鉢形の土器群である。

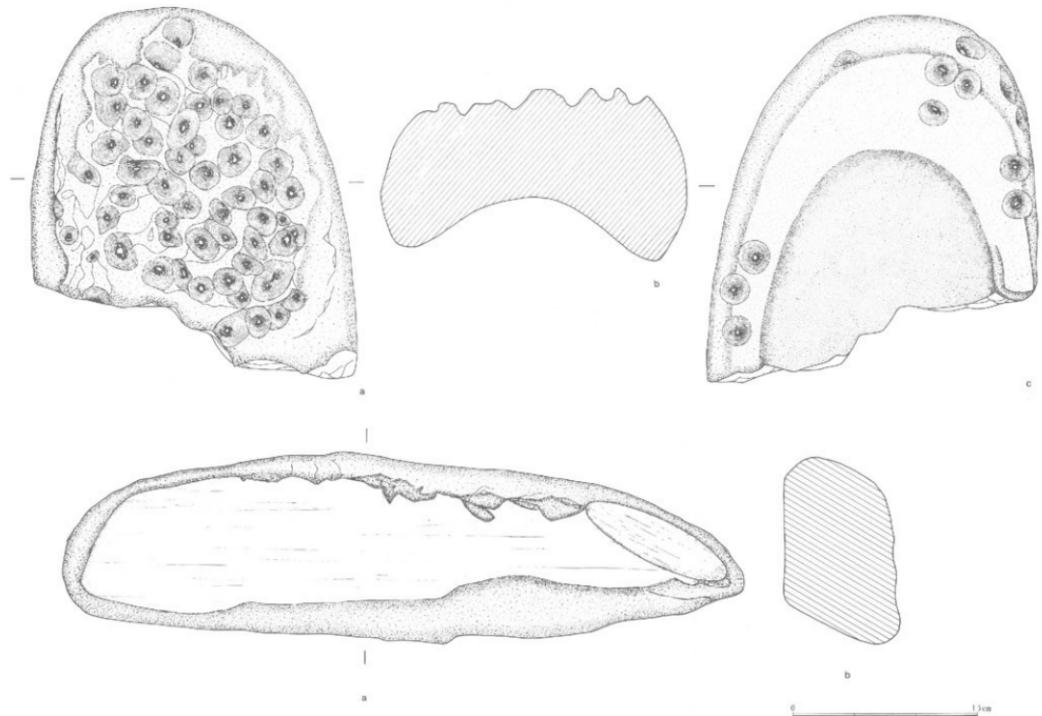
本土墳は、出土土器の特徴から、縄文時代中期後葉に属するものと考えられる。



第七五図 第五号土壤実測図・遺物出土状態図



第七六図 第五号土壤出土土器拓影図



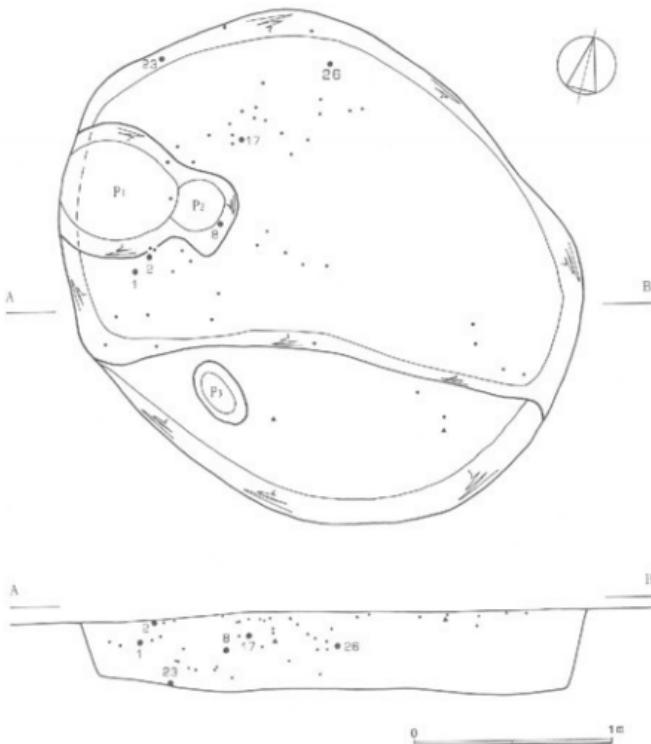
第七七圖 第五號土塋出土石器實測圖

7 第七号土壤 (第七九・八一図、図版第五三)

本土壤も、第7グリットと第8グリットの拡張によって検出されたものであるが、西側の一部は完掘できなかった。本土壤に接する東側には深さ9cmの浅い掘り込みが存在する。

平面プランは、おそらく不整梢円形を呈するものと思われるが、東西径は不明、発掘部の東西径153cm、南北径270cm、深さ48cmである。底面も梢円形を呈するものと考えられるが、南東壁の掘み込みだけはフ拉斯コ状である。壁面の崩落は認められない。埋没土は黒褐色土の単一層である。底面の中央部付近にピット1個が存在する。口径45×45cm、深さ24cmである。

遺物の出土状態は極めて散発的で空白部分が多く、中央部付近にややまとまりを示す程度である。遺物総数は28個で、完掘したとしてもそう多くはないだろう。内訳は土器破片21個、自然石7個である。出土した土器は磨消しの手法を用いた深鉢形の土器群である。



第七八図 第六号土壤実測図・遺物出土状態図

本土壙の時期は、縄文時代中期後葉に比定できると思う。

8 第八号土壙（第八〇・八一図、図版第五四）

本土壙は、第8号グリット東側拡張部より検出された。東側開口部の一部は道路下に埋没する。

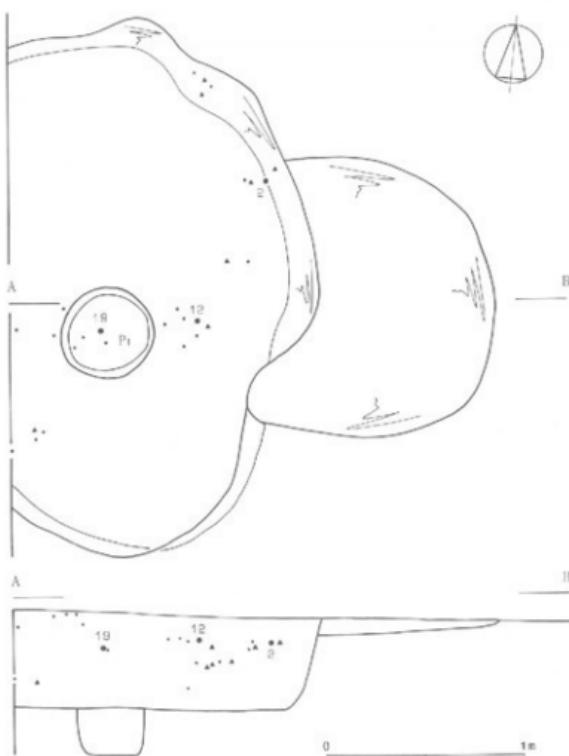
形状は長椭円形で、東西400cm（推定）、南北240cm、深さは中心部で55cmを測る。

底径は、東西340cm、南北220cm、底面は不整形である。

断面形を観察すると、周壁はゆるやかな傾斜で斜めに掘り込まれ、西側が深く東側が浅い。

壁面の崩落は認められない。底面には凹凸があり硬度は2程度である。

底面の南東部にピット1個が存在する。口径100×90cm、深さは45cmである。埋没土は3層に区分される。Iは微量のローム粒子を含む黒褐色土、IIはローム粒子とロームブロックを多量に混入する褐色土、IIIは暗褐色土である。この層相は短時日の埋め戻しによるものである。



第七九図 第七号土壙実測図・遺物出土状態図

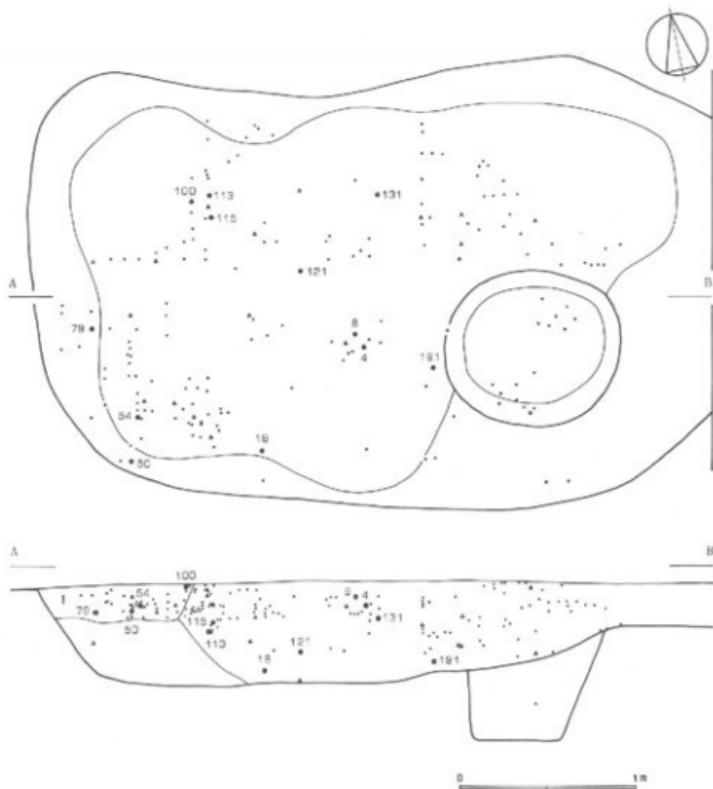
遺物の出土状態を平面分布に記録したドットで観察すると、北東、北西、南東の壁際の出土は皆無であるが、特に南西側に集中する傾向を指摘できる。

これを断面図に投影すると、この傾向を一層明確に捉えられる。

遺物総数は193個で、内訳は縄文土器破片174個、石器2、自然石17である。土器破片174個の表裏関係は、表75個(43%)、裏63個(36%)、立ち36個(21%)という比率になる。

土器の器種、器形は磨消しの手法を用いた中期後葉の深鉢形土器群である。

本土壙は、出土土器の特徴から、縄文時代中期後葉に属するものと思われる。



第八〇図 第八号土壤実測図・遺物出土状態図



第八一図 第六号（上段），七号（中段），八号（下段）土壤出土土器拓影図

第一一章 有床平地式住居址の調査

第11グリットの拡張が進行するにつれて、確認面から多数のピットと石組炉を検出した。

表土から確認面までの深さは90cmを測るので、炉の破壊は軽微であった。その炉を中心に33個のピットが検出され、有床平地式住居址の可能性がきわめて高くなつた。

33個のピットのうち、住居址の主柱穴と思われるピットはP1～P7で、これをつなぐと7角形になるが、南側の末発掘部にもう1個の柱穴が埋没している可能性もあるので、石組炉を中心に8角形状になることも考えられる。

7個の柱穴の規模と位置関係は次のとおりである。

柱穴番号	長径	短径	深さ	柱穴間の距離
P ₁	30cm	20cm	44cm	P ₁ —P ₂ 85cm
P ₂	35cm	24cm	43cm	P ₂ —P ₃ 85cm
P ₃	28cm	26cm	21cm	P ₃ —P ₄ 105cm
P ₄	24cm	24cm	63cm	P ₄ —P ₅ 90cm
P ₅	21cm	15cm	34cm	P ₅ —P ₆ 110cm
P ₆	19cm	18cm	40cm	P ₆ —P ₇ 95cm
P ₇	21cm	20cm	40cm	

これらの規模と位置関係、さらに各柱穴を結ぶ範囲の床面（確認面）は、硬度3に近い硬さに踏み固められていることなどから総合的に判断して、有床平地式住居址と見做して大過ないよう思われる。

表記した以外の柱穴も補助的な役割りを果していたかもしれない。

中央部のやや東寄りの位置に石組炉が存在する。石組炉の平面形は、長径65cm、短径55cmで、形状は梢円形である。

焚口および燃焼部は床面を掘り深め、炉心部の深さは22cmを測る。埋没土は焼土粒子を多量に混入した赤褐色土が堆積していた。炉の南側には8個の礎が半円形に組まれており、北側には花崗岩が1個置かれている。礎はいずれも火熱を受けて焼けており脆くなっている。

拡張部の南壁寄りにも礎13個を円形に組んだ、長径45cm、短径35cmの石組炉を検出したが、完掘できなかったので、住居址に隣接するものか屋外の単独炉なのか判然としない。

石組炉に伴う土器は出土しなかったが、前述の7個の柱穴を結ぶ範囲内から36個の遺物が出土した。出土レベルはすべて床面（確認面）である。出土遺物の内訳は、縄文土器破片31個、自然石5個を数える。

出土土器の器種、器形をみると、磨消しの手法を用いた平縁やキャリバー状の深鉢形土器が多

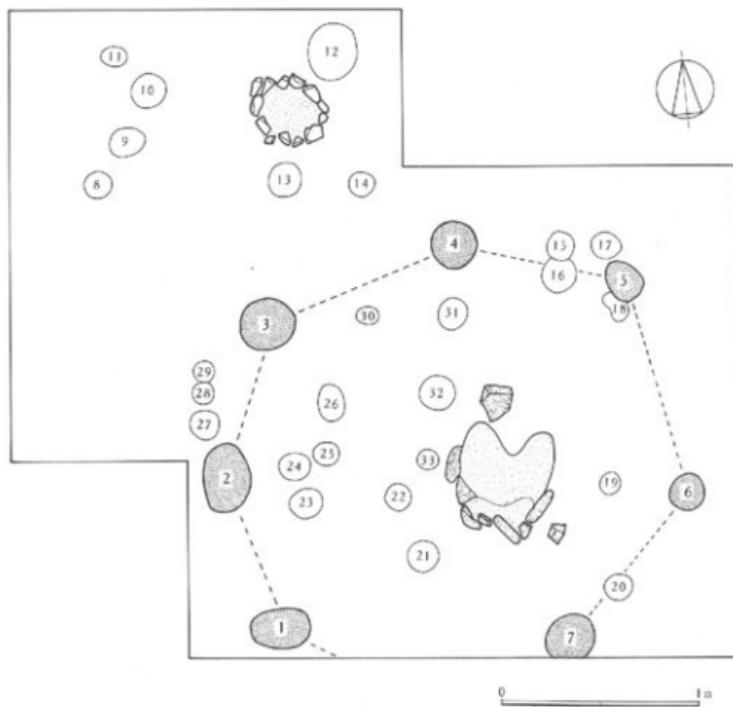
い。また、表土中から、石棒1個と石剣1個が出土している。

石棒は上半部を欠損している破損品で、現存長13cm、断面形は円形で直径2.2cmである。全体が滑らかに研磨されている。

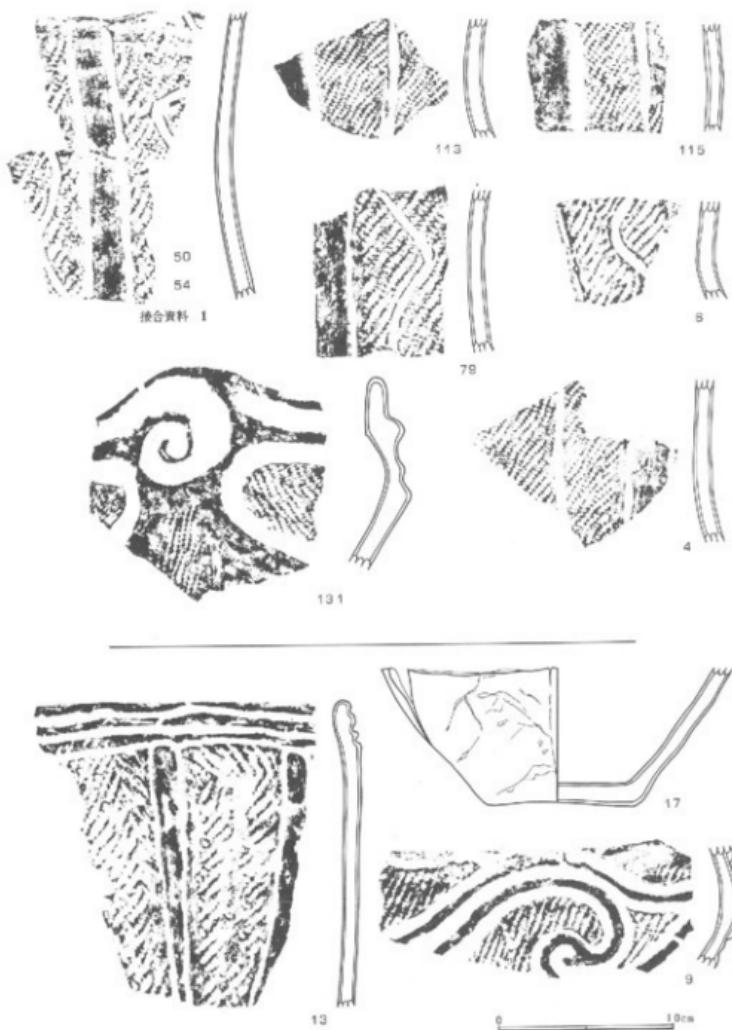
石剣（石刀かもしれない）は小型の完形品で、長さ21cm、幅2.2~3.4cm、厚さ1.5cmである。

両者とも泥岩を利用している。

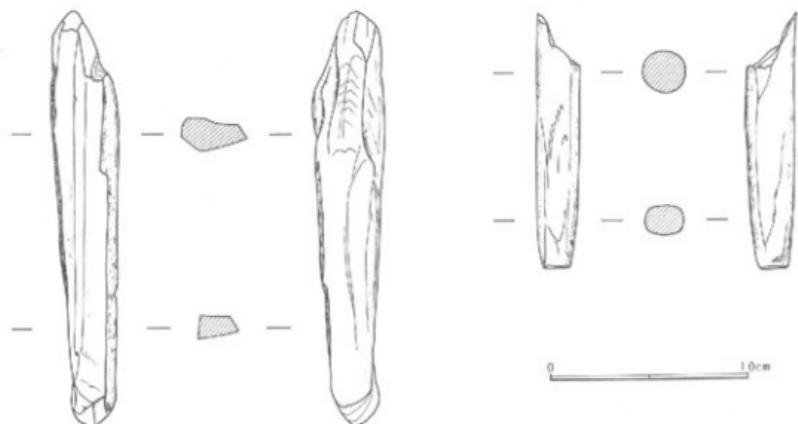
本址は、縄文時代中期後葉に属するものと考えられるが、石器の特徴をみると晩期に及ぶかもしない。



第八二図 有床平地式住居址実測図



第八三図 第八号土塙（上段），有床平地式住居址（下段）出土土器実測図・拓影図



第八四図 第11グリット（有床平地式住居址）出土石器実測図

第一二章 近世境界塚の調査

当地方には「北山に境塚がある」という伝承があった。しかし、足を踏み入れることもできない雑木と藪やぶが繁茂する奥に所在したためその位置が不明であった。

今回、調査に先立って行われた伐開作業によってその姿を現わした。

保存状態は良好で、円墳状の原形をほぼ留めているが、西側の裾部は若干削られた痕跡がある。

調査の方法は、塚およびその周辺に灌木類、藪などが全面に生い茂り、写真撮影や測量作業に著しく支障をきたすために、まずこれらの伐採、刈り払い作業を行った。

塚の記録写真撮影後、千種重樹、水谷正、飯島栄子の3名で塚の実測作業に着手した。

頂上部に立って観察すると円墳状に見えたが、^{くわいとう}塚形の詳細をより明確に把握するために、20cmコンターによって作図することにした。

測量が進行するに従い、円墳状を呈してきて、測量が終了した時点で円墳状であることを断定することができた。

測量作業終了後、塚全体に東一西、南一北方向に十字のセクションベルトを設定して、古墳の可能性も考えながら盛土の排土を行い、整成状態を観察記録した後に、盛土を全面除去することにした。

盛土の範囲は、A-Bセクションで計測すると約7m、厚さ（高さ）はローム面から約2mを計測した。封土の層序は、断面で観察すると4層に大別できる。

盛土は、黒色土、褐色土、黒褐色土、表土の順に積み重ねて整成している。特に裾部付近は、黒色土が多く使われた痕跡がみられる。

この層序は単純で、埋葬施設や主体部の発見に努めたけれども、ついにその痕跡すら確認することができなかった。この時点で、伝承どおり直徑7m、高さ2mの境界塚であることが明白になった。

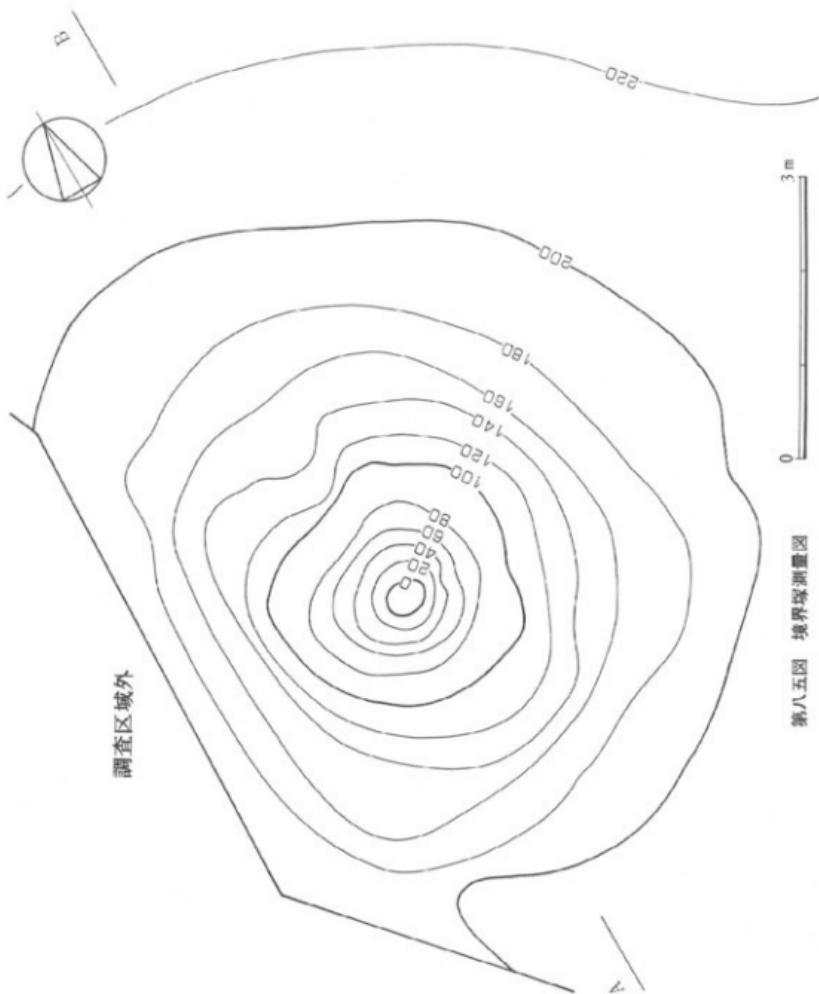
元禄8年（1695）、上野国那波郡戸屋塚村が原告、同郡沼上村が被告にあたる村境争論の民事裁判が行われた。3奉行（評定所）が戸屋塚村の申し分を理と認め、絵図に墨を引いてそれに押印し、さらにその裏に判決文を記した事実がある。

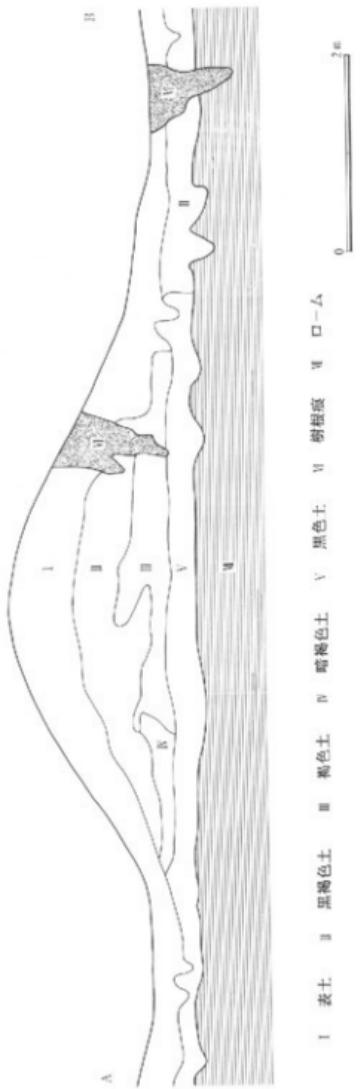
北山に関してはこうした古文書は見当らないが、類似の騒動がなかったとはいはず、標識的性格の強い塚として大過ないようと思われる。

盛土内の遺物は、縄文土器小破片5個と須恵器（壺形土器胴部）小破片1個にすぎない。

断面実測後、すべて除去してローム面の精査を行った。その結果、複数とは違う色調の変化が小範囲に認められたが、後半の長雨に災されて意外に調査日数が伸びていたので、この調査は遺憾ながら断念せざるを得なかつた。

第八五圖 境界線測量圖





第八六図 境界線A-Bセクション(南北)断面図

第一三章　ま　　と　　め

北山不動遺跡の発掘調査の概要是、以上に記述してきたとおりである。しかし、遺跡全体の規模からみれば、今回発掘を行ったA・B両地区の調査範囲はその一部分であって、この結果からただちに本遺跡の全容を推定することは不可能である。

けれども、A地区からは縄文時代中期の堅穴住居址、縄文時代中期中葉～後葉の土塙、屋外埋壺、石組が、B地区からは縄文時代中期中葉～後葉の土塙、有床平地式住居址、近世境界塚などを発見して、当初に予想した以上の考古学的情報を獲得することができた。

以上のことから本遺跡は、縄文時代中～後期に形成されており、時期的には大部分が、中期後半の加曾利EⅡ～Ⅲ式期に属するものと思われる。

なお周辺には、まだ相当数の土塙が存在し、このなかにはおそらく後期の土塙も含まれると考えられるが、今次の調査で本遺跡の片鱗は窺知することができたと思う。

先般行われた石岡市東大橋原遺跡の事例によると、遺跡の中央に土塙群があり、その周辺に住居址群をもつ集落の存在が確認されている。

本遺跡の場合を考えてみても、A・B両地区を合わせて検出された土塙だけでも40基が群集しているという事実は、一部の例外を認めるにしても、東大橋原遺跡と同様に、土塙群の周辺を居住区域と想定してよいかもしれない。

こうした造構は、調査区に隣接する南東側の栗林（約7,000m²）にも確実に拡散しているので、この区域だけを考えても、大集落遺構が埋没しているように思われる。

検出された土塙の平面的な形状については、円形のものが多く、不整円形または梢円形状もあるが、基本的な形態は円形である。

今回の調査では両地区から袋状（フラスコ状）土塙が数例発見されたが、多年、栃木県で土塙群の調査に従事している塙静夫氏や、那珂湊市在住の井上義安氏は、袋状土塙は中期前半の阿正台式～加曾利EⅠ式期に盛行すると説明している。

本遺跡の大部分は、中期後半～後期に移行するU字形を呈したものが多く、出土土器のなかには、東北南部の大木8b式の装飾手法を採用しているものもあり、こうした土塙の内容は、茨城県の中央部および北部の縄文中期後半の一つの在り方を示す事例と考えられ、今後友部地方における該期研究の資料として活用されれば幸いである。

境界塙については、測量と発掘調査の結果から考え合わせると、古墳であることを立証できるような埋葬施設も主体部も全く認められず、盛土も単純で、関連する出土品も皆無であることから、伝承どおりの直径7m、高さ2mの円墳形境界塙であろう。

構築の時期は不明であるが、元禄年間に各地で村境争論が頻発し、幕府が裁訴を下した事例を

みれば、当地においてもこれに類似の行為がなかったとはいえない。とすると、築造の時期はおそらく近世になるだろう。

石棒、石剣、大型の凹石、石皿、砥石などの出土も注目に値しよう。

先土器時代の石山神遺跡と指呼の間に位置する北山不動遺跡は、友部町の原始・古代の歴史を叙述する上で、極めて重要な地位を占めるものと考えられる。

末筆ながら北山不動遺跡の発掘調査報告書を上梓するにあたり、第一次・第二次調査を通じて発掘から遺物整理が終るまで、友部町教育委員会社会教育課、町水道課、同建設課、文化財保護審議委員の方々からあたたかいご高配とご協力を賜ったことに対し、深い感謝の意を捧げる次第である。

また、地元作業員の方々の真摯で意欲的なご協力や、御来跡いただいた茨城県水戸教育事務所生涯学習課文化財担当社教主事曾根秀嗣氏をはじめ、斯界の各位にも記して謝意を表するものである。

友部町北山不動遺跡発掘調査会役員名簿（A地区）

会長	宮山茂夫	友部町教育委員会教育長
副会長	大槻寿雄	友部町文化財保護審議会会长
理事	飯島富重	友部町教育委員会事務局長
同	千種重樹	主任調査員(茨城県埋蔵文化財指導員)
同	小谷清治	友部町文化財保護審議会委員
同	白田清郎	同
同	井東温	同
同	飯田龍	同
同	飯島武	同
同	足立耕作	同
同	成田正三	友部町教育委員会社会教育委員長
幹事	石井和次	友部町教育委員会社会教育係
同	枝川良雄	友部町教育委員会社会教育主事

発掘作業從事者

調査員	千種重樹	(団長)		
作業員	木村晃	渡辺幸友	横井義夫	桑島四郎
	吉田正一	高輪隆夫	富田満	白井裕子
	菅野ミチ子	菅谷敬	原田敏子	須藤皓
	深谷喜三郎	<協力者>友部町水道課職員		

遺物整理・報告書作成從事者

千種重樹

事務局 友部町教育委員会

指導及び関係機関

茨城県教育委員会（文化課 文化財第二係）

茨城県水戸教育事務所（社会教育課）

友部町北山不動遺跡発掘調査会役員名簿（B地区）

会長	宮山茂夫	友部町教育委員会教育長
副会長	大槻寿雄	友部町文化財保護審議会会长
理事	鈴木登	友部町教育委員会事務局長
同	千種重樹	主任調査員（茨城県埋蔵文化財指導員）
同	小谷清治	友部町文化財保護審議会委員
同	白田清郎	同
同	井東温	同
同	飯田龍	同
同	飯島武	同
同	足立耕作	同
同	成田正三	友部町教育委員会社会教育委員長
監事	桜井一義	友部町建設課
同	横田文夫	友部町会計課
幹事	高安行男	友部町教育委員会生涯学習係長
同	鶴田宏之	友部町教育委員会生涯学習係
同	金木雄治	同

発掘作業従事者

調査員	千種重樹	(同長)
補佐員	水谷正	飯島栄子
作業員	富田満	桑島四郎
	白井裕子	引田秀子
	須藤皓	中崎里美
	渡辺幸友	柳岡悦子
		原田敏子
		横井義夫

遺物整理・報告書作成従事者

千種重樹 飯島栄子

事務局並びに指導等はA地区に同じ

図 版

A 地 区



遺跡の遠景 <北西側より>



遺跡より眺めた東方の景観



遺跡の現状 <南側より>



発掘調査後の遺跡の全景 <東側より>



現地説明会風景（外国人も参加）<第四号埋葬炉址付近>



発掘調査風景<第二一、二三、二七号土壤付近>



発掘調査風景 <第4号土壤付近>



第1号トレンチ試掘風景 <西側より>



第1号トレンチ試掘風景 <西側より>



第2号トレンチ試掘風景 <西側より>



第2号トレンチ試掘後の状況 <西側より>



第3号トレンチ試掘風景 <西側より>



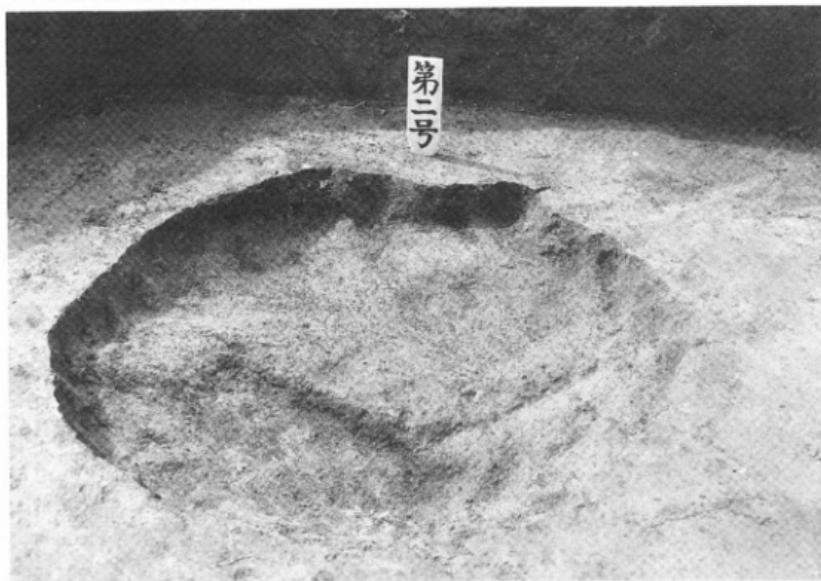
第3号トレンチ試掘後の状況 <西側より>



第一号土壤遺物出土状態 <南側より>



第一号土壤全景 <南側より>



第二号土壤全景 <南側より>



第三号土壤全景 <南側より>



第四号土壤遺物出土状態 <東側より>



第五号土壤遺物出土状態 <南側より>



第六号(上), 第七号(下)土壤遺物出土状態 <東側より>



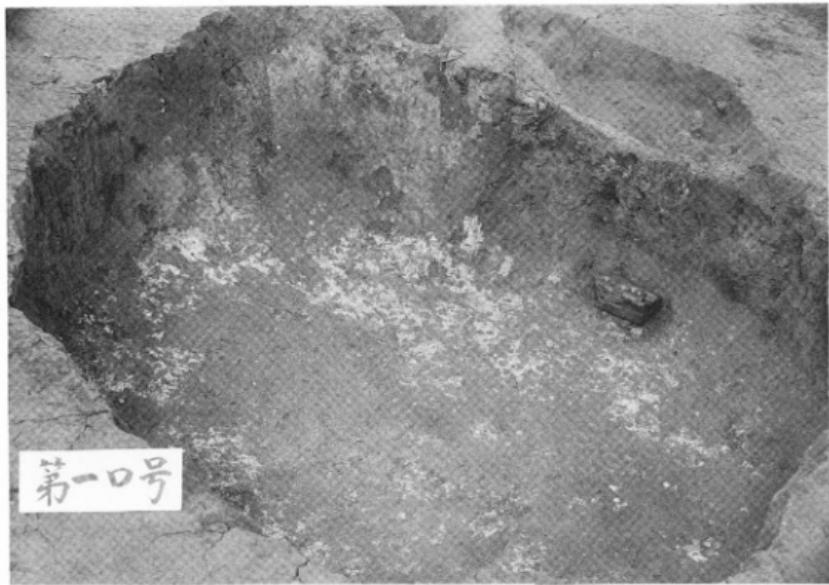
第七号土壤遺物出土状態 <西側より>



第八号(下), 第九号(上) 土壤遺物出土状態 <西側より>



第一〇号土壤遺物出土状態 <東側より>



第一〇号土壤凹石出土状態 <西側より>



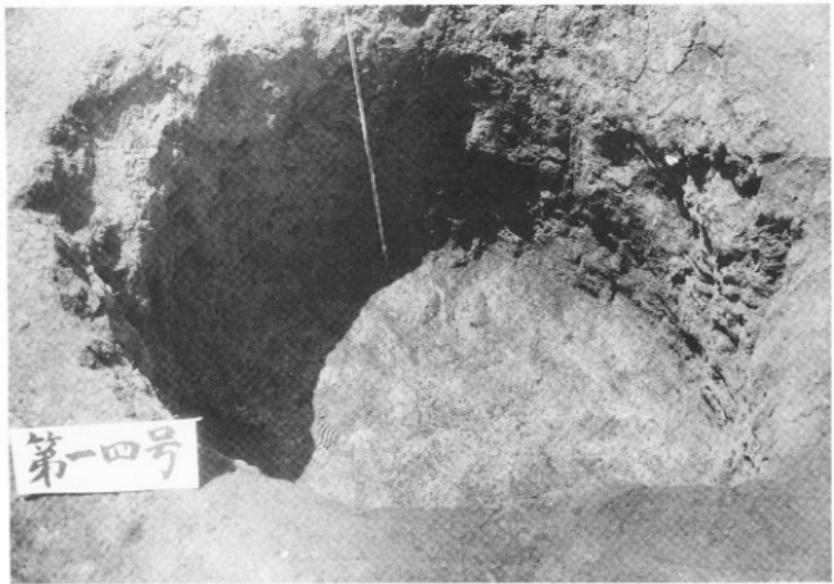
第十一号土壤遺物出土状態 <南側より>



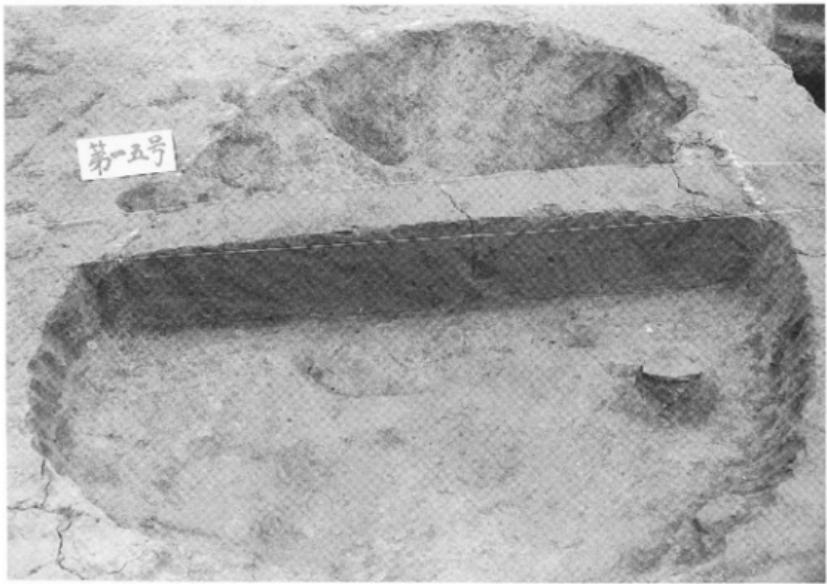
第一一号土壤石斧出土状態 <東側より>



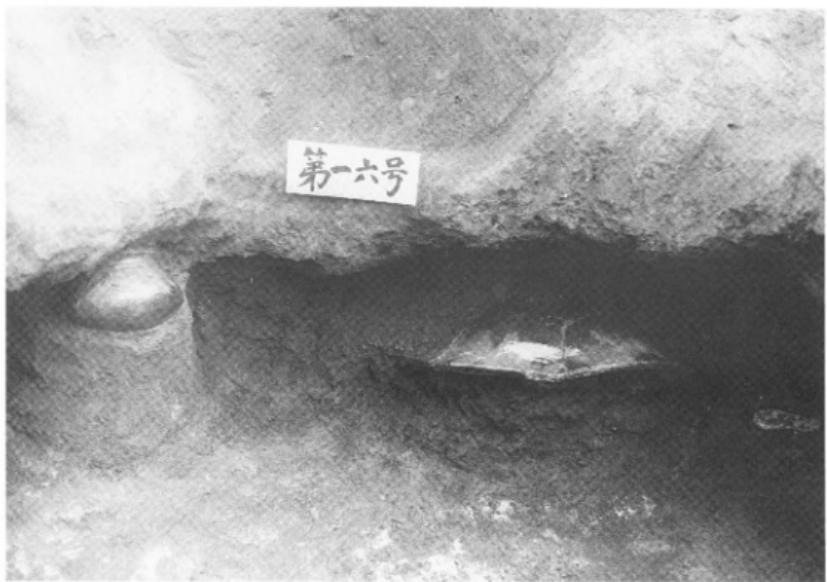
第一二号(下), 第一三号(上)土壤全景 <東側より>

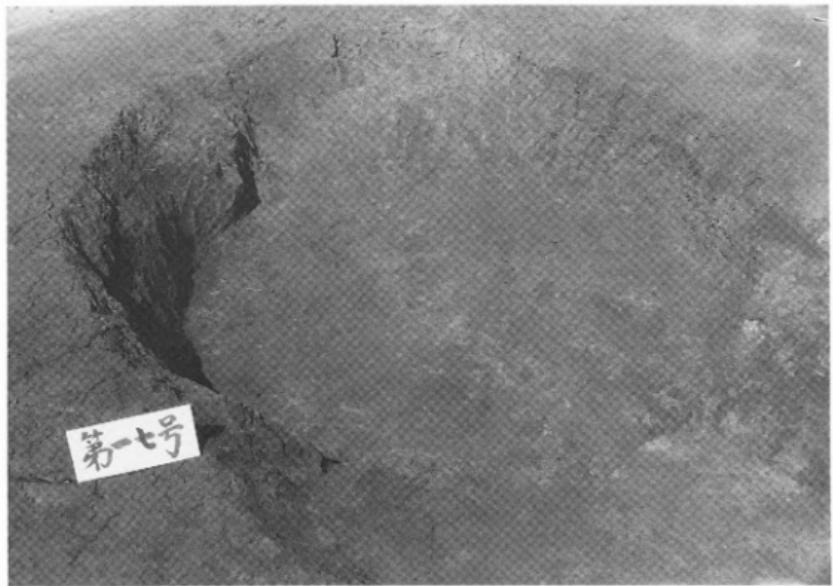


第一四号土壤全景 <南側より>

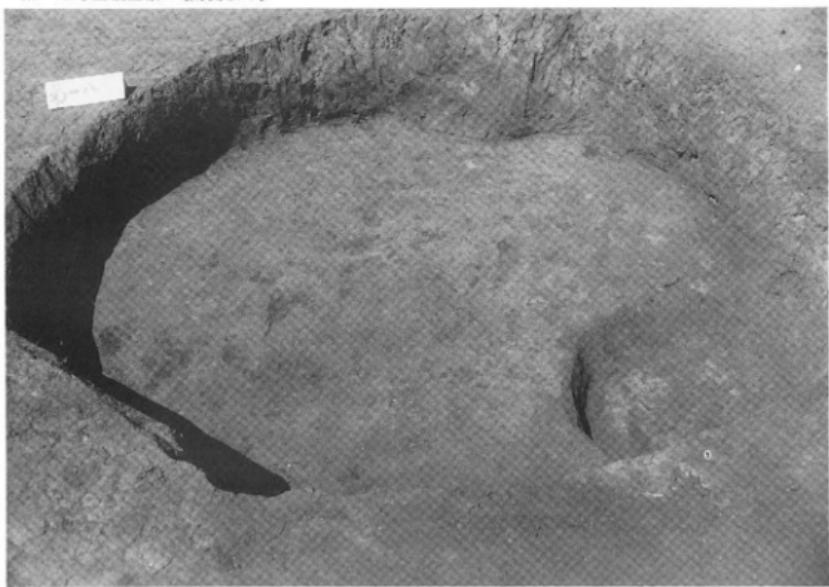


第一五号土壤全景 <南側より>





第一七号土壤全景 <南側より>



第一八号土壤全景 <南側より>



第一九号土壤遺物出土状態 <南側より>



第二〇号(下), 第二一號(上) 土壤遺物出土状態 <南側より>



第二二号(上), 第二三号(下)土壤遺物出土状態 <西侧より>



第二四号土壤遺物出土状態 <南側より>



第二四号土壤全景 <南側より>



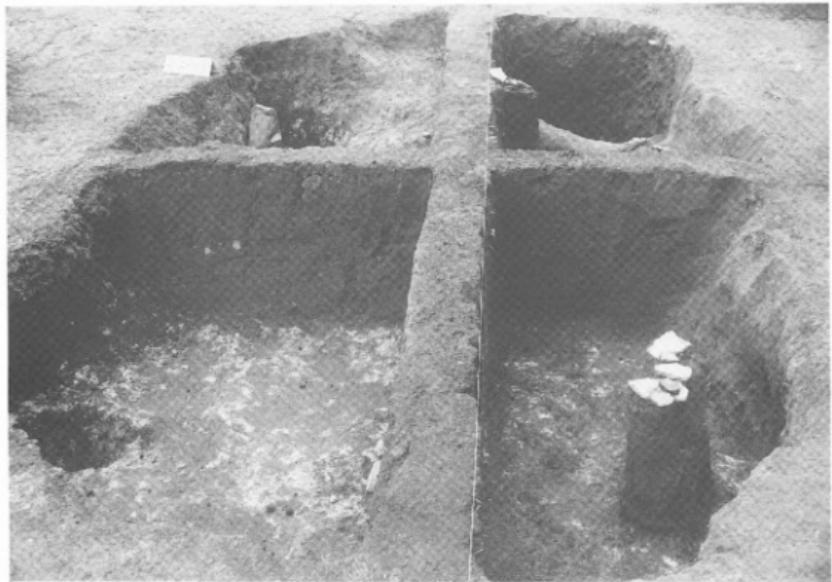
第二五号土壤遺物出土状態 <南側より>



第二六号土壤 A (上), B (下)全景 <南側より>



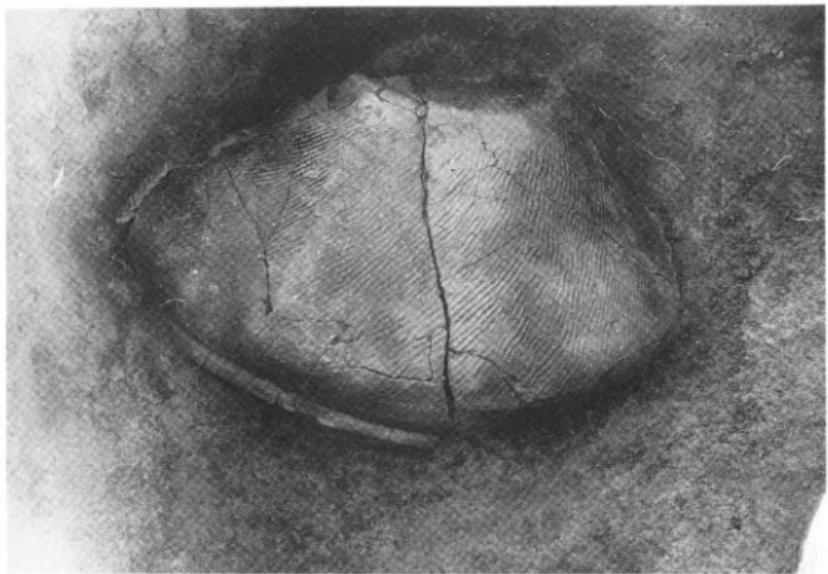
第二七号土壤遺物出土状態 <南側より>



第二八号土壤遺物出土状態 <東側より>



第二九号土壤遺物出土状態 <東側より>



第二九号土壤遺物（浅鉢形土器）出土状態 <西側より>



第三〇号土壤遺物出土状態 <西側より>



第三一号土壤遺物出土状態 <南側より>



第一号住居址全景 <南側より>



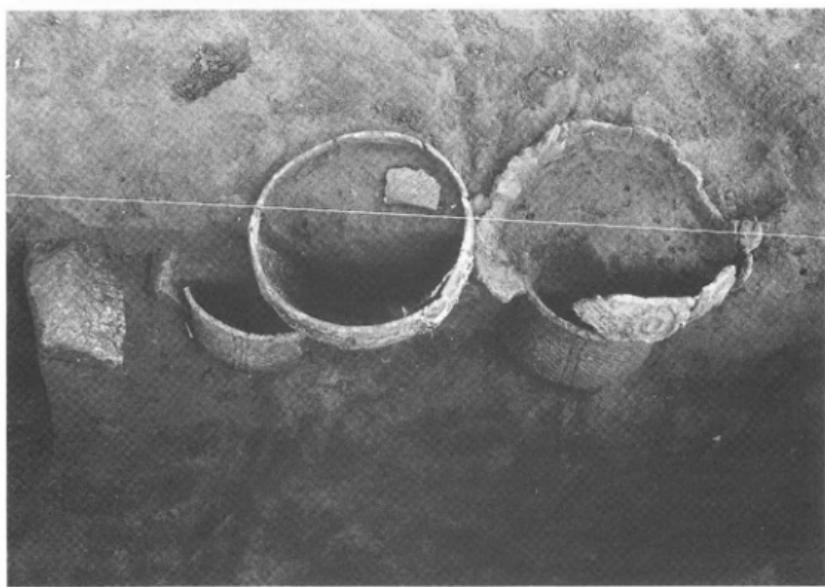
第一号埋甕炉址土器埋設状態 <南側より>



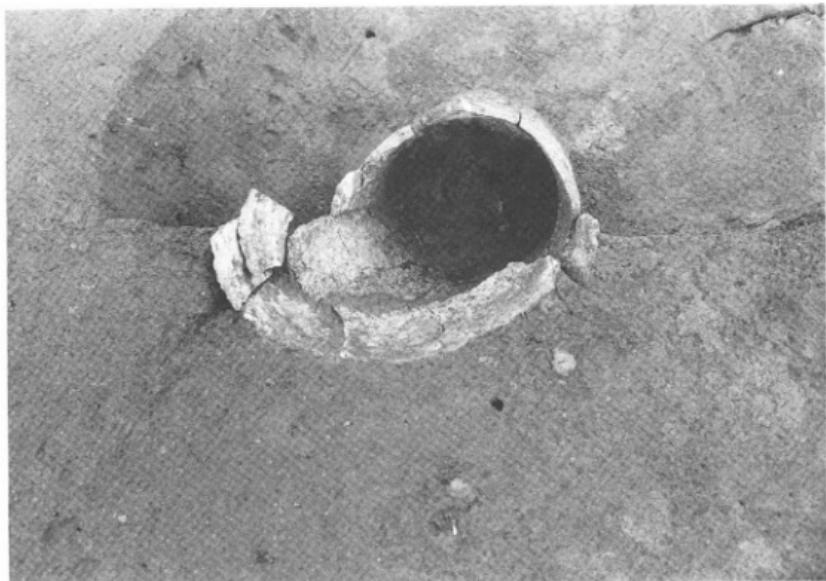
第二号埋甕炉址土器埋設状態 <南側より>



第三号埋甕炉址土器埋設状態 <西側より>



第四号埋甕炉址土器埋設状態 <西側より>



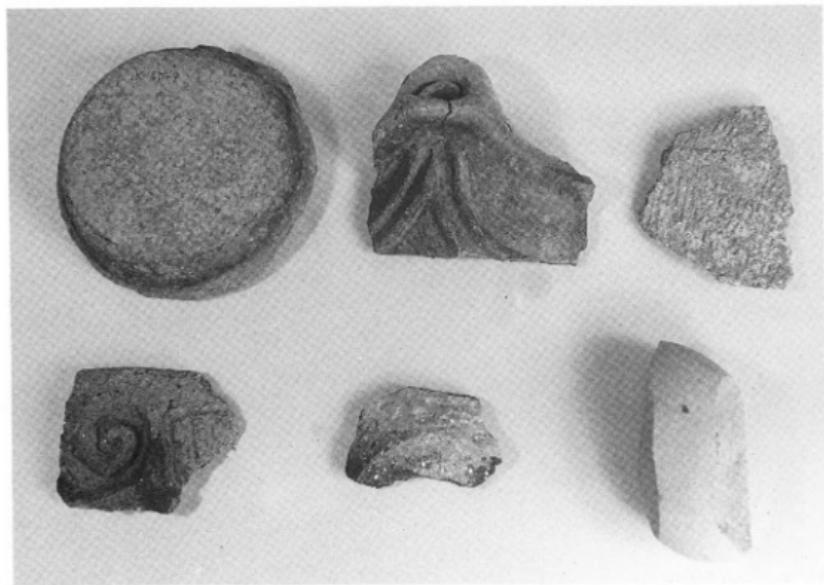
第六号埋甕炉址土器埋設状態 <南側より>



第一号石組炉址全景 <南側より>



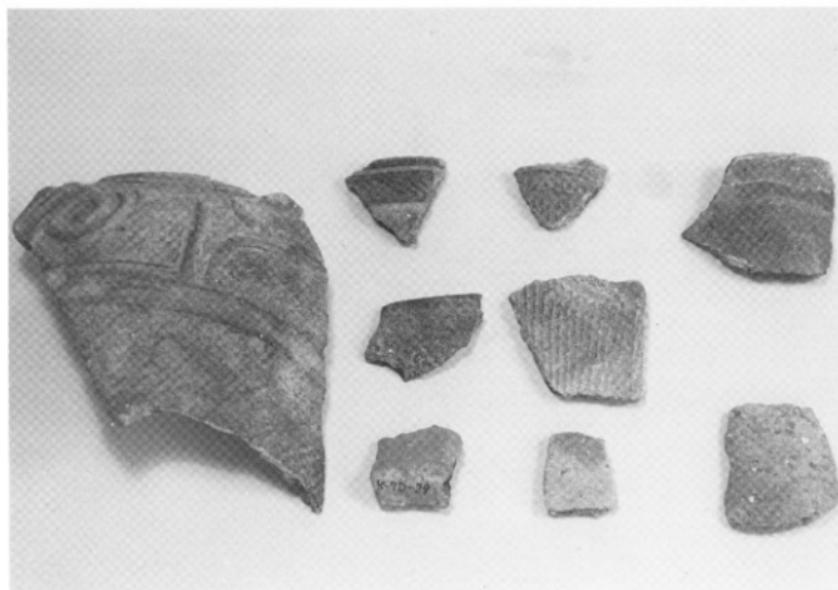
第一号土壤出土土器



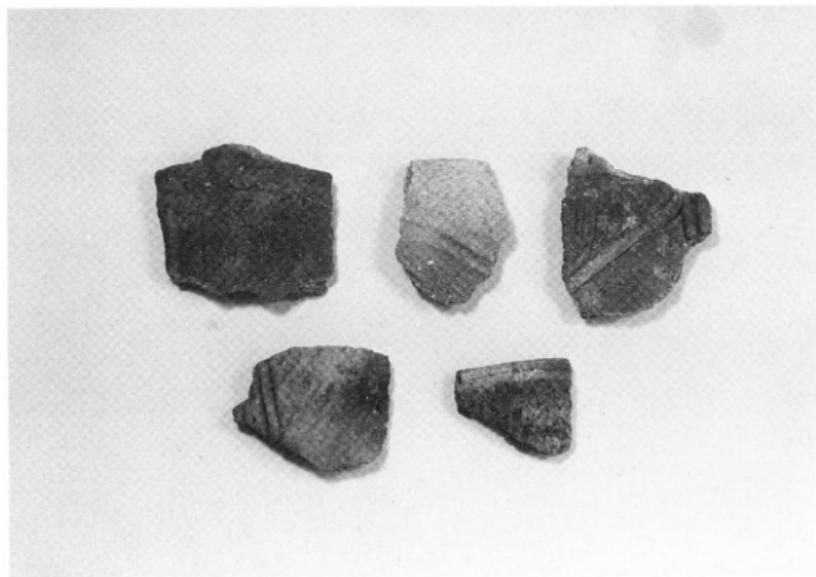
第四号（上），第五号（下）土壤出土土器·石器



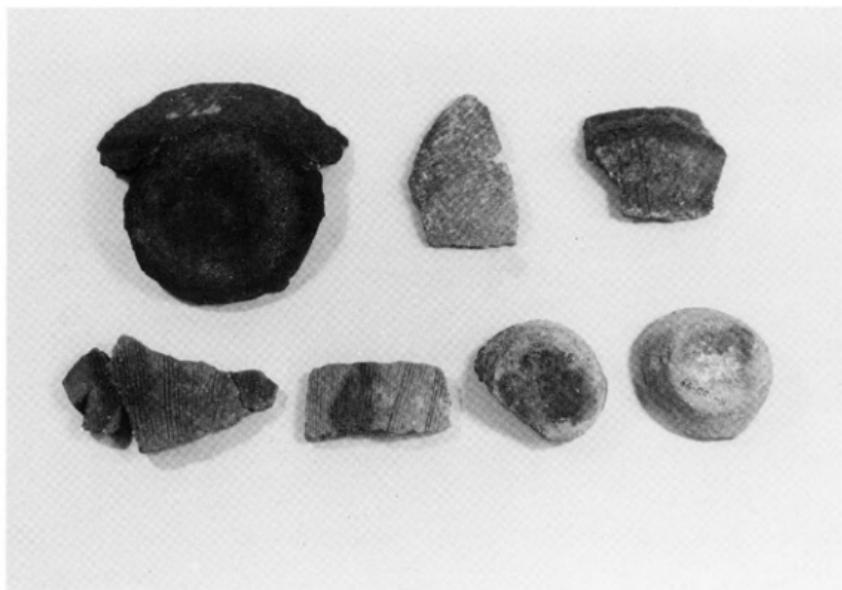
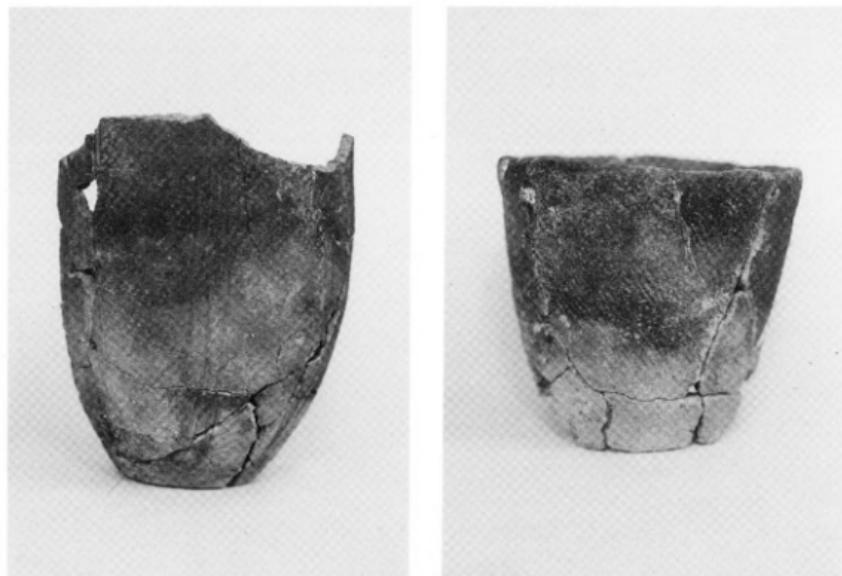
第五号（上）、第六号（下）土壤出土土器



第七号土壤出土土器



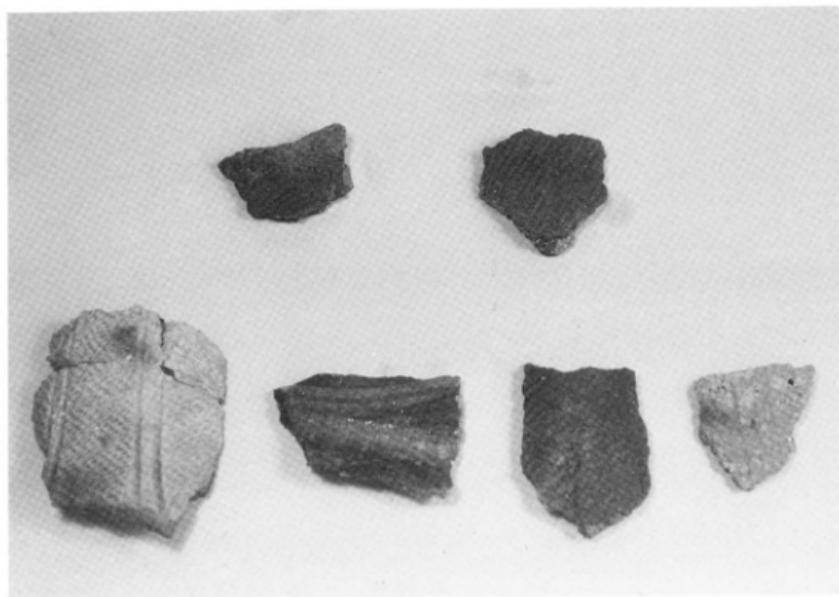
第八号（上），第一〇号（下）土壤出土土器



第一〇号土壤出土土器



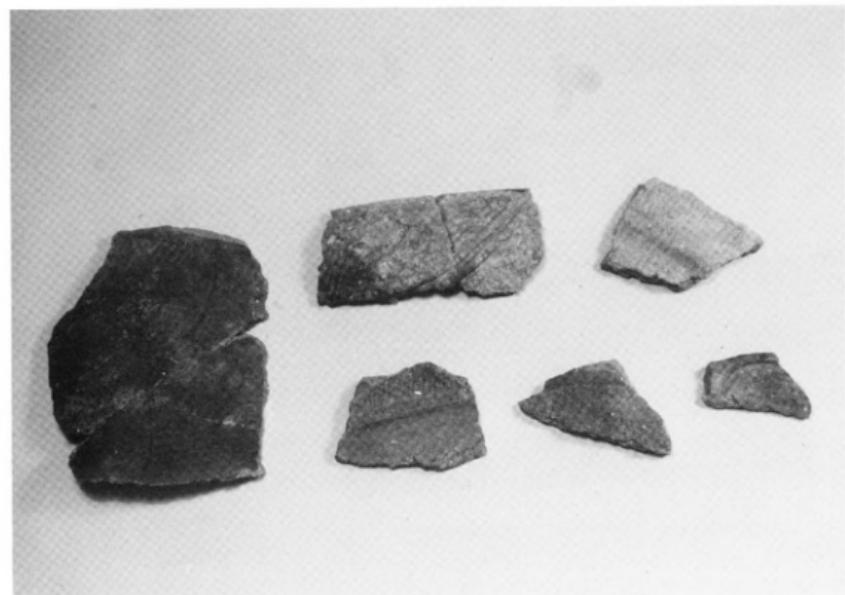
第一〇号（上），第一一號（下）土壤出土石器



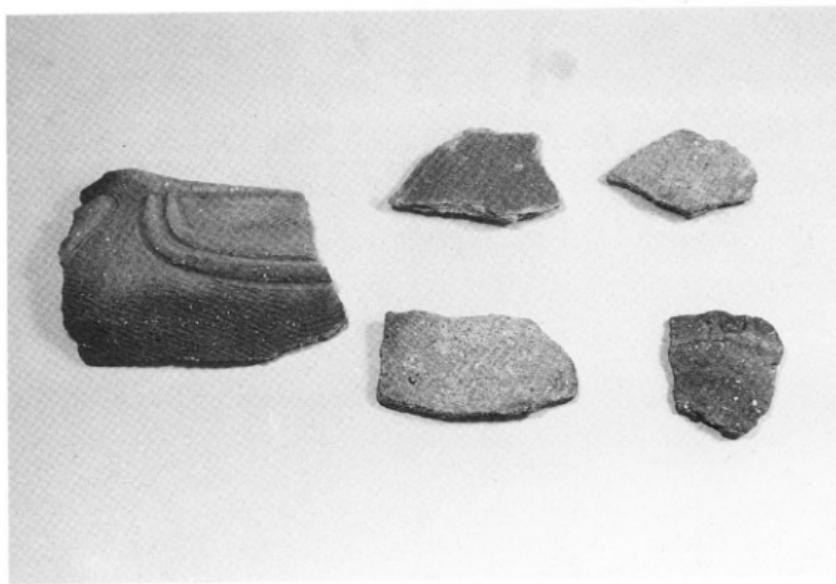
第一一號(上), 第一二號(中), 第一三號(下)土壤出土土器



第一六号土壤出土土器



第一七号（上），第一八号（下）土壤出土土器



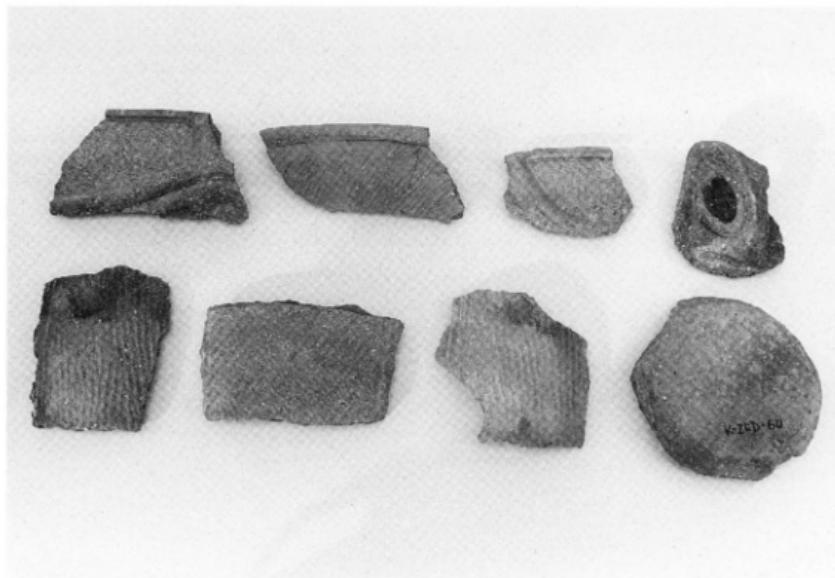
第一九号（上），第二〇号（下）土壤出土土器



第二二号（上）、第二三号（下）土壤出土土器



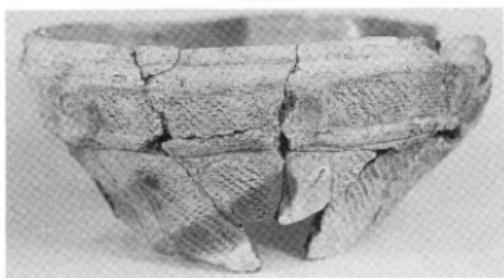
第二三号（上）、第二四号（下）土壤出土土器



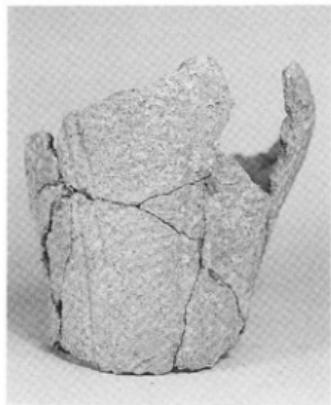
第二五号（上），第二六号（下）土塘出土土器



第二七号（上）、第二九号（下）土壤出土土器



第一号住居址出土土器



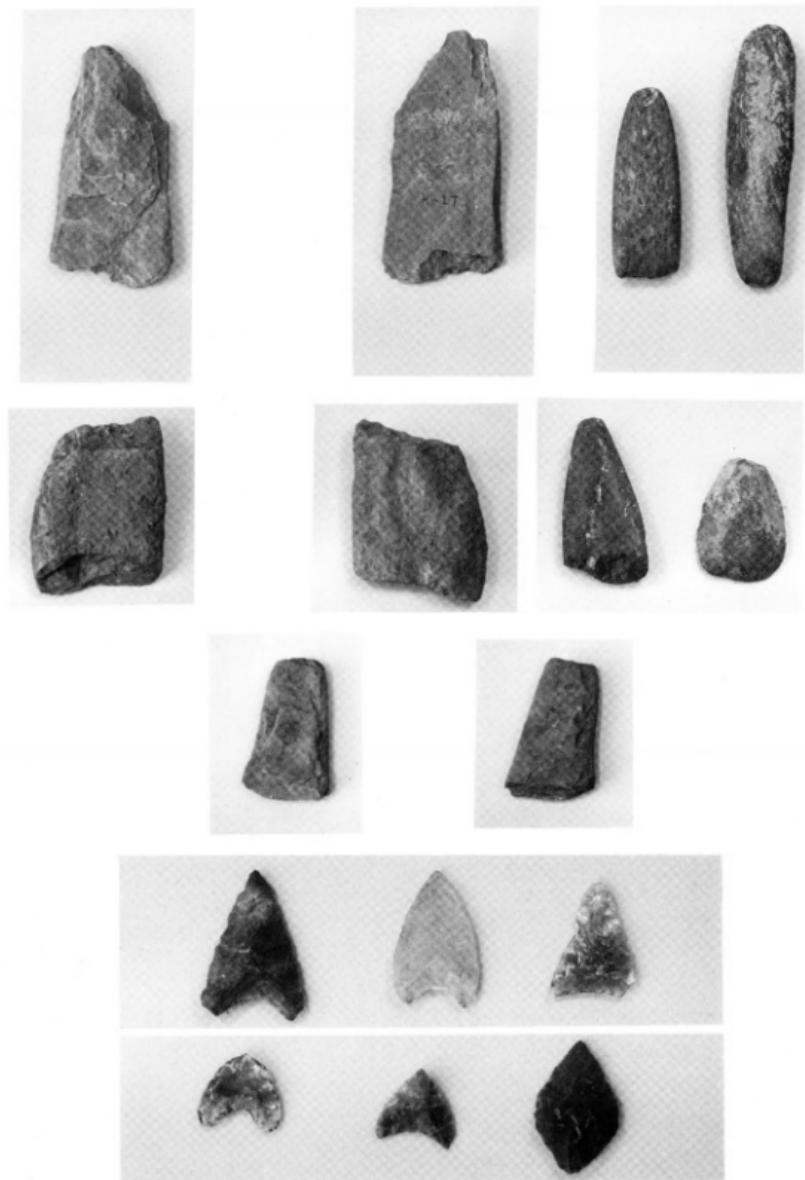
埋甕炉址出土土器（一）



埋甕炉址出土土器（二）



トレンチ出土土器・土製品



土塙・トレンチ出土土器

B 地 区



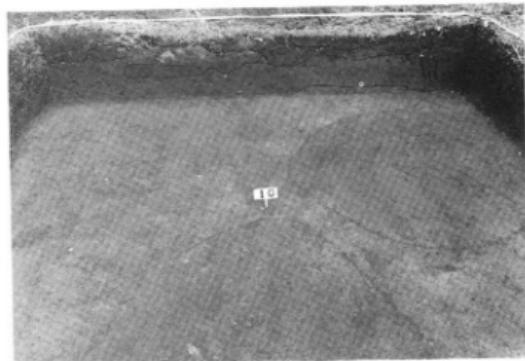
伐開後のB地区の現状〈南側より〉



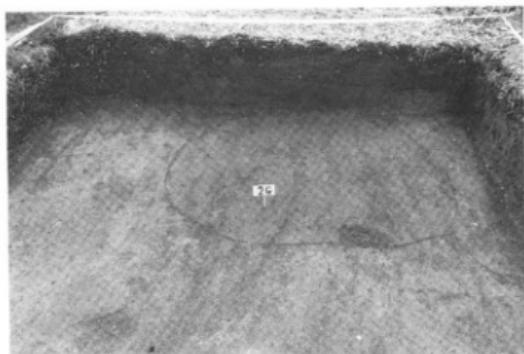
調査風景〈第一、二、三、号土壤付近・南側より〉



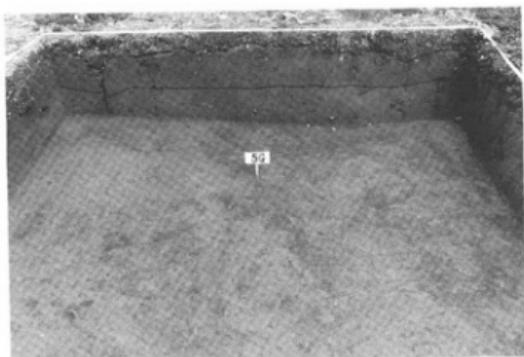
調査風景〈第7、8、9グリット付近・北側より〉



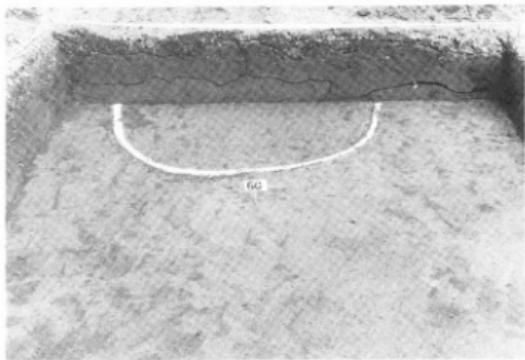
第1号グリット全景，土層断面〈南側より〉



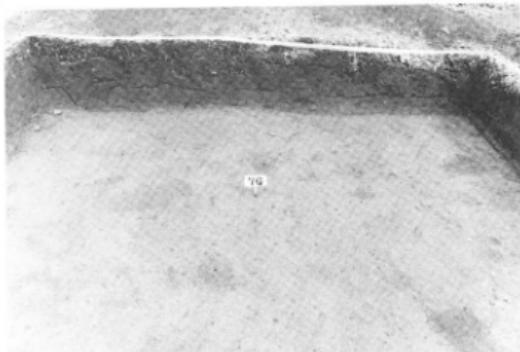
第2号グリット全景，土層断面〈南側より〉



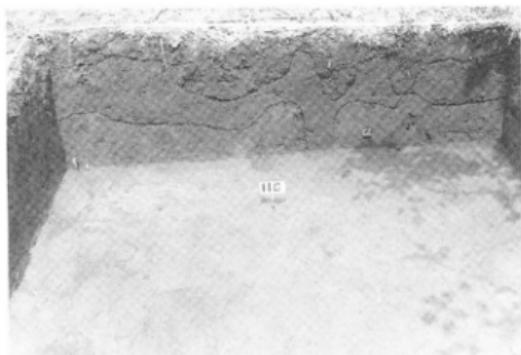
第5号グリット全景，土層断面〈南側より〉



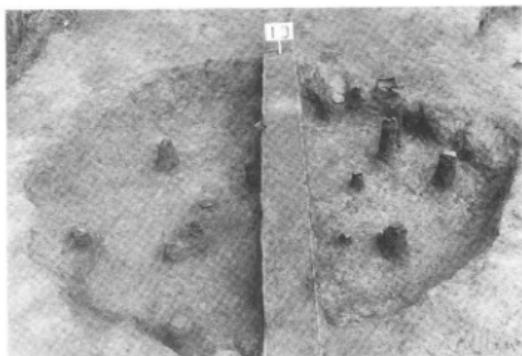
第6号グリット全景，土層断面〈南側より〉



第7号グリット全景，土層断面〈南側より〉



第14号グリット全景，土層断面〈南側より〉



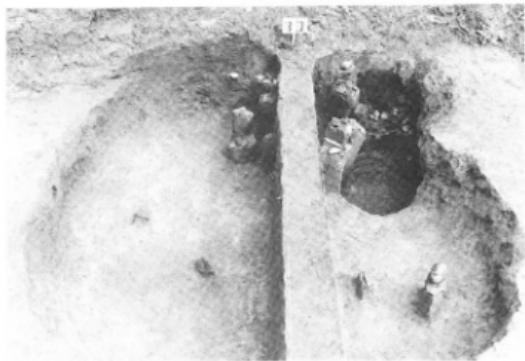
第一号土壤遺物出土状態〈西側より〉



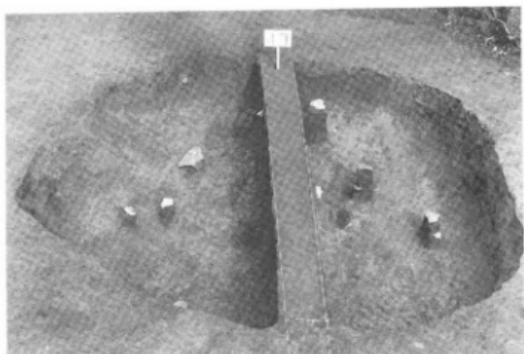
第二号土壤遺物出土状態〈西側より〉



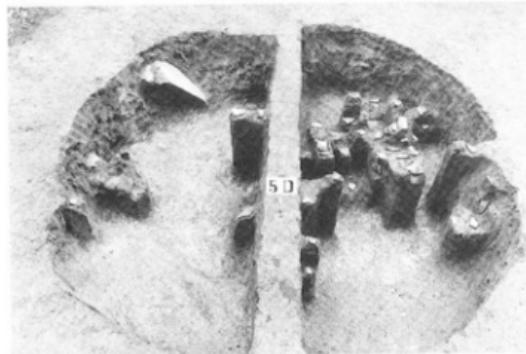
第二号土壤遺物出土状態〈東側より〉



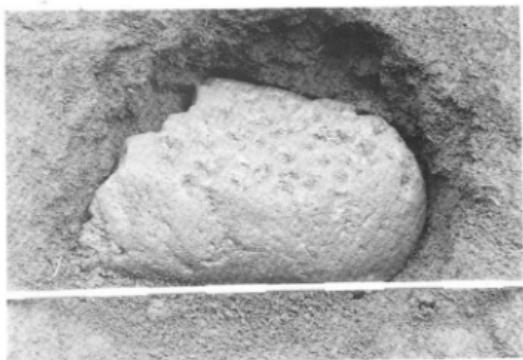
第三号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第四号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第五号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第五号土壤遺物出土状態〈南側より〉



第六号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第七号土壤遺物出土状態〈東側より〉



第八号土壤遺物出土状態〈西側より〉



第八号土壤遺物出土状態〈北側より〉



有床平地式住居址全景〈北側より〉



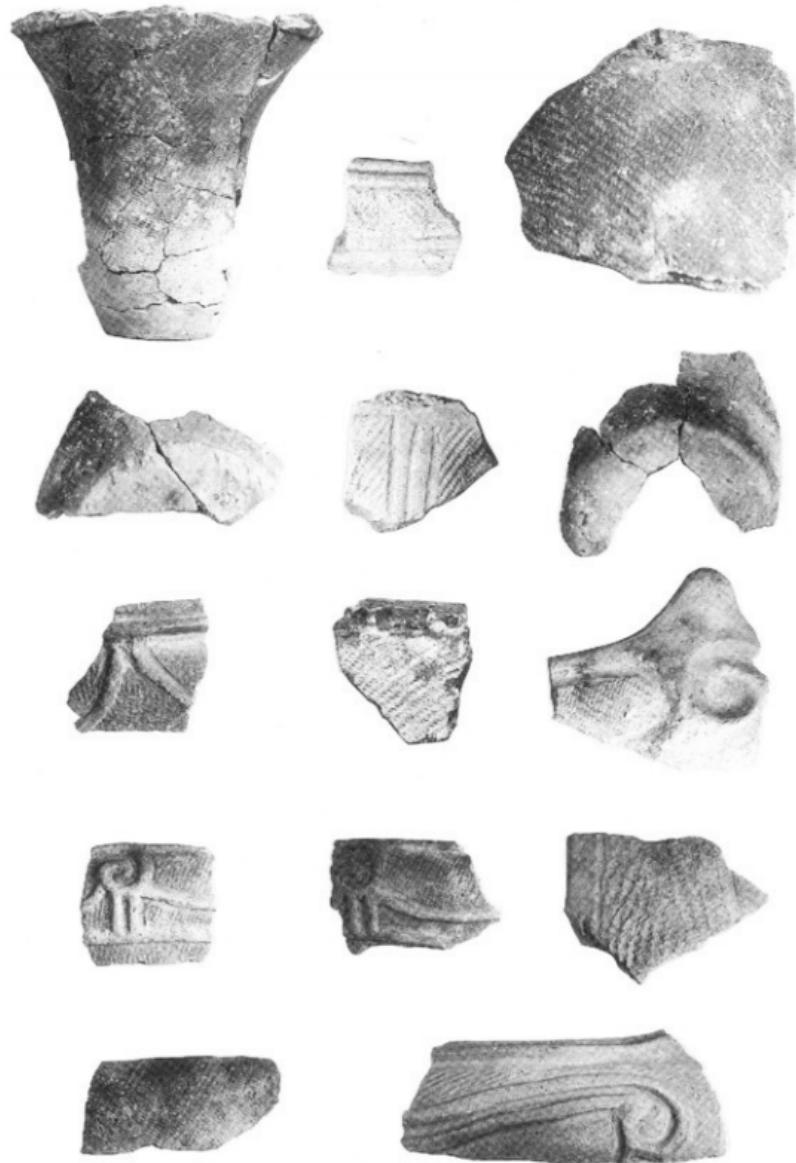
境界塚の現状（東側より）



境界塚の調査風景（北側より）



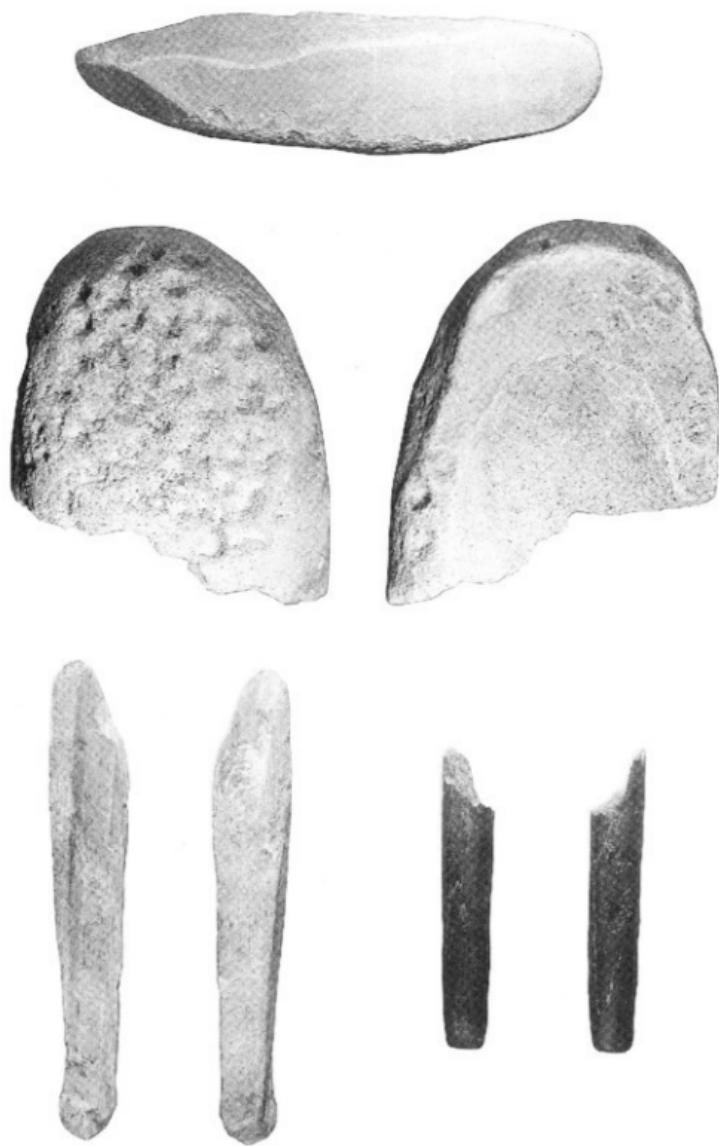
境界塚盛土土層断面（A-B セクション・東側より）



B 地区出土遺物(一)



B 地区出土遗物(二)



B 地区出土石器〈砾石，凹石，石皿，石针，石棒〉

北山不動遺跡

平成4年4月

編集千種重樹
発行 北山不動遺跡発掘調査会

印刷 石崎印刷株式会社

